



う何も無い。

パンドラの匣 於て書き記してある筈だし、此処で申上げて置きたい事は、も 少かったのではなかろうかと思われる。だから、読者も、 のである。 めの四、五回は少し勝手が違ってまごつくかも知れないが、し ている。 いても、 いる二十歳の男の子から、その親友に宛てた手紙の形式になっ 「パンドラの匣」という題に就ては、明日のこの小説の第一回に この小説は、「健康道場」と称する或る療養所で病いと闘って 手紙の形式はまた、 手紙の形式の小説は、これまでの新聞小説には前例が 日本に於いても多くの作者に依って試みられて来たも 現実感が濃いので、昔から外国に於 はじ

作者の言葉

そな挨拶をする男の書く小説が案外面白い事がある。

昭和二十年秋、

河北新報に連載の際に読者になせる作者

の言葉による。

甚だぶあいそな前口上でいけないが

しかし、こんなぶあい

君、もうすでに新しい幕がひらかれてしまっているのです。し 落ちつかない気持でした。こんな事を言うと、君は怒るかも知 まごついて、それから何だか恥ずかしくて赤面しました。妙に れないけれど、僕は君の手紙を読んで、「古いな」と思いました。 いないのだ。君からあんな、なぐさめの手紙をもらって、僕は

思い違いしちゃいけない。僕は、ちっとも、しょげては

幕ひらく

パンドラの匣

んなやけくそを起してこんな辺鄙な場所へ来てしまったという

健康道場にはいったのは、戦争がすんで急に命が惜しくなって、 気の事だけじゃない。何でもみんな忘れてしまった。僕がこの とも気にしてはいない。病気の事なんか、忘れてしまった。病 なのだから。僕は、いま、自分のこの胸の病気に就いても、ちっ

い気取りはよそうじゃないか。それはもうたいてい、ウソ

われらの先祖のいちども経験しなかった全然あたらしい

んに安心させたい、お母さんを喜ばせたいなどという涙ぐまし て事のためでは勿論ないし、また、早く病気をなおしてお父さ これから丈夫なからだになり、何とかして一つ立身出世、なん

いような殊勝な孝心からでも無かったのだ。しかし、また、へ

パンドラの匣

わけでも無いんだ。ひとの行為にいちいち説明をつけるのが既

幕が。 かも、

パンドラの匣 或る時とは、どんな事か。それは君にもおわかりだろう。あの 康道場を選んでくれた。本当にもう、それだけの事だ。或る日、

とお母さんに言って、お父さんは、僕のためにこの山腹の健

僕がこの健康道場にはいったのには、だから何も理由なんか無

いと言いたい。或る日、或る時、聖霊が胸に忍び込み、涙が頬

うたくさんだ。概念のすべてが言い尽されて来たじゃないか。 ばしばウソのこじつけに終っている事が多い。理論の遊戯はも に古い「思想」のあやまりではなかろうか。無理な説明は、し

その時から僕は、ちがう男になったのだ。それまで隠していた すっとからだが軽くなり、頭脳が涼しく透明になった感じで、 を洗い流れて、そうしてひとりでずいぶん泣いて、そのうちに、

のだが、僕はすぐに、

「喀血した。」

虚無みたいなものになっているわけではない。船の出帆は、そ

岸を離れる。この航路は、世界の誰も経験した事のない全く新

しい処女航路らしい、という事だけは、おぼろげながら予感で

日だよ。あの日の正午だよ。ほとんど奇蹟の、天来の御声に泣

いておわびを申し上げたあの時だよ。

僕にもわからない。

未 だ、

いるような気持だ。

の日以来、

僕は何だか、新造の大きい船にでも乗せられて

この船はいったいどこへ行くのか。それは

まるで夢見心地だ。船は、するする

れはどんな性質な出帆であっても、必ず何かしらの幽かな期待

なのだ。

しかし、

君、

誤解してはいけない。僕は決して、絶望の末の

を受けて、天の潮路のまにまに素直に進んでいるという具合い きるが、しかし、いまのところ、ただ新しい大きな船の出迎え

事はあり得ない。人間は、しばしば希望にあざむかれるが、し

それはもう大昔からきまっているのだ。人間には絶望という

2

貪然、

猜疑、陰険、飢餓、憎悪など、

あらゆる不吉の虫が這い

を感じさせるものだ。それは大昔から変りのない人間性の一つ

君はギリシャ神話のパンドラの匣という物語をご存じだろ あけてはならぬ匣をあけたばかりに、病苦、悲哀、嫉妬、

不幸に悶えなければならなくなったが、しかし、その匣の隅に、

空を覆ってぶんぶん飛び廻り、それ以来、人間は永遠に

けし粒ほどの小さい光る石が残っていて、その石に幽かに「希

という字が書かれていたという話。

パンドラの匣 責めつけるような気取ったものの言い方などはやめにしましょ

日性に似ている。

足おさきにするすると進んで行く。何の渋滞も無いのだ。それ を示している人たちを岸に残して、僕たちの新時代の船は、一 観論やら、肩をそびやかして何やら演説して、ことさらに気勢 ポスの神々に依っても規定せられている事実だ。楽観論やら悲 捜し当てているものだ。それはもうパンドラの匣以来、オリム ころげ廻りながらも、いつかしら一縷の希望の糸を手さぐりで

正直に言う事にしよう。人間は不幸のどん底につき落され、

かし、また「絶望」という観念にも同様にあざむかれる事があ

はまるで植物の蔓が延びるみたいに、意識を超越した天然の向

本当にもうこれからは、やたらに人を非国民あつかいにして

う。この不幸な世の中を、ただいっそう陰鬱にするだけの事だ。

等学校への受験も出来ず、どうやら起きて歩けるようになって

時に高熱を発して肺炎を起し、三箇月も寝込んでそのために高

です。君もご存じのとおり、僕は昨年の春、中学校を卒業と同

いままでずいぶんつらい思いをして来たの

べり出ているのだ。

そりゃ僕だって、

りと単純な人になりましょう。新造の船は、もう既に海洋にす

つまみになるかも知れぬ。ホラなんか吹かずに、もっとさっぱ つけてもらいたい。二度とあんな事を繰り返したら世界中の鼻 いが日本をだめにして来たのだから、これからは本当に、気を 他人を責めるひとほど陰で悪い事をしているものではないのか。

でいる政治家など無ければ幸いだが、そんな浅墓な言いつくろ のごまかしを捏造して、ちょっとうまい事をしようとたくらんのごまかしを捏造して、ちょっとうまい事をしようとたくらん こんどまた戦争に負けたからと言って、大いそぎで一時のがれ

パンドラの匣 かりでもないけれども、僕はこの畑の中に一歩足を踏みいれる

りやっていた。そんな、お百姓の真似をする事で、わずかにお らい地獄だ。僕はあの頃、ただもうやたらに畑の草むしりばか

家の裏には百坪ほどの畑がある。これは、ずっと前から、どう 体裁を取りつくろっていた次第なのだ。ご承知のように、僕の 対しても、ていさいの悪いこと並たいていではなく、君には浪 だ遊んでいるのもお父さんに申しわけがなく、またお母さんに そんならどうするのか、となると眼の先がまっくらで、家でた

人の経験が無いからわからないかも知れないが、あれは全くつ

家でぶらぶら遊んで暮しているうちに、ことしの受験期も過ぎ

からも、微熱が続いて、医者から肋膜の疑いがあると言われて、

てしまって、僕はその頃から、上級の学校へ行く気も無くなり、

したわけか僕の名前で登記されているらしいのだ。そのせいば

うしてよいか、まるで見当も何もつかなくなるのだ。そうして、 ない、てもなく癈人じゃないか。そう思うと、呆然とする。ど をかけるばかりで、全然無意味だと思うと、なんとも、つらく こんなだらし無い自分の生きているという事が、ただ人に迷惑

うしてもごまかし切れぬ一塊の黒雲のような不安が胸の奥底に

の日をごまかして生きていたのだけれども、けれども、君、ど

たい僕はこれから、どんな身の上になるのだろう。なんの事は こびりついていて離れないのだ。こんな事をして暮して、いっ 事でも少しは食料増産のお手伝いにはなるだろうと、その日そ を打ちかえし、トマトに添木を作ってやったり、まあ、こんな まっていた。草をむしり、また、からだにさわらぬ程度で、土 だ。この一、二年、僕はこの畑の主任みたいなものになってし

周囲の圧迫からちょっとのがれたような気楽さを覚えるの

パンドラの匣

には若い敏感なアンテナがある。このアンテナは信頼できる。

国の憂鬱、危機、すぐにこのアンテナは、ぴりりと感ずる。

には兵隊の作戦の事などほとんど何もわからぬが、しかし、僕

於いては比島決戦についで沖縄決戦、米機の日本内地爆撃、 さでまわっていたのだ。欧洲に於いてはナチスの全滅、東洋に 続けているうちにも、世界の風車はクルクルと眼にとまらぬ早

けれども君、僕がこんな甘ったれた古くさい薄のろの悩みを

う意識ほどつらい思いは世の中に無い。 分の生きている事が、人に迷惑をかける。

3

てかなわなかったのだ。君のような秀才にはわかるまいが、「自

僕は余計者だ。」とい

「畑の仕事も、もういい加減によすんだね。お前のからだには

た気持もあったようで、死ね!

死んでしまえ!

死ね!

んでしまえ! と鍬を打ちおろす度毎に低く呻くように言い続

パンドラの匣

けていた日もあった。僕は甘藷の蔓を六百本植えた。

毎日、

かえし、そうして甘藷の蔓を植えつけるのである。なんだって

の下で、うんうん唸りながら重い鍬を振り廻して畑の土を掘り

よくわからない。自分のやくざなからだが、うらめしくて、思

あんなに烈しく畑の仕事を続けたのか、僕には今もって

い切りこっぴどく痛めつけてやろうという、少しやけくそに似

るばかりだ。僕は滅茶苦茶に畑の仕事に精出した。暑い日射しるばかりだ。僕は滅茶苦茶に畑の仕事に精出した。暑い日射し

感知し、震えた。けれども僕には何の策も無い。

。ただ、

あわて

理窟は無いんだ。勘だけなんだ。ことしの初夏の頃から、

、僕の

この若いアンテナは、嘗つてなかったほどの大きな海嘯の音を

パンドラの匣 うような気さえした。本望、という言葉さえ思い浮んだ。明日 気だった。こんな夜を、僕はずっと前から待っていたのだとい 息をつめるようにして静かに寝ていて、僕は不思議なくらい平

やはり血だった。便所にながいこと立っていたが、それ以上は

て、それから顔も手も洗って寝床へ帰った。咳の出ないように 血が出なかった。僕は忍び足で台所へ行き、塩水でうがいをし 生臭い匂いのものを含みながら、僕は便所へ小走りに走った。

腹這いになった途端に、ぐっと来た。口の中に一ぱい、

胸がごろごろ鳴るという事を僕は、或る本で読んで知っていた けない、とすぐに気附いて、はっきり眼が覚めた。喀血の前に、 ちに、ごろごろと、何か、胸の中で鳴るものがある。ああ、い 日目の深夜、夢うつつの裡に、こんこんと咳き込んで、そのう 少し無理だよ。」と夕食の時にお父さんに言われて、それから三 パンドラの匣 のようだ。僕は勿論、この病気の事は死ぬまで誰にも告白せず

さと蒲団を畳んで、ごはんも食べずに畑に出てしまった。そう

そうして翌る朝は、いつもより一時間以上も早く起きて、さっ

して滅茶苦茶に畑仕事をした。今から思うと、まるで地獄の夢

早く死にたい。

おさらばして、お国の負担を軽くしてあげたほうがよい。それ うしてわずかでも食料の増産に役立ち、あとはもうこの世から

が僕のような、やくざな病人のせめてもの御奉公の道だ。ああ、

もまた、黙って畑の仕事を続けよう。仕方がないのである。他

に生きがいの無い人間なのである。ぶんを知らなければいけな

いのだ。いまのうちに、うんと自分のからだをこき使って、そ

ああ、本当に僕なんか一日も早く死んでしまったほうがい

にいるつもりだった。誰にも知らせずに、こっそりぐんぐん病

と明けていた。

あれが日本の、いや世界の最後の夜間空襲だったのだ。朦朧と

わからないようにした、とたんに空襲警報である。思えば、

ろうか、血がとまった。僕は血で汚れた土を棒切れで掘り返し 噴き出ているような感じがした。コップに二杯くらいも吐いた 給の焼酎をお茶碗で一ぱい飲みほしちゃったよ。そうして、深 落思想というのだろうね。僕はその夜、お勝手に忍び込んで、配 気を悪化させてしまうつもりであった。こんな気持をこそ、堕

たら、ぐっと来た。こんどは便所まで走って行くひまも無かっ

硝子戸をあけて、はだしで庭へ飛び降りて吐いた。ぐいぐッッラスピ

僕はまた喀血をした。ふと眼覚めて、二つ三つ軽く咳をし

いと喉からいくらでも込み上げて来て、眼からも耳からも血が

パンドラの匣 した気持で、防空壕から這い出たら、あの八月十五日の朝が白々

パンドラの匣

てもう気が遠くなりそうで、豆畑の茂みの中に仰向に寝ころん

まいと、悪寒と、ねっとりした冷い汗とで苦しいのを通り越し

れて死ぬのは本望だ。えい、何でもかまわぬ早く死にたい。

ざ思い迷った揚句の果に、お百姓として死んで行こうと覚悟を

ような気がしていたのだ。どうにも他に仕様が無かった。さん

無かった。本当にもうそれより以外に僕の執るべき態度は無い

流石に君も苦笑するだろう。しかし君、僕にとっては笑い事じゃヒットが

でも僕は、その日もやっぱり畑に出たのだ。それを聞いては、

きめた筈ではないか。自分の手で耕した畑に、お百姓の姿で倒

だ時、 お母さんが呼びに来た。早く手と足を洗ってお父さんの

ろうとする苦労にすぎなかった。古い気取りはよそうじゃない

か。君の手紙の中に「悲痛な決意」などという言葉があったけれ

ちにしたって同じ様につらいんだ。無理に死をいそぐ人には気 ないが、しかし、死ぬも生きるも同じ様なものじゃないか。どっ

取屋が多い。僕のこれまでの苦しさも、自分のおていさいを飾

らだに射し込み、まるで違う世界に足を踏みいれたような、或 僕は天来の御声に泣いて、涙が頬を洗い流れ、不思議な光がか

いは何だかゆらゆら大きい船にでも乗せられたような感じで、

ふと気がついてみるともう、昔の僕ではなかった。

まさか僕は、死生一如の悟りをひらいたなどと自惚れてはい

居間にいらっしゃいという。いつも微笑みながらものを言うお

母さんは、別人のように厳粛な顔つきをしていた。

お父さんの居間のラジオの前に坐らされて、そうして、正午、

お父さんは僕のためにこの「健康道場」を選んでくれた。ご ただ、きのう迄の無理な気取りが消えただけだ。

無い。

何の理由も無かった。急に命が惜しくなったというわけでも

くつもりだ。僕はあの日、すぐにお母さんに打明けた。

自分で

ついた。僕はいまは何も思わず、ただこの船に身をゆだねて行

同情の言葉に満ちた手紙をもらって、僕は実際まご

も不思議なくらい平静な態度で打明けた。

僕、

ゆうべ喀血しました。その前の晩も、

喀血しました。

既に、

ウソの表情だ。

船は、するする岸壁から離れたのだ。

゛悲痛どころではあるまい。それはもう

表情みたいに思われる。

悲痛なんてのは今の僕には、何だか安芝居の色男役者の

らあんな、

はもう、しょげてはいない。胸の病気も気にしていない。 して船の出帆には、必ず何かしらの幽かな希望がある筈だ。

君か

パンドラの匣

パンドラの匣 ても面白い事ばかり、山ほどあるんだけど、まあこの次にゆっ 者を激励して来た人なのだから。とにかく変った病院だよ。と

品不足に対処して、特殊な闘病法を発明し、たくさんの入院患

ていた。少し変ったところのある人だ。何せ、結核療養の病院 を忘れる」という事が、全快の早道だと、ここの場長さんが言っ

健康道場などという名前をつけて、戦争中の食料不足や薬

血痰さえ出ない。病気の事なんか忘れてしまった。この「病気関は、六箇月で全快するそうだ。あれから一度も喀血しない」

ど望んではいけない。この簡素な「健康道場」は、その点だけ

いつも貧乏なのだから、

、僕もぜいたくな療養生活な

手かも知れないが、お金のお勘定なんてのは一度もした事がな 承知のように、僕のお父さんは数学の教授だ。数字の計算は上

でも、まったく僕に似合っている。僕には、なんの不平も無い。

パンドラの匣 というところで降りて、そこから他のバスに乗りかえるのだが、 お知らせしましょう。E市からバスに乗って約一時間、小梅橋

きょうはお約束どおり、僕のいまいるこの健康道場の様子を

そちらもお大事に。

昭和二十年八月二十五日

健康道場

くりお話しましょう。

僕の事に就いては、本当に何もご心配なさらぬように。では、

ので特別に、はじめから新館にいれられた。

僕の部屋は、道場

移されて来る事になっているのだ。けれども僕は、元気がよい

うはそれほどでもないが、新館はとても瀟洒な明るい建物だ。 核療養所なのだ。新館と旧館と二棟にわかれている。旧館のほ

旧館で相当の鍛錬を積んだ人が、この新館のほうにつぎつぎと

尽きるあたりに、二棟の建物の屋根が見える。それがいま、僕 門があって、そこから松並木が山腹までつづき、その松並木の

の世話になっている「健康道場」と称するまことに風変りな結

歩いてしまう。つまり、

スファルトの県道を南へ約十丁ほど行くと、山裾に石の小さい

かえのバスを待っているより、歩いたほうが早い。ほんの十丁

いのものなのだ。道場へ来る人は、たいていそこからもう

小梅橋から、山々を右手に見ながらア

でも、その小梅橋からはもう道場までいくらも無いんだ。乗り

パンドラの匣

て、身のまわりのもの一切をそれにしまい込んでも、まだ余分

不服は無い。一番いい位置かも知れない。ベッドは木製でひど

いるのもはっきり見えて、まあ、僕のベッドの位置に就いては

く大きく、ちゃちなスプリングなど附いていないのが、かえっ

坪くらいの「乙女ヶ池」とかいう(この名は、あまり感心しな

いが)いつも涼しく澄んでいる池があって、鮒や金魚が泳いで

は部屋の一ばん奥にあって、枕元の大きい硝子窓の下には、十

綺麗な名前がそれぞれの病室に附せられてあるのだ。

「桜の間」は、十畳間くらいの、そうしてやや長方形の洋室であ 木製の頑丈なベッドが南枕で四つ並んでいて、僕のベッド

「白鳥の間」だの「向日葵の間」だの、へんに恥ずかしいくらい

の表玄関から入ってすぐ右手の「桜の間」だ。「新緑の間」だの

パンドラの匣 てたのもしく、両側には引出しやら棚やらがたくさん附いてい

パンドラの匣 汗の粒が湧いて出るらしく、しきりにタオルで鼻の頭を強くこ まっくろい口髭は立派だが、ひどい近眼らしく、眼鏡の奥の小さ るようなところもあるが、どうもまだ、はっきりはわからない。 い赤い眼は、 しょぼしょぼしている。丸い鼻の頭には、絶えず

ずる事もある。人格は、だいたい高潔らしい。仙骨を帯びてい

しかし、ふだんは寡言家でも、突如として恐るべき果断家に変 この淋しき父を見舞いに来る。父はたいていむっつりしている。 東京からこの健康道場ちかくの山家に疎開して来ていて、時々東京からこの健康道場ちかくの山家に疎開して来ていて、時々 年頃の娘さんと二人だけの家庭の様子で、その娘さんも一緒に 東京の新聞記者だとかいう話だ。早く細君に死なれて、いまは

の引出しが残っているくらいだ。

티

室の先輩たちを紹介しよう。僕のとなりは、大月松右衛門 その名の如く人品こつがら卑しからぬ中年のおっさんだ。

パンドラの匣 十八歳。健康道場第一等の美男におわします。色あくまでも白 く、鼻がつんと高くて、眼許すずしく、いかにもいい男だ。けれ

そのお隣りは、木下清七殿。左官屋さんだ。未だ独身の、二

厳がある。案外、偉いひとなのかも知れない。綽名は越後獅子。

に赤い。けれども、眼をつぶって何かを考えている時には、威

すって、その為に鼻の頭は、いまにも血のしたたり落ちるくらい

その由来は、僕にはわからないが、ぴったりしているような感

ないようだ。ご自分からこの綽名を申出たのだという説もある

はっきりは、わからない。

じもする。松右衛門殿も、この綽名をそんなにいやがってもい

逸というのがあって、これがまた、ひどいんだ。唄の中に、芝居 なので、全く閉口のほかは無い。なおその上、文句入りの都々

の台詞のようなものがはいるのだ。あら、兄さん、とか何とか、

もりだとか、馬鹿々々しい、なんの意味もないような唄ばかり気持である。富士の山ほどお金をためて毎日五十銭ずつ使うつ

衛門殿は眼をつぶって黙って聞いているが、僕は落ちつかない

んお得意のようである。僕は既に、五つ六つ聞かされた。松右

歌も知っているらしいが、それよりも都々逸というものが一ば 音楽的だとでも思っているのかしら。不可解だ。いろんな流行 ども少し爪先き立ってお尻を軽く振って歩く、あの歩き方だけ

は、やめたほうがよい。どうしてあんな歩き方をするのだろう。

パンドラの匣 きだ。おとなしそうな小柄の細君が時々、見舞いに来る。そう 何だかしていた人だそうだ。三十五歳。僕はこの人が一ばん好

たが、あの時は可哀想だった。清七殿は越後獅子をかなり尊敬 えぬので、清七殿ひどくしょげかえって、さっさと寝てしまっ

しているらしい。この粋な男の名は、かっぽ

そのお隣りに陣取っている人は、西脇一夫殿。

郵便局長だか

だそうで、夜、寝る前に松右衛門殿にさまざまの近作を披露し

この清七殿だって決して悪い人じゃないんだ。俳句が好きなん

て、その感想を求めたけれども、越後は、うんともすんとも答

き手のからだにさわるという意味か、はっきりしない。でも、

い添える事もある。歌い手のからだにさわるという意味か、聞

眼をひらいて、もうよかろう、と言う。からだにさわる、と言

以上は松右衛門殿がゆるさない。二つ歌い終ると、越後獅子は

六時

七時

朝食 起床

ましょう。まず、毎日の日課の時間割を書いてみると、

が、つづいて当道場の特殊な療養生活に就いて少し御報告申し れでだいたい僕の同室の先輩たちの紹介もすんだ事になるのだ 事があるので、やっぱりお隣りでなくてよかったとも思う。こ と僕はときどき思う。けれども、深夜、奇妙な声を出して唸る 笑は魅力的だ。この人が、僕のお隣りだったら、よかったのに 上品だ。学生のような感じがどこかにある。はにかむような微

つくし。ひょろ長いからであろうか。美男子ではないけれども、

それもまたいい心掛けだと思う。西脇殿の綽名は、 越後も、遠慮してそれを見ないように努めている

ようである。

かっぽれも、

して二人で、ひそひそ何か話をしている。しんみりした風景だ。

四時

 $\dot{\exists}$

リ四時半マデ

三時半ヨリ四時マデ

錬

一時ヨリ二時半マデ 一時半ヨリ三時半マデ

時ヨリ二時マデ

四時半ヨリ五時半マデ

摩擦 自然 屈伸鍛 摩擦 屈伸鍛 講話

十時 九時半ヨリ十時マデ

八時ヨリ八時半マデ

錬

、時半ヨリ九時半マデ

屈伸鍛 摩擦 屈伸鍛

錬

場長巡回

(日曜ハ指導員

ノミノ巡回)

十時半ヨリ十一時半マデ

摩擦

昼食

(日曜ハ慰安放送)

錬

十二時

パンドラの匣 裕福でない患者たちは、行きどころを失ったような有様になっ 手不足やらで閉鎖した病院も少くなかったようで、長期の入院 を必要とするたくさんの結核患者、特に僕たちのようにあまり

た病院も多いだろうし、また罹災しないまでも、物資不足やら こないだも、ちょっと申上げて置いたように、戦争中に焼かれ

九時

就報摩

3

八時半

七時半ヨリ八時半マデ七時ヨリ七時半マデ

六時

夕食

屈伸鍛錬

られ、

患者に対しても独得の療法を施し、非常な好成績で、医学

生がこの療養所へ招聘されて来てからは、内部の機構が一新せ

事になっている。すべてここの田島場長の創案らしい。

田島先

して看護婦さんたちは助手、

招聘して、ここに、

というわけなのだ。まず、ざっとこの日課の時間割をごらんに

物資にたよらぬ独自の結核療養所が出来た

普通の療養所の生活と随分ちがうのがおわか

方有力の篤志家が二、三打ち寄り、当局の賛助をも得て、

たので、この辺には、さいわい敵機の襲撃もほとんど無いし、地

からこの山腹にあった県の療養所を増築し、

いまの田島博士を

もと

りだろうと思う。 なっただけでも、

病院、

あるいは患者などという観念を捨てさ

せるように仕組まれている。

院長の事を場長と呼び、

副院長以下のお医者は指導員、そう 僕たち入院患者は塾生と呼ばれる

前では、おそろしく神妙にしている。けれども、陰ではこっそ

場長は、指導員、助手を引き連れて場内を巡回するのだが、そ

る人のようである。ちょっと、こわい。毎日、午前十時にこの 人に特有の、れいの猫みたいな陰性の気むずかしさを持ってい

の時には、道場全体が、しんとなる。塾生たちも、この場長の

ような典雅な容貌の持主である。そうして、これも頭の禿げた

い端正な顔をしているものだが、

田島先生も、卵に目鼻という

うして、なかなか笑わない人だ。頭の禿げている人は、たいて 身者だとかいう事だ。痩せて長身の、ちょっと前こごみの、そ 界の注目の的となっているのだそうだ。頭がすっかり禿げてい

るので、五十歳くらいにも見えるが、

あれでまだ三十歳代の独

さて、それでは当道場の日課について、も少しくわしく説明

パンドラの匣

り綽名で呼んでいる。清盛というのだ。

終る。そうして、一度終れば、また手の運動から繰り返し、三 伸ばしたり、ゆるめたりして、そうして大体、一とおり鍛錬を

十分間、時間のある限りつづけていなければならぬ。これを前

に記した時間割のとおり午前二回、午後三回、毎日やるんだか

く練習を要するところで、また屈伸鍛錬の一ばん大事なところ 腹をへこましたり、ふくらましたり、ここはなかなかむずかし

でもあるらしく、その次には足の運動、脚の筋肉をいろいろに

大ざっぱに要点だけ言うと、まあ、ベッドの上に仰向に大の字 腹筋の運動だ。こまかく書くと君は退屈するだろうから、ごく しましょうか。

屈伸鍛錬というのは、一口に言えば、手足と、

に寝たまま、手の指、手首、腕と順次に運動をはじめて、次に

パンドラの匣 けれども、たいていは一週間ほどで慣れてしまう。 ところどころに摩擦負けのブツブツの生ずるような事さえある。

あの毛を、ほんの少しやわらかくしたようなものである。だか

摩擦に用いるブラシは、散髪の時に用いる硬い毛のブラシの、

ら、はじめのうちは、これでこすられると相当に痛く、皮膚の

人ほど、恢復が早いそうだ。

らしいが、これもまた、戦時の物資不足から生まれた新療法の 一つであろう。当道場では、たしかに、この運動を熱心にやる

そうしてこれは、ここの陽気な助手さんたちの役目なのだ。

次に摩擦の事を少し書こう。これも当道場独得のものらしい。

パンドラの匣 へたくその助手さんもある。

もらう時の気持は、何とも言えない。うまい助手さんもあるが、

とんど全身にほどこす。入場後の一週間ほどは手足だけである

て、シャッシャッと摩擦するのである。摩擦は原則として、ほ

ブラシをそのタオルに押しつけては水をつけ、それでもっ 小さい金盥に、タオルを畳んでいれて、それを水にひたし の手わけして、順々に全部の塾生たちに摩擦してまわるのであ

摩擦の時間が来ると、れいの陽気な助手さんたちが、おのお

れから足、胸、腹と摩擦して、次に寝がえりを打って反対側の が、それからのちは、全身になる。横向きに寝て、まず手、そ

足、胸、腹、背中、背中、腰と移って行くのである。慣れ

なかなか気持のよいものである。殊に、背中をこすって

けれども、この助手さんたちの事に就いては、後でまた書く

パンドラの匣

時休止していたのだそうだが、戦争がすんで電力の使用が少

し緩和されると同時に、

またすぐはじめられたのだ。

場長は、

これは、

導員、

時半からの報告などがあるけれども、講話というのは、

ないか。この他には午後一時からの講話、

四時の自然、

場長、

か

まあ当分はこんな事で闘病の心意気を示すのも悪くない

所々々に設備されてある拡声機から僕たちの部屋へ流れてはい

僕たちはベッドの上に坐って黙って聞いているのだ。

戦争中に拡声機が電力の不足でだめになったので、

るがわるマイクを通じて話かけて、それが部屋の外の廊下の要

または道場へ視察にやって来る各方面の名士など、

じゃ

ると思ってよい。

戦争がすんでも、

物資の不足は変らないのだ

道場の生活は、

この屈伸鍛錬と摩擦の二つで明け暮れしてい

事にしよう。

パンドラの匣 などつまらぬ事ばかり言っていたっけね。とにかく、この場長

れたが、しかし、あれとは丸っきり違う感じを受けた。

僕も中学校の時にあの歴史の木山ガンモ先生から教えら というところなど実によかった。玄白たちの苦心に就い

ガンモは、玄白はひどいアバタで見られた顔ではなかった、

が如く、茫洋として寄るべなく、只あきれにあきれて居たる迄。 どう飜訳してよいのか、「まことに艫舵なき船の大海に乗出せし 玄白たちが、はじめて洋書をひらいて見たが、どのようにして きのうは、杉田玄白の「蘭学事始」に就いてお話して下さった。

たる口調で、僕たちの祖先の苦労を実に平明に解説してくれる。

義を続けている。頭のいい講義とでもいうのであろうか、淡々

このごろ、日本の科学の発展史、とでもいうようなテーマの講

の毎日の講話は、僕にはとても楽しみだ。

日曜には、

講話のか

パンドラの匣

には、僕たちの体温が一ばん上昇していて、からだが、だるく

午後四時の自然というのは、まあ、安静の時間だ。この時刻

落ち附かない気持になるものだ。でも、他の塾生たちには、こ

るが、これは聞いていて楽しい、というよりは、ハラハラして

レコオドのあいまに、助手さんの肉声の歌が放送される事もあ

れども、でも一週間に一度くらい聞くのは、わるくないものだ。 わりにレコオドを放送する。僕はあんまり音楽は好きでないけ

聞いている。思うに、かれ自身も都々逸の文句入りというとこ

れが一ばん歓迎されているようだ。清七殿など、眼を細くして

ろなど、放送したくてたまらないのだろう。

5

パンドラの匣 ちろん、新聞を読む事さえ禁ぜられている。耽読は、からだに

から、当直の事務員のおそろしく緊張した口調のニュウスが、 日その日の世界情勢に就いての報道だ。やっぱり廊下の拡声機 昼は、毛布も何も一切掛けずに、ただ寝巻を着たままでベッド

の上にごろ寝をしているのだが、慣れると清潔な感じがして来 かえって気持がいい。午後八時半の報告というのは、その

眠の時以外は、ベッドに掛蒲団を用いる事を絶対に許さない。

らしいが、でも、塾生の大部分は、この時間には、ただ静かに う意味で自由の三十分間を与えられているような具合いのもの まあ諸君の気のむくように勝手な事をして過してい給え、とい て、気分がいらいらして、けわしくなり、どうにも苦しいので、

ベッドに横臥している。ついでながら、この道場では、夜の睡

いろいろと報告せられるのだ。この道場では、本を読む事はも

パンドラの匣 というのだ。実に、つまらない名前だ。小柴利助という僕の姓 小雲雀という具合いにも聞えるので、そんな綽名をもら

とつ御紹介すると、 んか、一つも無い。

僕のこの当道場に於ける綽名は、「ひばり」 みんな忘れてしまった。ついでに、もうひ

のだ。

ても、

を利用する事も上手になって来るだろう。僕はもう何事につけ

ひどく楽天居士になっているようでもある。心配の種な

たい事はたくさんあるのだし、この手紙も二日がかりで書いた

。でも、だんだん道場の生活に慣れるに随って、短い時間

たいてい食事後に、いそいで便箋を出して書いているが、書き ただ、君への手紙を書く時間が少くて、これには弱っている。 信して素朴に生きて遊んでいるのも、わるくないと思っている。 思念の洪水からのがれて、ただ新しい船出という一事をのみ確 悪い事かも知れない。まあ、ここにいる間だけでも、うるさい

「なんだい。」と僕は平然と答える。

「やっとるか。」

鋭く呼ぶ。

だ、なんて顔をしかめたりなんかしないでおくれ。

「ひばり。」と今も窓の外から、ここの助手さんのひとりが僕を

りで、これからの僕の手紙を読んでおくれ。何という軽薄な奴 かましく囀って騒いでいるのさ。だから、君もどうかそのつも この健康道場に於ける一羽の雲雀なんだ。ピイチクピイチクや かったかい? 僕はもう昔の小柴じゃないんだよ。いまはもう、 りと人に呼ばれても気軽に返事を与える事にしているのだ。わ

どうにもいやらしく、てれくさくて、かなわなかったが、でも う事になったものらしい。あまり名誉な事ではない。はじめは、

このごろの僕は、何事に対しても寛大になっているので、ひば

パンドラの匣 あるのだ。この助手さんたちに就いては、更によく観察し、次 わち、この助手さんたちのようである。油断のならぬところが

務員、全部のひとに片端から辛辣な綽名を呈上するのも、すな

看護婦さんたちに通有の気風らしい。場長や指導員、塾生、

く快活で、そうしてちょっと男の子みたいな手剛さが、ここの

ではなかろう。助手さんたちの案出したものに違いない。ひど

それはわからぬけれども、まさかここの場長がとりきめたもの

を交す事にきまっているようだ。いつ頃からはじまった事か、 助手さんと塾生が、廊下ですれちがった時など、必ずこの挨拶

この問答は何だかわかるか。これはこの道場の、挨拶である。

「よし来た。」 「がんばれよ。」 「やっとるぞ。」

パンドラの匣 だから、秋になったからとて、別段、 ん高くなって来たじゃないか。僕は君のように詩人ではないの

断腸の思いも無いが、

き

渡って来たみたいに、ひやりとする。虫の音も、めっきり、か

九月になると、やっぱり違うね。風が、

湖面を

拝啓仕り候。

便でまたくわしく報告する事にしよう。

まずは当道場の概説くだんの如しというところだ。失敬。

九月三日

鈴虫

パンドラの匣 からず、実にまごついた。 らいなの?」と妙な逆襲の仕方をして来たので、僕はわけがわ この若い助手さんには、どうも不可解なところが多く、僕は

てやったら、急に不機嫌になり、言葉まで頗るぞんざいに、

いなくたっていいじゃないの。ひばりは鈴虫がき

「あらそう。

「つくしは、いないよ。ついさっき、事務所へ行った。」と答え

らしいのだ。

さんは、僕と同室の西脇つくし殿に、前から好意を寄せている

るのだという事がわかって、ちょっと息がつまった。この助手

そんな言葉を聞くと、この人たちには秋がきびしく沁みてい

立って、僕のほうを見て笑って、

「つくしにね、鈴虫が鳴いてるって言ってやって。」

のうの夕方、ひとりの若い助手さんが、窓の下の池のほとりに

手さんは、出目金とでもいうようなところなのに、遠慮して、 とも気がきかない。平凡きわまる。また、眼鏡をかけている助 なんという事もない。竹中静子だから、竹さん、なんてのはもっ いくぶんお手やわらかに出来ている。三浦正子だから、マア坊。

う。こないだの手紙に、ここの助手さんたちは、油断のならぬ

ついでに、きょうは他の助手さんたちの綽名も紹介しましょ

ところがあって、男のひとたちに片端から辛辣の綽名を呈上し

ていると言ったが、しかし、また塾生のほうだって負けずに、

みたいなものだ。けれども、塾生たちの案出した綽名は、そこ 助手さんたち全部を綽名で呼んでいるのだから、まあ、アイコ

は何といっても、やっぱり女性に対するいたわりもあるらしく、

坊。

前から、このひとに最も気をつけて来ているのだ。綽名はマア

パンドラの匣 ている助手さんがあって、いかにも赤鬼のお面を聯想させるの つけたものだと思う。顔のはばが広くほっぺたが真っ赤に光っ

ひとり、カクランというのがあって、これはちょっと、うまく

たまねぎなど、いろいろあるが、みんな陳腐だ。ただ

んてい、

きいていない。僕ならば、天女とつける。そうよ、あたしは天 よ、といよいよ自信を強くしたかも知れない。ちっとも諷刺が けられた当人はかえって大いに得意で、そうよ、あたしは孔雀

女よ、とはまさか思えまい。その他、となかい、こおろぎ、た

ネントも物凄く、眼蓋を赤く塗ったりして、奇怪な厚化粧をし

が、どうも少し遠慮している。ひどく、ぶ器量なくせに、パーマ から、ハイチャイ。このへんは、まあ、いいほうかも知れない

ているから、孔雀。ばかにして、孔雀とつけたのだろうが、つ

キントト。痩せているから、うるめ。淋しそうな顔をしている

2

ない。

かりのようだ。

いところがあるけれども、本当は気持のやさしい、いいひとば

このひとに限らず、ここの助手さんたちは、少し荒っぽ

「ようし来た。」と元気なものだ。霍乱に頑張られては、かなわ

「がんばれよ。」

「なんだい。」すまして答える。

「カクラン。」

だが、さすがに、そこは遠慮して避けて、鬼の霍乱というわけ

で、カクランだ。着想が上品である。

きいたり、流行歌を教え合ったり、善く言えば和気藹々と、悪

パンドラの匣 だよ。」摩擦の時など、他の助手さんたちは、塾生と、無駄口を

きいて、きりきりしゃんと素早く仕事を片づける手際は、かっ

の原因の一つになっているかも知れない。とにかく、よく気が

ぽれの言い草じゃないけれど、「まったく、日本一のおかみさん

感ぜられる。からだが大きいから、看護婦の制服の、あの白衣 うして針のように細くなって、歯がまっしろで、とても涼しく ちっとも美人ではない。丈が五尺二寸くらいで、胸部のゆたか

そうして色の浅黒い堂々たる女だ。二十五だとか、六だと

の笑い顔には特徴がある。これが人気の第一の原因かも知れな とにかく相当としとっているらしい。けれども、このひと

かなり大きな眼が、笑うとかえって眼尻が吊り上って、そ

がよく似合う。それから、たいへん働き者だという事も、人気

れない。大阪の生れだそうで、竹さんの言葉には、いくらか関

気だ。越後獅子の説に拠ると、「あの子の母親は、よっぽどしっ

りの魅力になっているのかも知れない。何しろ、たいへんな人 とよそよそしいような、孤独の気品が、塾生たちにとって何よ

かりした女に違いない」という事である。或いは、そうかも知

ちから、ひとり離れて、すっと立っている感じだ。このちょっ 言わず、つまらぬ世間話など決してしないし、他の助手さんた で、そうして念いりだし、いつも黙って明るく微笑んで愚痴も

たちが何を言いかけても、少し微笑んであいまいに首肯くだけ

シャッシャとあざやかな手つきで摩擦をやってしまってい しかも摩擦の具合いは、強くも無し弱くも無し、一ばん上手

く言えばのろのろとやっているのに、この竹さんだけは、塾生

眼をぐんと大きく睜って、どんな話にでも首をつっ込んで来て、 笑いたくて笑いたくて、うずうずしているようで、なに? と

額がいっそう狭くなっている。滅茶苦茶に笑う。金歯が光る。

いたみたいにまんまるく睜って、そのため額に皺が出来て狭い

の大きい眼の眼尻が少しさがって、そうしていつもその眼を驚 こへ来たのだそうである。丸顔で色が白く、まつげの長い二重瞼 り、あのどこやら不可解なマア坊に一ばん興味がある。

マア坊は、十八。東京の府立の女学校を中途退学して、すぐこ

がよい。マア坊は、小さくて可愛らしいひとだ。僕は、やっぱ じないのだ。気品のある女よりも、僕には可愛らしい女のほう だそのひとを気の毒に思うばかりで、それ以上は何の興味も感

大鯛なんかを思い出し、つい苦笑してしまって、そうして、たホホルビム

いいところらしいが、僕は昔から、身体の立派な女を見ると、

んな綽名も思いつかず、ただ、竹さんだのマア坊だのという極 したような綽名をどしどしつけるが、いいひとに対しては、ど

きでもない女の人には、カクランだの、ハイチャイだの、ばかに

君、それにつけても、男って可笑しなものだね。そんなに好

に劣らぬ人気だ。

3

擦も下手くそだが、何せピチピチして可愛らしいので、竹さん が、ひどく可愛い。仕事にもあまり精を出さない様子だし、摩 り高く、薄い下唇が上唇より少し突き出ている。美人ではない をとんとん叩きながら笑い咽んでいるのだ。鼻が丸くてこんも たちまち、けたたましく笑い、からだを前こごみにして、おなか

パンドラの匣 い声にまじって、かん高い、派手な、マア坊の笑い声がはっき いで書いているのだが、隣の「白鳥の間」から、塾生たちの笑

坊は、どうやら西脇つくし殿を、おしたい申しているのだから、

かなわない。いま僕は、この手紙を、昼食を早くすましていそ

笑うひとは、よく泣くものじゃないのか。なんて、どうも僕は

マア坊の事になると、何だか調子が変になる。そうして、マア

ア坊も、本当は人一倍さびしがりの子なのかも知れない。よく るのかも知れない。いつもあんなに笑い狂っているくせに、マ は、ばかに女の話ばかりする。でも、きょうは、なぜだか、他 めて平凡な呼び方しか出来ないのだからね。おやおや、きょう

の話はしたくないのだ。きのうの、マア坊の、

「つくしにね、鈴虫が鳴いてるって言ってやって。」

という可憐な言葉に酔わされて、まだその酔いが醒めずにい

パンドラの匣 き船の大海に乗出せしが如く、茫洋として寄るべなく、只あき の横文字の本をひらいて見た時と同じ様に、「まことに艫舵な のひとと逢うたんびに、それこそあの杉田玄白がはじめて西洋

のか悪いひとなのか、その性格に全然見当がつかない。僕はあ がね、十七八の女って、皆こんなものなのかしら。善いひとな わからないひとだ。いや、なに、別に、こだわるわけでは無い 少し書きつづける事にしよう。どうもあの、マア坊ってのは、

やっと、どうやら、お隣の騒ぎも、しずまったようだから、も

休もう。

どうも隣室の笑い声が気になって、書けなくなった。ちょっと 子が変だ。いろいろ、もっと、書きたい事もあったのだけれど、 ない。白痴じゃないか。なんて、きょうの僕は、どうも少し調 り聞えて来る。いったい、何を騒いでいるのだろう。みっとも

でも、マア坊も、或いは意地の悪い継母なんかに育てられた

う、と言えば少し大袈裟だが、とにかく多少、たじろぐのは事

れにあきれて居たる迄なり」とでもいうべき状態になってしま

実だ。どうも気になる。いまも僕は、あのひとの笑い声のため

でしまったのだが、どうにも落ちつかなくて堪え難くなって来 に手紙を書くのを中断せられ、ペンを投げてベッドに寝ころん

をゆっくり拭って、

「あの子の母親が悪い。」と言った。

たら、松右衛門殿は、

爪楊子を使いながら、うむと首肯き、それからタオルで鼻の汗っまょうじ

お隣りのベッドに泰然とあぐらをかいて

「マア坊は、うるさいですね。」そう僕が口をとがらせて言っ

寝ころびながらお隣の松右衛門殿に訴えた。

なんでも母親のせいにする。

パンドラの匣

1

もね。

九月七日

死生

は、マア坊を、

よっぽど好いているらしい。

「つくしにね、

その時から、どうも僕はへんだ。つまらない女なんだけれど

鈴虫が鳴いてるって言ってやって。」

子なのかも知れない。陽気にはしゃいでいるけれども、どこか

、ふっと淋しい影が感ぜられる。なんて、どうもきょうの僕

パンドラの匣

事だと思っている。僕には、いま、あたらしい男としての爽や

滅を不思議な事だと思っていたが、なに、ちっとも不思議じゃ たいほどの烈しい悔恨も感じない。はじめは、その嫌悪感の消 ようだが、しかし、もはやそれに対する自己嫌悪や、臍を噛み

僕は、まったく違う男になってしまった筈ではなかった

僕は、あたらしい男になっていたのだ。自己嫌悪や、

よい 悔恨

を感じないのは、いまでは僕にとって大きな喜びである。

パンドラの匣

僕も、 だよ。

イチクやかましくおしゃべりする雲雀みたいになってしまった

まるでもう、おっちょこちょいの、それこそピイチクピ すべて、この初秋という季節のせいなのだ。このごろは 騒ぎ出す始末になるのだ。なあに、そんなに好いてもいないん

たらしく見えて、こいしく思われ、つい、好きだ好きだ、なんて きのうは妙な手紙で失敬。季節のかわりめには、もの皆があ

パンドラの匣 のかも知れないが、僕には、いつでも粗末で不親切だ。マア坊

には、 僕なんか、まるで道ばたの石ころくらいにしか思われて

くそで、

囀る雲雀、流れる清水、このおっちょこちょいを笑う給うな。

けさの摩擦は久しぶりでマア坊だった。マア坊の摩擦は下手

いい加減。つくし殿には、ていねいに摩擦してあげる

少し取消したい。実は、きょう、ちょっと珍妙な事件があった

きのうの手紙で、マア坊をばかに褒めてしまったが、あれは

ので、前便の不備の補足かたがた早速御一報に及ぶ次第なのだ。

生きて在れ!

だいているのだ。囀る雲雀。流れる清水。透明に、ただ軽快に

かな自負があるのだ。そうして僕は、この道場に於いて六箇月

何事も思わず、素朴に生きて遊ぶ資格を尊いお方からいた

るし、どうにも、かなわない、ぎこちない気分であった。マア

速にはりつめて来ているような按配なのだし、それにまた、君

にね、鈴虫が鳴いてるって言ってやって」以来、僕の気持は急

ちっとも笑わず、そうして無口だ。けさの摩擦も、そんな具合 坊のほうでも気づまりになるのであろう、僕の摩擦の時だけは、 みたいに、むっつりしてしまうのだが、そうするとまた、マア

の窮屈な、やりきれないものであった。殊にも、あの、「つくし

らまって、ろくにものが言えなくなるのだ。結局、僕は、不機嫌 うまく冗談が言えない。冗談を言うどころか、声が喉にひっか から、僕はマア坊の摩擦の時には息ぐるしく、妙に固くなって、 れども僕にとっては、マア坊は、あながち石ころでは無いのだ いないのだろうし、どうせそうだろうし、まあ、仕方が無い。け

への手紙に、マア坊を好きだ好きだと書いてやった直後でもあ

からどうも、あの笑い方は白痴的だと思っていたが、さては、ほ にマイナスになった。低能なんじゃないかしらと疑った。まえ のだろう。うんざりした。「鈴虫が鳴いている」が、これで完全

と来た。僕は、びっくりした。なんてまあ、まずい事を言う

それくらいの機微は、わかっているさ。僕は、黙っていた。す

んなにはっきり、ぬけぬけと言えるものではない。僕にだって に思っている証拠だ。本当に、一ばんいいと思っていたら、そ けたようなそんなお世辞を言えるのは、マア坊が僕を、いい加減

ると、また小声で、

「なやみが、あるのよ。」

坊は、僕の背中をこすりながら、ふいと小声で言った。

「ひばりが、一ばんいいな。」

うれしく無かった。何を言っていやがると思った。とってつ

パンドラの匣 ていやになる。ばかばかしいと思った。

前に実現せられているのを見ると、かえってこっちが気抜けし

書いてやったが、そんな出鱈目の予言が、あまりあっけなく眼

んだ、かれは泣いているのだ。いよいよ僕は呆れた。よく笑う

答えない。かすかに鼻をすすった。横目でそっと見ると、な

ひとは、またよく泣くひとではないか、などときのう僕は君に

て

んものであったか、などと考えているうちに、気持も軽くなっ

「どんな悩みが、あるんだい。」と馬鹿にし切った口調で尋ねる

ことが出来た。

2

て行ったというのは、或いは重大な事なのかも知れない。或い

前で意味ありげに泣いてみせて、そうして怒って、すっと立っ ど、しかし、あんなに陽気なマア坊が、いやしくも一個の男子の んでいるなどとは、いくら自惚れても、考えられやしないけれ

るが、僕の胸はちょっと、ときめいた。まさか、僕の事でなや

さと部屋から出て行ってしまった。その後姿を眺めて、白状す

すっと立って、まだ摩擦もすまないのに、金盥をかかえてさっ

うな事になったという噂を、僕は聞いて知っていたのだ。

「ばかにしないで。」

調で言った。事実、そんな噂があるのだ。何か一家内の都合で、

「つくしが退場するんだってね。」と僕は、からかうような口

つくしは、北海道の故郷のほうの病院に移らなければならぬよ

は、ひょっとすると、と、そこは、いくらおさえつけてもやっぱ

パンドラの匣 すべて、わかった。なんという事も無かった。はっきり、わかっ な自惚れを、キントトにも、越後獅子にも、みんなに見破られて るもすさまじいや。僕は、実に、恥ずかしかった。僕のあわれ たというものだ。なあんだ! 組長に叱られて、それで悩みがあ

さんに言われたのよ。」

り少し自惚れが出て来て、ついさっきの軽蔑感も何も吹っ飛んり少し自惚れが出て来て、ついさっきの軽蔑感も何も吹っ飛ん

わかった。お隣りの越後獅子の摩擦をしていたキントトが、そ

れども、なんという事も無かった。マア坊の涙の意味がすぐに

の時、事も無げに僕に教えたのだ。

「叱られたのよ。あんまり調子に乗って騒ぐので、ゆうべ、竹

竹さんは助手の組長だ。叱る権利はあるだろう。まあこれで、

たい気持で、ベッドに寝たまま両腕を大きく振りまわした。け でしまって、やたらにマア坊がいとしく思われ、わあ、と叫び パンドラの匣 黙って立っている。庭の池を見ている様子であった。僕はベッ

帰るのだが、きょうは、お膳をベッドの傍の小机に載せて、そ

お昼には、竹さんがお膳を持って来た。いつもは、さっさと

とりで笑ってみたい気持だ。

には無いんだ。僕はこれからマア坊を完全に黙殺してやるつも い男は、思い切りがいいものだ。未練なんて感情は、新しい男

あれは猫だ。本当につまらない女だ。あはははは、とひ

れから伸び上るようにして窓の外を眺め、二、三歩、窓のほう

へ歩み寄り、窓縁に両手を置いて、僕のほうに背を向けたまま

憫笑せられているような気がして、さすがの新しい男も、このでによう

時ばかりは閉口した。実に、わかった。何もかも、よくわかっ

「マア坊の事は、きれいにあきらめるつもりだ。

僕は、

ドに腰かけて、さっそく食事をはじめた。あたらしい男は、お

よく噛んで、よく噛んで、きれいな血液を作るのだ。

「うん。」僕は普通の声で返辞した。「なやみがあると言ってた。」

パンドラの匣

3

げたら、竹さんは、いつのまにか、両手をうしろに廻して窓に

「ひばり。」と音声の無い、呼吸だけの言葉で囁かれて、顔を挙

く噛んで、よく噛んで、全部を滋養にしなければならぬ。

と、かぼちゃの煮つけだ。めざしは頭からバリバリ食べる。よ

かずに不服を言わないものである。きょうのおかずは、めざし

低い声で、「マア坊が泣いたって?」

ある微笑をして、それから、やっぱり呼吸だけのような極めて 寄りかかってこちら向きになっていて、そうして、あの特徴の

らしがねえ。なぜだか、その時、そんな気がして、すこぶる気 ないもんだ。僕は、にがにがしく思った。竹さんも、もっと、 にいらなかった。組長じゃないか。人を叱って気がもめる、も

しっかりしなければいかんと思った。けれども、三杯目のごは

屋から出て行った。

「たんと食べえよ。」と、低く口早に言って、僕の前を通り、部

僕は、少しあわてた。ごはんを、なま噛みのまま呑み込んで 気がもめる。」と言って、にっと笑った。顔が赤い。

僕の口は思わずとがった。なあんだ。大きいなりをして、だ

ものだ。女のごたつきには興味が無いんだ。

「うち、

「僕の知った事じゃない。」あたらしい男は、さっぱりしている

「いやらしい。」竹さんは小さい声で言って顔をしかめた。

僕は軽い口調で言ってやった。 杯ぶんは、そのままおひつに残した。しばらくして竹さんが、 そろしく旧式のひとに違いない。」 何事も無かったような澄ました顔をしてお膳をさげに来た時、 僕はいつものように軽く三杯たべただけで、あとの贔屓の一

んは、

だ。越後獅子の口真似をして言うならば、「竹さんの母親は、お

血にも肉にもなりはしない。なんにもならん。むだな事

親切の形式が、またおいしいとも感じない。おいしくないごは ちょっと閉口だった。僕は、このような種類の親切は好かない。 だたっぷり一杯ぶん、その小さいおひつの底に残ってあるのだ。 と、ちょうど無くなる筈なのに、きょうは三杯よそっても、ま ひつのごはんが、ばかに多いのだ。いつもは、軽く三杯よそう んをよそって、こんどは僕のほうで顔を赤くしてしまった。お

パンドラの匣 そってやったものだそうだが、なんとも無智な、いやらしい愛 ら、たしかに竹さんを一発ぴしゃんと殴ったであろう。どうし は女中が、贔屓の丁稚の茶碗にごはんをこっそり押し込んでよ て僕はいやらしいのだ。いやらしいのは、お前じゃないか。昔

味も無いものらしいが、しかし、僕は女から「いやらしい」と

竹さんの「いやらしい」は口癖のようになっていて、何の意

かったような澄ました顔で部屋から出て行った。

いの低い声で言ってお膳を持ち上げ、そうしてまた、何事も無 「いやらしい子!」と、ほとんど僕にも聞きとれなかったくら

言われると、いい気はしない。実に、いやだ。以前の僕だった

とあけてみて、

「ごはんを残したよ。」

竹さんは、僕のほうをちっとも見ないで、おひつの蓋をちょっ

パンドラの匣 さが増すというような事もないわけではないのだろうが、どう の全塾生はただちに新館バルコニイに集合せよ、という命令を も、立派な女の、へまは、困る。と、ここまでお昼ごはんの後 の休憩を利用して書いたのだが、突然、廊下の拡声機が、新館

だったら、どんな失敗を演じても、かえって可愛く、いじらし 竹さんは、もっとしっかりしなければいけない。これがマア坊 なに利巧そうに涼しく振舞っているだけに、こんな愚行を演じ

なおさら目立って、きたならしくなる。残念な事だ。

たひとだと思っていたが、やっぱり、女はだめだ。ふだんあん

充分の栄養がとれるものなのだ。竹さんを、もっとしっかりし

たとい量が不足でも、明るい気持でよく噛んで食べさえすれば、

あたらしい男としての誇りがあるんだ。ごはんというものは、 情だ。あんまり、みじめだ。ばかにしちゃいけない。僕には、

パンドラの匣 旧館を出て松林の中の細い坂路を、アスファルトの県道の方へ、 が、秋の陽を浴びて美しく光り、近親の人たちに守られながら、

ゆるゆると降りて行った。鳴沢さんのお母さんらしい人が、歩

棺を待った。しばらくして、白い布に包まれた鳴沢さんの寝棺 名、緊張した顔でバルコニイに、四列横隊みたいな形で並び、出 ま沈黙の退場をするのを、みんなで見送るのだという事であっ 深夜、旧館の鳴沢イト子とかいう若い女の塾生が死んで、ただい

新館の男の塾生二十三名、そのほか新館別館の女の塾生六

便箋を片附けて二階のバルコニイに行ってみると、きのうのでは、かたっ

伝えた。

パンドラの匣

れしながら坂路を降りて行く今、ご自身の若い魂を、最も厳粛 死んで、そうして美しい潔白の布に包まれ、松の並木に見え隠

最も明確に、最も雄弁に主張して居られる。僕たちはもう

未完成もない、ただの無に帰する。人間はそれに較べると、ま

ているうちは、みんな未完成だ。虫や小鳥は、生きてうごいて

いものだと思った。人間は死に依って完成せられる。生き

いるうちは完璧だが、死んだとたんに、ただの死骸だ。完成もいるうちは完璧だが、死んだとたんに、ただの死骸だ。

るで逆である。人間は、死んでから一ばん人間らしくなる、と

いうパラドックスも成立するようだ。鳴沢さんは病気と戦って

指導員や助手の一団も、途中まで、首をたれて、ついて行った。 きながらハンケチを眼にあて、泣いているのが見えた。白衣の

て素直に合掌した。

決して、鳴沢さんを忘れる事が出来ない。僕は光る白布に向っ

あたり前の事だ。毎夜、八時半の報告の時間には、さまざ

晩まで、ただ、げたげた笑って暮しているわけではない。それ

朝から

憤と反省と憂鬱の時期に、僕の周囲の空気だけが、あまりにの 給え。僕のこれまでの手紙を見て、君はきっと、この日本の悲 なくなっているだけだ。この一点を、どうか忘れずにいてくれ

んきで明るすぎる事を、不謹慎のように感じたに違いない。 は無理もない事だ。しかし、僕だって阿呆ではない。

無気力な、「死の讃美者」とやらでもないんだ。僕たちは、死と

に取扱っているのでも無いし、また、あのセンチメンタルで

紙一枚の隣合せに住んでいるので、もはや死に就いておどろか

だと思った、とは言っても、決してひとの命を安く見ていい加

君、思い違いしてはいけない。僕は死をよいもの

けれども、

まのニュウスを聞かされる。

黙って毛布をかぶって寝ても、眠

のだ。 死者は完成せられ、生者は出帆の船のデッキに立ってそ

身をゆだねて進んでいるのだ。この所謂天意の船が、どのよう

からぬ大きな船に乗せられ、そうして天の潮路のまにまに

している人には、生死の問題よりも、一輪の花の微笑が身に沁

僕たちはいま、謂わば幽かな花の香にさそわれて、

何だ

ろがっていた小さな石から発しているのだ。

死と隣合せに生活

かりなのだ。僕たちの笑いは、あのパンドラの匣の片隅にこ

鳴沢さんのようになるかも知れない人たち

られない夜がある。しかし僕は、いまはそんなわかり切った事

いっさい君に語りたくないのだ。僕たちは結核患者だ。

今夜

はこの航海を信じなければならぬ。死ぬのか生きるのか、それ

それは僕も知らない。けれども、

僕たち

な島に到達するのか、

かわ みる。 ば

も急に喀血して、

はもう人間の幸不幸を決する鍵では無いような気さえして来た

パンドラの匣

は、「死はよいものだ」などという、ちょっと誤解を招き易いよ さっそくの御返事、なつかしく拝読しました。こないだ、

パンドラの匣

1

には、

死生に関する感傷は無いんだ。

九月八日

マア坊

れに手を合せる。船はするする岸壁から離れる。

「死はよいものだ。」

それはもう熟練の航海者の余裕にも似ていないか。

新しい男

ますが、しかし、僕たちには不思議にそれが気にならない。」と

勇気の形式です。船は、板一まい下は地獄と昔からきまってい に身をゆだねる事が出来るのです。これは新しい世紀の新しい れゆえ、僕たちは、その所謂天意の船に、何の躊躇も無く気軽 さげてしまっていたのです。僕たちのものではありませぬ。そ

「いまの青年は誰でも死と隣り合せの生活をして来ました。敢え まえの人たちには、どうしても理解できないのではあるまいか。 えずには居られない。あの、死に対する平静の気持は、一時代 様子で、実にうれしく思った。やっぱり、時代、という事を考

て、結核患者に限りませぬ。もう僕たちの命は、或るお方にさ

うなあぶない言葉を書き送ったが、それに対して君は、いちぶ

も思い違いするところなく、正確に僕の感じを受取ってくれた

パンドラの匣 「やっとるか。」

塾生と助手が、れいの如く、

うに高く澄んだ心境でベッドに横たわり、そうして廊下では、

の竹さんだのの事はすっかり忘れて、まるできょうの秋空のよ

包まれた美しく光る寝棺を見送ってから、僕はもう、マア坊だ

てもいないのだ。その証拠には、あの鳴沢イト子さんの白布に

「やっとるぞ。」

「がんばれよ。」

また、

です。

なければならぬ。

乱暴な感想を吐いた事に就いては、まじめにおわびを申し上げ

君からいただいた最初のお手紙に対して、「古い」なんて

僕たちは決して、命を粗末にしているわけではない。しかし

死に対していたずらに感傷に沈み、或いは、恐れおびえ

パンドラの匣 僕たちは命を、 に明瞭に理解する事のできる人は、まれなのではあるまいか。 羽のように軽いものだと思っている。けれども

のだ。

ヤケクソとしか理解できない古い時代の人たちは、

気の毒なも

古い時代と、新しい時代と、その二つの時代の感情を共

僕たちのこんな感想を、幼い強がりとか、或いは絶望の果の

じであった。

僕は信じた。

死は決して、人の気持を萎縮させる

ものではない、と。

気取った言い方をするなら、その日一日、道場全体が神聖な感

る塾生たちに、僕はかえって非常に健康なものを感じた。少し

ざけ半分の口調でなくて、

という挨拶を交しているのを聞き、それがいつものようなふ

「ようし来た。」

に気がついた。

そうして、

そのように素直に緊張して叫んでい 何だか真剣な響きのこもっているの

パンドラの匣 中の生活でも報告しているほうが、気が楽だ。どうだい、また り黙って新造の船に身をゆだねて、そうして不思議に明るい船 はどうもこんな「理論」は得手じゃない。新しい男は、やっぱ 一つ、女の話でもしようかね。 鳴沢イト子の死から、とんでもない「理論」が発展したが、僕

方の直接のお言葉のままに出帆する。新しい日本の特徴は、そ

んなところにあるような気さえする。

きまりきったような議論をやたらに大声挙げて続けているうち 思想がどうの、戦争の責任がどうのこうのと、おとなたちが、 その羽毛は、なかなか遠くへ素早く飛ぶ。本当に、いま、愛国

「僕たちは、その人たちを置き去りにして、さっさと尊いお

それは命を粗末にしているという意味ではなくて、僕たちは命

を羽のように軽いものとして愛しているという事だ。そうして

て考えてみたさ。マア坊が僕のところへ来て、なやみがあるの

君より強いかも知れない。お手紙に依ると、君は、マア坊が泣 ますよ。何せ、どうにも、立派な女なのだから。腕力だって、 見しに、この道場へおいでになるといい。拝見したら、幻滅し

いた事なんか、少しも問題ではないが、竹さんの、「うち、気が

すがよい。いや、それよりも、まあ、いちど逢ってごらん。そ ないか。そんなに好きなら、竹さんに君から直接、手紙でも出

君のお手紙では、君は、ばかに竹さんを弁護しているようじゃ

2

のうち、おひまの折に、僕を見舞いに、ではなくて竹さんを拝

もめる」が、大事件だ、というお説のようだが、それは僕だっ

パンドラの匣

パンドラの匣 ち、気がもめる」という事になった、というのがこの場合、頗 すぎたのかしらと反省して、そうして心配になって来て、「う う事を、他の助手から聞いて、それでは自分の叱り方が少し強 る野暮ったいけれども、しかし、最も健全な考え方だと思われ

だけの人なんだ。竹さんが、その前夜、マア坊を叱った。叱っ 組長という重責に緊張して、甲斐々々しく立働いているという 事など、考えているひまも無いようなたちの人なんだ。助手の

たところが、マア坊はひどくしょげて、泣いたりしているとい

うのは、すなわち、竹さんが僕に前から思召しがある証拠では

よ、なんて言って泣いた事に就いて、「うち、気がもめる」とい

なかろうか、とばかな自惚れを起したいところだが、僕には、

て、ちっともお色気の無い人だ。いつも仕事に追われて、他の みじんもそんな気持が起らない。竹さんは、なりばかり大きく

がもめるの事にしても、或いは、ごはん一杯ぶんの贔屓の事にし そうして、あの日、マア坊が僕のところで泣いた事や、また、気 うだけの事で、なんという事もない。きわめて、つまらぬ事だ。 て置かなければならぬ重大な事実が一つあるのだ。それは、鳴 ろ、あの日の全部の変調子を解くために、是非とも考慮に入れ

事にはっと気づいて、少し自分でまごついて顔を赤くしたとい 味で、ふいと言ったその言葉が、案外の妙な響きを持っている も、あれは、マア坊を叱った事に就いて気がもめる、という意

「うち、気がもめる」と言って、竹さんは顔を赤くしたけれど

ちっとも自惚れていないのだ。また、好かれるという事も無い

の事ばかり考えているものさ。あたらしい男は、女に対して、 る。それに違いないのだ。女なんて、どうせ、自分自身の立場

んだ。さっぱりしたものだ。

ころがあって、いいように僕には思われるのだが、君は、ひど

だ。竹さんよりは、マア坊のほうが、まだしも感覚の新しいと

かい。まあいちど道場へ御出張になって、実物を拝見なさる事

けじゃないんだ。冗談じゃない。

どうだ、君、わかったかい。これでも、

君は、竹さんを好き

いるようだ。マア坊も、竹さんも、別段、僕に思召しがあるわ

みんなの変調子は、鳴沢イト子の死と強くむすびついて

淋しくて戸まどいして、そうして、ごはん一杯ぶんの慈善なん意

いか。女には、未だ、古くさい情緒みたいなものが残っている。

て、へんな情緒を発揮したのではあるまいか。とにかく、あの

沢イト子と同様の、若い女だ。衝動も強かったのでは、あるま

沢イト子の死である。鳴沢さんは、その前夜に死んだのだ。笑

い上戸のマア坊が叱られたのもそれでわかる。助手たちは、鳴

とかに当っているのだそうで、それで、つくしをE市まで送っ て行く約束をしたとか、その前の日あたりからマア坊は塾生た

この道場を出る事になって、ちょうどその日がマア坊の公休日

おととい、同室の西脇つくし殿が、いよいよ一家内の都合で

うは一つその事の次第を御紹介しましょう。君も、きっと、マ

ア坊を好きになるだろうと思う。

3

あったか、マア坊が、とても気だてのよいところを見せてくれ

て、僕は、にわかにまたマア坊を見直したというわけだが、きょ

くマア坊をきらいらしいね。考え直したらどうかね。マア坊に

は、やっぱり、ちょっといいところがあるんだぜ。おとといで

パンドラの匣 こんな時のお土産だって、かなり贅沢だ。お土産は、どこでど それがまた塾生たちの人気の原因の一つになっているようで、

坊なども、どうやらその組らしく、仕事も遊び半分のようだし、

の娘でも、やはり家を出て働かなければならぬ様子だが、マア

まのような手不足の時代には、かなりの暮しをしている家

そのくせポケットの温かなせいか、いつもなかなか気前がよく、

なく、にこにこ笑いながら帰って来て、部屋々々を廻って約束 鍛錬をはじめていたら、こいしい人と別れて来たひとらしくも 追っていそいそ出かけ、そうして午後の三時頃、僕たちが屈伸

のお土産を塾生たちにくばって歩いていた。

迫されて、よし心得た、と気軽に合点々々していたが、おとと

いの朝早く、久留米絣のモンペイをはいて、つくし殿のあとを

ちに大いにからかわれて、お土産をたのむ、とほうぼうから強

パンドラの匣 だと思っていたし、 マア坊が僕たちの部屋へやって来て、かっ

めからお土産の強迫などもしなかったし、また、

みんなと同じ

もちゃの懐中鏡一枚の恩恵に浴したところで、つまらない事

もらった。僕は、女からものをもらうのは、いやだから、はじ

帰ったのかも知れないが、とにかく、いかにもマア坊らしい思 駄菓子屋かおもちゃ屋のストックを、そんなに数十枚も買って

いつきのお土産だ。塾生たちには、裏の映画女優の写真がいた

お気に召した様子で、たいへんな騒ぎ方だ。かっぽれも一枚

駄菓子屋の景物などに、ただでくれたしろものだが、いまはこだがらや

裏に映画女優の写真が貼られてある。昔は、こんなものは、

んな具合いに入手したのか、一寸に二寸くらいのおもちゃの鏡

んなものでも、買うとなると決して安くないだろう。どこかの

ぽれに鏡を手渡し、

パンドラの匣 ばりには、いや。意地わるだから、いや。」 「どうだかね。ではまあ、いただいて置きましょう。ダニエ?」

さんにでもあげるんだね。」

「ぜいたく言ってる。特別に、あなただけに差上げるのよ。ひ

わくば、そうしてもらいたい。こいつは、向うの小柴のひばり はつまらねえ。日本の女優の写真とかえてくれねえか。あい願 ん人気があったのよ。知らないの?」

「ちがうわよ、フランスのひとよ。ひところ東京では、ずいぶ

「なんだ、アメリカか。」

「あら、いやだ。ダニエル・ダリュウじゃないの。」

「知らねえが、べっぴんだ。マア坊にそっくりじゃないか。」

「かっぽれさんは、この女優を知ってる?」

「知らねえ。フランスでも何でも、とにかくこれは返すよ。毛唐

パンドラの匣 案外早くやって来た。 マア坊に、真面目に聞いてみようと思った。そうして、機会は、

思った。いったい僕の、どこがいけないのだろう。こんど一つ

幻影に酔って生きているものであろうか。現実は、きびしいと

いても、まだまだ底には底があるものだ。人間は所詮、

自己の

い及ばなかった。自分の地位を最低のところに置いたつもりで

続けていたが、さすがに面白くなかった。僕がそんなにマア坊

そんな二人の会話を聞いて、僕はにこりともせず屈伸鍛錬を

「ダニエルよ。ダニエル・ダリュウ。」

なかったが、こんなに僕ひとり憎まれてきらわれているとは思

にきらわれていたのか。好かれているとは、もちろん思ってい

パンドラの匣 場は、 あ、と大きく口をあけ、それから口をとがらせて顎をひき、そ わばったような笑い方をして、ちょっと掌を口の横にかざし、 ていないかと、あたりに気をくばるような具合いであった。 いま安静の時間である。しんとしていた。マア坊は、こ

「土産をくれないの?」と言ってみた。

マア坊は振向き、僕を見つけて笑った。

マア坊は、すぐには答えず、四辺を素早く身廻した。誰か見

を持ってひょいと庭に出て来た。僕は思わず立ち上り、窓から

上半身乗り出して、

「マア坊。」と小さい声で呼んだ。

やり窓の外を眺めていたら、白衣に着かえたマア坊が、洗濯物

その日の四時すぎ、自然の時間に、僕はベッドに腰かけてぼん

中で呟き、僕は、どさんとベッドに寝ころがった。僕のよろこ をきゅっとすくめて笑い、小走りに別館のようへ走って行った。 た掌を、内緒、内緒、とでもいうように小さく横に振って、肩 「あとでね、か。案ずるより生むが易し、だ。」そんな事を心の

振りで可愛く通信してみせて、それから、口の横にかざしてい を一字一字区切って、子供がこっくりこっくりをするような身 「ア、ト、デ?」と聞きかえすと、もう一度、「ア、ト、デ、ネ」 ぐにわかった。

「ア、ト、デ、ネ」と言っているのだ。

すぐにわかったけれども、わざと、同じ様に口の形だけで、

さず、つまり口の形だけで通信しているのである。僕には、す を三分の二ほどひらいてまた、こっくり首肯いた。声を全然出 の次に、口を半分くらいひらいてこっくり首肯き、それから口

パンドラの匣 の贈物であったのだ。 昨夜の七時半の摩擦は、約一週間ぶりでマア坊の番に当って、

だが、図々しくこちらから近寄って手を差しのべ、「どうした

へのお土産を忍ばせてあるのではあるまいかとも思っていたの

に廊下をうろついて、ひょっとしたら、あのエプロンの下に僕 は、エプロンの下に何か隠しているようなふうで、意味ありげ トデネ」のお土産をもらった。きのうの朝から、時々、マア坊

は知らん顔をしていたのだ。けれども、やっぱり、それは僕へ の?」などと逆襲されると、これはまた大恥辱であるから、僕

マア坊は左手に金盥をかかえ、右手をエプロンの下に隠し、に

せる。

びに就いては説明する必要もあるまい。すべて、御賢察にまか

そうして、きのうの夜の摩擦の時、僕はマア坊から、その「ア

たわ。」 だもの。お土産を渡そうとしても、どうしたらいいのか、困っ 「ひばりの摩擦は、久しぶりね。なかなか番が廻って来ないん 僕は自分の首のところに手をやって、結ぶ真似をして、ネク

みこんで、

ていたのに。」

やりにやりと笑いながらやって来て、僕のベッドの側にしゃが

「意地わる。取りに来ないんだもの。けさから何度も廊下で待っ

物をその中に滑り込ませて、ぴったり引出しをしめ、

そう言ってベッドの引出しをあけ、素早くエプロンの下の品

「言っちゃ、いやよ。誰にも、言っちゃいやよ。」

僕は寝ながら二度も三度も小さく首肯いた。摩擦に取りかかっ

パンドラの匣 僕は、こんどは右手で、ものを書く真似をして、万年筆か?

クタイなんて妙なものを考えたのだろう。われながら、おかし

或いは、あの小さい懐中鏡から無意識にネクタイを聯想し

実際、ばかだ。僕には、背広さえ無いのに、何だってまた、ネ

たのかも知れない。

5

小声で言った。

タイか?という意味の無言の質問をすると、

「ううん。」と下唇を突き出して笑って否定し、「ばかねえ。」と

筆がこの頃はどうも具合が悪いので、あたらしいのが欲しいと

という意味の質問をしてみた。実に僕は勝手な男だ。僕の万年

パンドラの匣 僕は内心、自分の図々しさに呆れたよ。 ら、きっと要るわよ。」 お店に、たった一つ残っていたのよ。飾りも、ちっとも上等で ないけど、ここを出てから持って歩いてね。ひばりは紳士だか でもう、見当がつかない。 「ちょっと、地味かも知れないけど、人にやったりしないでね。 「ううん。」マア坊は、やっぱり首を横に振って否定する。まる 「何を言ってるの。ぼんやりねえ、この子は。さっさと早くな 「とにかく、ありがとう。」僕は寝返りを打ちながら言った。 いよいよ、わからなくなった。まさか、ステッキじゃあるま

いう意識が潜在していたらしく、ついこんな時ひょいと出る。

おって、いなくなるといい。」

パンドラの匣 指を折って数え上げて、「わあい。」と言って笑った。 たまねぎでしょう? カクランでしょう?」と一人々々左手の の耳元に口を寄せて、「竹さんでしょう? キントトでしょう? 「あるわよ、意味があるわよ。」と強く言い張って、それから僕

くらでもあるわ。」ちょっと考えてから、「三人、いや、四人あ

「あたしが泣かなくたって、ひばりには、泣いてくれる人がい

「そうだろうと思った。」

「しょってるわ。泣くもんですか。泣くわけがないじゃないの。」

「マア坊かい?」

「あら、だめよ。泣くひとがあるわ。」

「おおきに、お世話だ。いっそ、ここで、死んでやろうかね。」

るわ。」

「泣くなんて、意味が無い。」

パンドラの匣 きながら、ベッドの引出しをさぐり、マア坊の贈物を取り出し、

よいよこの地方にも来るという知らせを、拡声機を通して聞

その夜、

摩擦がすんで、

報告の時間に、アメリカの進駐軍が

葉みたいなものだ。なんの我執も無い。あたらしい男は、

また

ひとつ飛躍をしました。

く楽しく遊んだのだ。好くも好かれるも、五月の風に騒ぐ木の

も知れぬが、自分でも不思議なほど、心に少しのこだわりも無

慾望を、

えるし、

対して固くなるような事はなく、

その夜の摩擦はたのしかった。

僕も以前のように、マア坊に いまでは何だか皆を高所から

「カクランも泣くのか。」僕も笑った。

見下しているような涼しい余裕が出来ていて、自由に冗談も言

、これもつまり、女に好かれたいなどという息ぐるしい この半箇月ほどの間に全部あっさり捨て去ったせいか

パンドラの匣 それは、ステンレッスというのか、ケーキナイフなどに使って

6

うだ。

るうちに、僕は何だかひどく悲しくなって来た。うれしくない

それを箱から出して、ちょとひっくりかえしたりして見てい

のだ。あながち、世間のニュウスのせいばかりでも無かったよ

れでわかった。

包をほどいた。

から、きっと要るわよ」という先刻の不可解な言葉の意味も、こ 入っていた。「ここを出てから持って歩いてね、ひばりは紳士だ

三寸四方くらいの小さい包で、中には、シガレットケースが

パンドラの匣 胸苦しくていけないものだ。はなはだ後味のわるいものだ。僕 は、引出しの奥の一ばん底に、ケースを隠した。早く忘れてし

とから、ものをもらうのは、はじめての経験であるが、実に妙に はいけないが、本当にちっとも嬉しくないのだ。よその女のひ まあ、せっかくマア坊が買って来てくれたのだから、とにかく

と地味」だし、また「ちっとも上等でなく」なっている。でも

大事にしまって置くべきであろう。

どうも、しかし、愉快でない。もらって、こんな事を言うの

黒い線の模様があって、その蓋の縁には小豆色のエナメルみたい

なものが塗られてある。このエナメルが無ければよいのに、この エナメルの不要な飾りのために、マア坊の言うように、「ちょっ

る。蓋には薔薇の蔓を図案化したような、こんがらかった細い あるクロームのような金属で出来た銀色の、平たいケースであ

固パンの出現に依って、「桜の間」の空気も、へんにしら 男から見ていやなやつほど、女に好かれるよ

ろりとしてロイド眼鏡をかけて、鷲鼻で、

あまり感じはよくな

眉が太く、

眼はぎょ

それでも、助手さんたちから、大いに騒がれているのだ

なかなかの人気者らしい。色浅黒く、

が移って来た。姓名は須川五郎、二十六歳。法科の学生だそうが移って来た。姓名は須川五郎、二十六歳。

うがいいかね。

きょうは、

つくしのベッドに、

隣りの「白鳥の間」の固パン

てもらいたくて、

まいたい。

うだね、少しはマア坊を見直したかね。やっぱり、竹さんのほ

御感想をお聞かせ下さい。

し、こんな経緯に依って、マア坊のよさを少しでも君にわかっ

以上、御報告の一文をしたためた次第だ。ど

ケースには、僕も、少し閉口して、持てあましの形だが、しか

うだ。

そうだ。どうも、

パンドラの匣

助手さんたちは固パンに向って英語を色々たずねて、 てことを何というの?」 て答える。 「アイ、ベッグ、ユウア、パアドン。」固パンは、ひどく気取っ 「プリイズ、テッキャア、オブ、ユアセルフ。」 take care を、 「それじゃあね。」と別な助手さんが、「どうぞお大事にね、っ 「ヴェリイ、ソオリイ。」実に気取って言う。 「覚えにくいわ。もっと簡単な言いかたが無いの?」 「ねえ、教えてよ。ごめんなさいね、ってのは英語でどういう

じらしいものになって来た。かっぽれは、既に少し固パンに対

して敵意を抱いているようだ。きょうの夕食前の摩擦の時にも、

テッキャアと発音する。なんとも、どうも、きざな事であった。

衛生について

パンドラの匣

く太っていた。 歌ったりして、とにかく、さかんに固パンを牽制しようとあせっ ている様子であった。 『末は博士か大臣か、よしな書生にゃ金が無い』

九月十六日

断然、

好調である。

僕はしかし、元気だ。きょう体重をはかったら、四百匁ちか

声でれいの御自慢の都々逸、

ぽれには、

助手さんたちは、それでも大いに感心して聞いている。かっ

僕以上に固パンの英語が癇にさわるらしく、小さい

とかいうのを

の蓋がよく合わぬので、そこから細菌が忍び入り、このように

パンドラの匣 があった。とうとう、かっぽれが固パンに敢然と挑戦したのだ。 たちの消息をお伝え申しましょう。きのう「桜の間」では喧嘩 れは、これは容れ物の悪いせいではあるまいかと考えた。小鉢 けれども、このごろ、その梅干にかびが生えはじめた。かっぽ の度に、ベッドの下の戸棚から取出しては梅干をつついていた。 は、かねて、瀬戸の小鉢があって、それに梅干をいれて、ごはん の報告を怠っていたようだから、きょうは一つ「桜の間」の塾生 それが甚だ、どうにもややこしい話なのである。かっぽれに 原因は梅干である。 こないだから、女の事ばかり書いて、同室の諸先輩に就いて

1

パンドラの匣

ならぬ。そう思って、かっぽれは、食事がすんでから、おそる

空いたのだから、固パンも気軽く貸してくれるだろう。

固パン

いかなる細菌も、

に頭を下げるのは癪だが、でも、細菌を防ぐためには、どうし

てもあのらっきょうの瓶が必要である。衛生を重んじなければ

容れ物があるまいかと、

かっぽれは前から思案にくれていたと

の固パンがやはり、食事の度毎に持出していたらっきょうの瓶

いうような按配なのだ。ところが、きのうの朝食の時、

お隣り

いいと思った。口も大きいし、そうして、しっかり栓も出来る。

あの瓶の中には忍び込む事が出来まい。もう

ちょうど空いたのを、かっぽれは横目で見とどけ、

あれが

なかなか綺麗好きなひとなんだ。どうにも気になる。何かよい

かびが生える結果になったのに違いないと考えた。かっぽれは、

パンドラの匣 「わかりませんかねえ。」かっぽれは、少しおされ気味になって、

にも堅くるしく、気取っている男なのである。

「なぜ、いけないのです。」固パンは、にこりともしない。どう

到って固パンがめきめき色男の評判を高めて、かっぽれの影はは、この健康道場第一等の色男を以て任じていたのに、最近に

この健康道場第一等の色男を以て任じていたのに、最近に

からこの二人の間には暗雲が低迷していたのである。かっぽれ

その言い方が、かっぽれに、ぐっと来たというのである。前

「こんなものを、どうするのです。」

固パンは、かっぽれの顔をまっすぐに見て、

薄くなり、むしゃくしゃしていた矢先だったのである。

「こんなもの? 須川さん、そんな言い方をしてもいいのです

か。」かっぽれの言い方も妙である。

にやにやと無理に笑って、「私があなたから、まさか、豚のしっ

パンドラの匣 何が何だか、さっぱりわけのわからない口説になって来た。

ているのだ。人間、衛生を知らなけれゃ、犬畜生と同じわけの

おれには学はねえが、それでも衛生を尊ぶ事だけは、

知っ

お前さんは、とかげのしっぽだ。一視同仁というもの 豚のしっぽみたいに扱いましたね。おれが豚のしっ

ものなんだ。-

もおれを、

大学生だって左官だって、同じ日本国の臣民じゃないか。よく んと来るんだから仕様がねえじゃないか。馬鹿にしなさんな。 お前さんが、豚のしっぽと言わなくたって、こちとらには、ぴ

「わからない人だね。」かっぽれは、少し凄くなった。「かりに

言われては、私の立つ瀬が無くなります。」いよいよ妙だ。

は豚のしっぽなんて事は言いません。」

ぽを借りようとしたわけではなし、こんなもの、とにべもなく

色男修行の道場でもないんですぜ。場長の清盛も、こないだの

パンドラの匣 言って置くけど、この道場は、柔道の道場でもなければ、また、 るから恐れいる。あいつぁ、ごめんだぜ。いいかい、はっきり

を使やしねえだろうな。大学生には時たまあれを使うやつがあ

「え、おい、聞いているのですか、そこな大学生。まさか柔道

左右にゆすぶり、腕まくりするやら、自分の膝を自分のこぶし

でぽんぽん叩くやら、しきりにやきもきして、

仰向にベッドの上に寝ころがった。度胸のある男のように見え

「パンは一向それに取合わず、両手を頭のうしろに組んで、

['] かっぽれは、ベッドの上にあぐらを掻いて、からだを前後

古

2

は、だから、そこのところを言ってると思うんだ。いやしくも けの事に自然になって行くんだ。常に衛生、火の用心というの いんだ。」 一個の人間を豚のしっぽと較べられるわけのものじゃ絶対に無

に声を張り上げ、「だから、それだから、衛生が大事だというわ んど支離滅裂である。それでも、かっぽれは顔を青くしてさら てるなんて、問題になるわけのものじゃ決してないんだ。」ほと 人間、智仁勇、この三つが大事というわけになるんだ。女にも に大勇あり小勇あり、ともいうべきわけのところだ。だから、 男子、義を見てせざれば勇なきなり、というわけのものだ。勇 自重を望む、と言いましたがね。おれはあの時、涙が出たね。 講話で言っていた。諸君は選手である。結核の必ず全治すると

いう証拠を、日本全国に向って示すところの選手である。切に

パンドラの匣 向って呶鳴った。そこまでは立派であったが、それから少しま

下には、他の部屋の塾生たちが、五、六人まごついて、こちら

して、うわっ、うわっ、と声を一つずつ区切って泣出した。廊

の様子をうかがっている。

「見ては、いけない。」と越後獅子は、その廊下の塾生たちに

子に抱きついた。そうして越後獅子の懐に顔を押し込むように

かっぽれは、くるりと越後獅子のほうに向き直って、越後獅

叩いて、やめろやめろ、とちょっと威厳のある口調で言ったの 時むっくり起きてベッドから降り、かっぽれのうしろから肩を は、それまでベッドの上に黙って寝ころんでいたのだが、その

「やめろ、やめろ。」と越後獅子が仲裁にはいった。越後獅子

である。

ずかった。「喧嘩ではないぞ! 単なる、単なる、ううむ、単な

パンドラの匣 り聞きとれぬような、ろれつの廻らぬ口調で、くどくどと訴え 児獅子というような形で、顔を振り振り泣きじゃくり、はっきょかっぽれは、それこそ親獅子のふところにかき抱かれている

だ。

「単なる、」と越後は元気を恢復して、「芝居の作用だ。」と叫ん

る、単なる、ううむ」と唸って、とほうに暮れたように、僕の

ほうをちらと見た。

「お芝居。」と僕は小声で言った。

思って、とっさのうちに芝居の作用という珍奇な言葉を案出し

も、こんな具合いに無理をして生きているのかも知れない。 て叫んだのではないかと思われる。おとなというものは、いつ 若輩から教えられた事をそのまま言うのは、沽券にかかわると

芝居の作用とは、どういう意味か解しかねるが、僕のような

度は! くやしくて、残念でならねえのです。なんだ、あの態

れを、ベッドに寝ころがって知らん振りして、なんだ、

様と思って、一ばんいい事ばかり言ったのです。一ばんいいと

わたが煮えくりかえって、おれは、すじみちの立った挨拶を仕 ねえのだ。それなのに、豚のしっぽ同然にあしらわれて、はら

ころばかり選んで言おうと思ったんだ。本当に、おれは、一ば

んのいい事だけを言ってやったつもりなんだ。それなのに、そ

あの態

ちが、悪くねえのです。おれは、おやじにだって殴られた事は

「おれは、生れてから、こんな赤恥をかいた事はねえのだ。育

は

じめた。

3

パンドラの匣

差出した時にも、すみません、とぴょこんとお辞儀をして素直 きょうの空瓶を綺麗に洗って来て、どうぞ、と言って真面目に としていた。 らくしゃくり上げていたが、やがて眠ったみたいに静かになっ れは、固パンのほうに背を向けて寝て、顔を両手で覆って、しば に受け取り、そうして昼食がすんでから、梅干を一つずつ瀬戸 の通りのかっぽれさんにかえっていて、固パンが、れいのらっ た。八時の屈伸鍛錬の時間になっても、その形のままで、じっ 実に妙な喧嘩であった。けれども、昼食の頃にはもう、もと 越後は、かっぽれをそっとベッドに寝かせてやった。かっぽ

度は! ひとが一ばんいい事を言っているのに、あの態度は!

つくづく世間が、イヤになった。ひとが一ばんいい事を、――」

だんだん同じ様な事ばかり繰り返して言うようになった。

パンドラの匣 というほめ方が、いたく気にいった様子である。女って、あさ て涼しく微笑んでいる。 「誰や。」沈黙女史も、つい小声で言った。マア坊よりもいい、 「マア坊なんかより、竹さんのほうが十倍もいいと言ってた。」

簡単な御報告がある。

の中の人が皆、かっぽれさんのようにあっさりしていたら、こ の小鉢から、らっきょうの瓶に、たのしそうに移していた。世

の世の中も、もっと住みよくなるに違いないと思われた。

喧嘩の事に就いては、これくらいにして、ついでにもう一つ

ことを少し言った。

「竹さんを、とても好きだと言っている人があるんだけど。」 竹さんは、摩擦の時には、ほとんど口をきかない。いつも黙っ

きょうの午後の摩擦は、竹さんだった。僕は、竹さんに君の

パンドラの匣 引きあげる時に、竹さんはおくれ毛を掻き上げて、妙に笑い、 「ヴェリイ、ソオリイ。」と言った。 ごめんなさいね、って言ったつもりなんだろう。ちょっと竹

自分の額の汗をぬぐって言った。

「そうかね、それじゃもう教えない。」

竹さんは黙っていた。黙って摩擦をつづけた。摩擦がすんで

「いやらしい。ひばりは、このごろ、あかんな。」左の手の甲で

だよ。」

少し手荒く摩擦をつづける。眉をひそめて、不機嫌そうな顔だ。

「怒ったの? そのひとは、本当にいいやつなんだがね。詩人

「好かん。」竹さんはそう一こと言ったきりで、シャッシャッと

はかなものだ。

「うれしいかい?」

当道場へやって来ないか。君の大好きな竹さんを見せてあげま

さんも、わるくないね。どうだい、君、そのうちにひまを見て、

用心とはここのところだ。僕と二人ぶんの御勉強おねがい申し すよ。冗談、失礼。朝夕すずしくなりました。常に衛生、火の

上げます。

九月二十二日

コスモス

パンドラの匣 いかけたら、越後は即座に、 「僕の友だちで、詩の勉強をしている男があるんですが、」と言

三百、思い 邪 無し、とかいう言葉があったじゃありませんか。

ければ、新しい男とは言えません。色気を捨てる事ですね。詩

天真爛漫を心掛けましょう。こないだお隣りの越後獅子に、

気が小さい。こだわらずに、竹さんに軽く挨拶出来るようでな なった」というお言葉には賛成いたしかねます。君も、ずいぶん れいりました。けれども、「もう僕は君をお見舞いに行けなく

竹さんに、あんな事を言うとはけしからぬとのお叱り。おそ

いかと、それが気になります。

書くのは、たいへんでしょう。これからは、いちいちこんな長

い御返事の必要はありません。勉強のさまたげになるのではな

はいると、勉強もいそがしいだろうに、こんなに長い御手紙を

なんだ。勇気を出して、当道場を訪問して、竹さんをひとめ見 たが、なに、竹さんなんかの事は気にするな、というだけの事

るといい。現物を見ると、君の幻想は、たちまち雲散霧消する。

ます。

君の新しい男としての真の面目を見せて下さるよう、お願いし

なんて、妙に思いあがった、先輩ぶった言い方をしまし

が、どうか、これからは、詩の修行はもとより、何につけても、

思った。賢明な君の事だから、すでにお気づきの事と思います 作に答えたが、越後も、ちょっと、あなどりがたい事を言うと りませんか。」と言い返した。越後獅子は、にやりと笑って、

「でも、詩人は言葉を新しくすると昔から言われているじゃあ

「詩人は、きざだ。」と乱暴極まる断定を下したので、僕は少し

「そう。こんにちの新しい発明が無ければいけない。」と無雑

むっとして、

「桜の間」の選手として、お得意の俳句を提出する事になり、二、 う事になって、和歌、俳句、詩に自信のある人は、あすの晩ま でに事務所に作品を提出せよとの事で、かっぽれは、僕たちの こんどの日曜の慰安放送は、塾生たちの文芸作品の発表会とい

もしたら大変だ。

ひかえようと思う。この上、君に熱をあげられて、寝込まれで んだから恐れいりました。しばらく竹さんに就いての御報告は しゃって、一向にみとめてはくれず、ひたすら竹さん竹さんな

きょうは一つ、かっぽれさんの俳句でも御紹介しましょうか。

何せもうただ立派で、そうして大鯛なんだからね。それにして

も君は、ずいぶん竹さんに打ち込んだものだね。僕があれほど、 マア坊の可愛らしさを強調して書いてやっても、「マア坊とやら いう女性などは、出来そこないの映画女優の如く」なんておっ

評はひどいと思った。

を丸めて、その紙片をねらうようにつくづくと見つめ、

「けしからぬ。」と言った。

下手だとか何とか言うなら、まだしも、けしからぬという批

た。次に、越後獅子に見せて御批評を乞うた。越後獅子は背中

わかりません。」と言って、すぐにその紙片を返却し

2

まず、

「僕には、

十句ばかり便箋に書きつらねたのを、同室の僕たちに披露した。 り、真剣に句を案じていたが、けさ、やっとまとまったそうで、 三日前から鉛筆を耳にはさみ、ベッドの上に正坐して首をひね

固パンに見せたけれども、固パンは苦笑して、

パンドラの匣 とでもいうのか、ありふれたような句であるが、これでも、自分 で作るとなると、なかなか骨の折れるものなのではあるまいか。 た。そんなにまずいものではないように僕には思われた。 乱れ咲く乙女心の野菊かな、なんてのは少しへんだが、それ 月並

うに、

を顎でしゃくった。

「そちらの先生に聞きなさい。」と言って越後は、ぐいと僕の方

かっぽれは、僕のところに便箋を持って来た。僕は不風流だ

「だめでしょうか。」とお伺いした。

かっぽれは、蒼ざめて、

だが、どうも、かっぽれが気の毒で、何とかなぐさめてやりた

すぐに返却しておゆるしを乞うべきところでもあったの 俳句の妙味などてんでわからない。やっぱり固パンのよ

わかりもしない癖に、とにかくその十ばかりの句を拝読し

パンドラの匣 の句が一ばんいいと私は思っているんですがね。」 そりゃ、いい筈だ。俳句の門外漢の僕でさえ知っているほど

をあからさまに言って、かっぽれに赤恥をかかせるような事も

誰やらの句だ。これは、いけないと思った。けれども、それ

したわけも、よくわかった。

の世は露の世ながらさりながら

でも、けしからぬと怒るほどの下手さではないと思った。けれ

最後の一句に突き当って、はっとした。越後獅子が憤慨

したくなかった。

ですけど。」

のと取りかえたら、もっとよくなるんじゃないかな。素人考え

「どれもみな、うまいと思いますけど、この、最後の一句は他

「そうですかね。」かっぽれは不服らしく、口をとがらせた。「そ

パンドラの匣 どう考えます。露の世でしょう? その露の世は露の世である。 うんだが、わからねえかな。」と、少し僕を軽蔑するような口調 だねえ、と言わんばかりに、眉をひそめ、「日本のいまの運命を 国に対する私のまごころも、この句には織り込まれてあると思 「わからねえかな。」と、かっぽれは、君もずいぶんトンマな男 「どんな、まごころなんです。」と僕も、もはや笑わずに反問し 「わかりますかね。」かっぽれは図に乗って来た。「いまの日本 「いい事は、いいに違いないでしょうけど。」 僕は、ちょっと途方に暮れた。

有名な句なんだもの。

さりながら、諸君、光明を求めて進もうじゃないか。いたずら

パンドラの匣 作品として事務所に提出されては、この「桜の間」の名誉にも かかわると思ったので、僕は、勇気を出して、はっきり言って

あそぶのは悪い事だし、それにこの句をそのまま、かっぽれの 成だが、とにかく古人の句を盗んで勝手な意味をつけて、もて くりかえしている。これが越後の所謂「こんにちの新しい発明」

しら。それを、まあ、ひどいじゃないか。きれいに意味をひっ しくてあきらめ切れぬという気持の句だった筈ではなかったか 子供に死なれて、露の世とあきらめてはいるが、それでも、悲

かも知れないが、あまりにひどい。かっぽれのまごころには賛

んだ。

。わかりますかね。」

これがすなわち私の日本に対するまごころというわけのものな

しかし、僕は内心あっけにとられた。この句は、君、一茶が

に悲観する勿れ、といったような意味になって来るじゃないか。

パンドラの匣 ないと僕は考え直した。実に無邪気な罪人である。まさに思い るくらいに美しく澄んでいた。盗んで、自分で気がつかぬ、 かっぽれは眼を丸くして僕を見つめた。その眼は、溜息が出

だわけじゃないでしょうけど、誤解されるといけませんから、 これは、他のと取りかえたほうがいいと思うんです。」

「でも、これとよく似た句が昔の人の句にもあるんです。盗ん

「似たような句があるんですか。」

やった。

3

いう奇妙な心理も、俳句の天狗たちには、あり得る事かも知れ

邪無しである。

の事まで言ってしまった。 「コスモスの影おどるなり乾むしろ、ですかね。なるほど、情

盗んだ句でさえなければ今は安心の気持だった。「ついでに、コ

「けっこうです。」僕は、ほっとして言った。下手でも何でも、

スモスの、と直したらどうでしょう。」と安心のあまり、よけい

素早くしたためて僕に見せた。

コスモスや影おどるなり乾むしろ

んなのはどうでしょう。」と、僕のベッドの枕元の小机で何やら 鉛筆で、あっさり、露の世の句の上に棒を引き、「かわりに、こ 似た句が出来るわけですよ。」どうも、かっぽれは、常習犯らし があるんで、こまるのです。何せ、たった十七文字ですからね。

「そいつは、つまらねえ事になった。俳句には、時々こんな事

い。「ええと、それではこれを消して、」と耳にはさんであった

パンドラの匣 もないらしく真顔で頼んで、そうして意気揚々と、れいの爪先 これからも俳句の相談に乗ってくれと、まんざらお世辞だけで けれども、かっぽれは、どうやら僕を尊敬したようである。

たちには、わかり易くていいような気がしたものですから。」 全くわからないんです。ただ、コスモスの、としたほうが、僕

そんなもの、どっちだっていいじゃないか、と内心の声は叫

モスや、のほうがいいのかも知れませんよ。僕には俳句の事は、 「おだてちゃいけません。」落ちつかない気持になった。「コス んと叩いた。「隅に置けねえや。」

僕は赤面した。

景がはっきりして来ますね。偉いねえ。」と言って僕の背中をぽ

んでもいた。

き立ってお尻を軽く振って歩く、あの、音楽的な、ちょんちょん

パンドラの匣 ていて、そうして、かっぽれが彼女に小声で言っているのを聞

けさの八時の摩擦の時には、マア坊が、かっぽれの番に当っ

けれども話は、これだけじゃないんだ。さらに驚くべき事実

いてびっくりした。

が

現出した。

かず、

閉口の気持で、僕は、

どうにも、かなわない気持であった。

文句入りの都々逸以上に困ると思った。どうにも落ちつ

俳句の相談役など、じっ

歩きをして自分のベッドに引き上げて行き、僕はそれを見送り、

言った。さすがの新しい男も、かっぽれの俳句には、

まいった

「とんでもない事になりました。」と思わず越後に向って愚痴を

のである。

越後獅子は黙って重く首肯した。

あやしくなって来た。実に、ひどいひとだ。本当に、あきれる 句も、くさい。やっぱりあれも、マア坊か誰か助手さんの作っ た句なのではあるまいか。何だか、あの十の俳句がことごとく た。とすると、あの、乱れ咲く乙女心の野菊かな、とかいう変な そういえば、あの句にはちょっと女の感覚らしいものがあっ おどろいた。あれは、マア坊の句なのだ。

でも、気をつけろ。コスモスや、てのはまずいぜ、コスモスの、 「マア坊の、あの、コスモスの句、な、あれは悪くねえけど、

ばかりだ。あの露の世の句にしても、また、このコスモスの句

泊と言おうか、軽快と言おうか、形容の言葉に窮するくらいだ。 「してみると、カクランの句かな?」落ちついたものである。淡

の交換だか何だか、こっそりやってたわね。わあい、だ。」

「カクランの句じゃない? あなたはいつか、カクランと俳句

「そうかい。それじゃ、おれの句だったかな?」あっさりして

坊は、のんびりしている。

それからまた、かっぽれとマア坊との間に交された会話を聞い

いったい、どんな事になるのだろうと、はらはらしたが、でも、

て安心し、たいへんいい気持になったのだ。

「コスモスの句って、どんなの? わすれてしまったわ。」マア

な事は言わずとも、かっぽれさんの人格問題として、これは、

にしても、これは「桜の間」の名誉にかかわる、などと大袈裟

た。この人たちには、作者の名なんて、どうでもいいんだ。み これこそは僕にとって、所謂「こんにちの新しい発明」であっ 僕は微笑した。

「そう。しっかりやってね。」

「うん。あれは、もう、いれてあるんだ。」

果して然りだ。しかし、かっぽれは、一向に平気で、

んなで力を合せて作ったもののような気がしているのだ。そう

あなたに教えてあげたでしょう? 乱れ咲く乙女心の、という

「慰安放送?」あたしの句も一緒に出してよ。ほら、いつか、

な。」すでにここに到っては、天衣無縫とでもいうより他は無 「カクランの句にしては、うますぎるよ。きゃつ、盗みやがった

い。「こんど、おれは、あの句を出すんだ。」

パンドラの匣 強」をしやしないのだ。自分の心にふれた作品だけを自分流儀 に就いて、ただいま事新しく教えられたような気がした。 で覚えて置くのだ。それだけなんだ。僕は芸術と民衆との関係 または、趣味の向上だなんて事のために無理に芸術の「勉

句が面白くなけりゃ、無関心なのだ。

社交上のエチケットだと

茶が作っても、かっぽれが作っても、マア坊が作っても、その

好むところの曲目に耳を澄まして楽しんでいるのではあるまい 民衆たちは、その議論を置き去りにして、さっさとめいめいの

あの人たちには、作者なんて、てんで有り難くないんだ。一

謂その道の「通人」たちが口角泡をとばして議論している間に、

かろうか。ベートーヴェンに限るの、リストは二流だのと、所

芸術と、民衆との関係は、元来そんなものだったのではな

して、みんなで一日を楽しみ合う事が出来たら、それでいいの

1

あ

こんなかっぽれの小さい挿話でも、

、君の詩の修行に於いて

何か「新しい発明」にでも役立ってくれたら、と思って、この

きょうの手紙は、妙に理窟っぽくなったけれども、でも、

手紙を破らずにこのまま差し上げる事にしました。

流れる水だ。ことごとくの岸を撫でて流れる。

僕は、

僕はみんなを愛している。きざかね。

九月二十六日

妹

パンドラの匣

くらいだ。とにかく、なんとも、ひどいんだ。

それでは、きょうは一つその偉大なる書翰に就いてちょっと

べき手紙をものするとは、全く、神か魔かと疑ってみたくなる

世の中にはさまざまの事がある。あのひとが、あんな恐る

だしも罪が軽いほうだ、と少しく安堵した次第である。どうも、 紙を書くおかたもあるのだから、僕の君に送る手紙などは、ま ものだと、つくづく感歎して、世の中には、こんなばかげた手 し、きょう或るひとの実に偉大な書翰に接し、上には上がある

かしい手紙なんか書くまいと決意する事も再三あったが、しか ふっと気まりの悪いような思いに襲われ、もうこんな、ばかば

僕がいつも君に、こんな下手な、つまらぬ手紙を書いて、時々

パンドラの匣 「おい、その辺に僕の手拭いが無いか。」僕は、がんばれよの呼

びかけには答えず、眼をつぶったまま、マア坊のほうに両手を

らないのである。

「がんばれよ。」

た挨拶の受け答えが、めんどうくさくて、うるさくって、たま るいい加減の返辞をした。どうも、このごろ、このきまりきっ

「やっとる、やっとる。」僕は、石鹸を頭にぬたくりながら、頗

理髪屋が二人出張して来て、塾生の散髪日という事になったの らかたすんだけれど、午後も日課はお休みになって、そうして

。五時頃、僕は散髪をすまして、洗面所で坊主頭を洗って

いると、誰か、すっと傍へ寄って来て、

「ひばり、やっとるか。」

マア坊である。

パンドラの匣 う? その意味といて。」

んだい、この手紙は。」

「つくしから来たのよ。おしまいの所に、歌が書いてあるでしょ

「それどころじゃないんだ。頭を洗っているんじゃないか。な

よしきた、と言わないの。がんばれよ、と言われて、ようしき

「ひばりの意地わる。」マア坊は笑いながら僕を睨んだ。「なぜ、

「なんだい、これは。」僕は顔をしかめて尋ねた。

た、と答えない人は、病気がわるくなっているのよ。」

僕は、いやな気がした。いよいよ、むくれて、

あけて見ると、手紙だ。

右手にふわりと便箋のようなものが載せられた。片目を細く

出した。

石鹸が眼に流れ込まないように用心しながら、両方の眼を渋

パンドラの匣 「意地わる!」マア坊は僕の手から便箋をひったくって、小走

ベッドの枕元の引出しの中にある。」

手紙はその辺に置いといて、僕の手拭いを持って来てくれない

「うるさいな。僕は頭を洗ってるんだ。後で教えてあげるから、 「どんな意味?」低く言って、いやにぴったり寄り添って来た。

か。部屋に置き忘れて来たらしいんだ。ベッドの上に無ければ、

歌にちがいない。つくしの作った歌じゃないぜ。」 やいたわけで

「こんなの、わからんかねえ。これは、万葉集からでも取った

しゃれてると思った。

はないが、ちょっと、けちをつけてやった。

くあけて、その便箋のおしまいの所の歌を読んでみた。

相見ずて日長くなりぬ此頃は如何に好去くやいぶかし吾妹

りに部屋のほうへ走って行った。

真面目な顔で、何も言わずに、手渡すとすぐにすたすたと向うましゅ

ならぬ。あそこが、ちょっとむずかしかったので、手拭いにか

ころを、なんと解釈してやったらいいか、考えて置かなければ

何にさきくや」の解釈の仕方を考え考え、頭の石鹸を洗い落し こつけて、即答を避けたというわけでもあったのだ。僕は「如 までは馴れっこになって、まるで平気だ。さて、それでは、マ

る」である。以前は、言われる度に、ひやりとしたものだが、い

竹さんの口癖は、「いやらしい」だし、マア坊のは「意地わ

2

ア坊のいない間に、さっきの歌の「如何に好去くや」というと

パンドラの匣 ていたら、マア坊は、手拭いを持って来て、そうしてこんどは

パンドラの匣 ほこりを避ける意味で、新館の前庭にちょっと出たが、おかげ かん」ところがある。けさの大掃除の時に、塾生全部が室内の

怒るだろう。こないだも、竹さんに、「ひばりは、このごろ、あ 拭いを持って来いなんて言ってしまって、あれでは、マア坊も うようになっていた状態でもあったので、つい、ぶあいそに手 別の好意だの、何だの、そんなものはどうだっていいとさえ思 鈍感になって、助手が塾生の世話をするのは当り前の事で、特 どに話かけられても、以前のような興奮を覚えないし、まるで の道場の生活に狎れて、ここへ来た当時の緊張を失い、マア坊な

はっと思った。僕が悪いとすぐに思った。どうも僕はこのご 、すれたというのか痲痺 したというのか、いつのまにやらこ

へ行ってしまった。

かんな。」と言われたけれど、本当に、僕にはこのごろ少し「あ

呆れてしまった。最初のあの新鮮なおののきを、何事に於いて。。 持ちつづけていたいものだ、とその時つくづく思ったのだ

十分間くらい経ったら消滅してしまった。何も感じなくなった。

の馴致性というのか、変通性というのか、自身のたより無さに

してしまって平気になった。僕はそれに気がついて、人間

なまぐさいほど強く実感せられた。けれども、そんな驚きも、 た重さに感心した。自然は、生きている、という当り前の事が、 強さに驚き、それから両手で土を掬い上げて。そのしっとりし

のみたいに、温かかった。僕はしゃがんで、足もとの草の香の

僕は松の幹を撫でた。松の幹は生きて血がかよっているも

出の許可を得たのは、僕がここへ来てからはじめての事であっ

のテニスコートなどに降りてみる事はあっても、正々堂々の外 で僕は実に久し振りで土を踏む事が出来た。時々こっそり、裏

は人の好意にさえ狎れてしまっている。僕は、シガレットケー

ア坊のもったいない胸底をあかしてくれた仕草なのかも知れな は今では、つくし以上に僕に好意を寄せているのだという、マ しからの内緒の手紙を、僕に見せるという事は、或いは、マア坊

いや、それほど自惚れて考えなくても、とにかく僕は、マ

ア坊の信頼を裏切ったのは確かだ。僕が以前ほどマア坊を好き

あるのだ。すみれの花くらいの小さい誇りかも知れないが、そ

僕はいま、マア坊の友情を無視したという形である。つく あわれな誇りをこそ大事にいたわってやらなければなら 気持を抱きはじめているのではなかろうか、とマア坊に怒られ

が、この道場の生活に対しても、僕はもうそろそろいい加減な

てはっと思い当ったというわけなのだ。マア坊にだって誇りは

でなくなったからと言ったって、それは、僕のわがままだ。僕

パンドラの匣

パンドラの匣 「あの手紙は?」と僕はすぐに尋ねた。 遠いところを見ているような、ぼんやりした眼つきをして、

前でマア坊と運よく逢った。

すのも早いんだ。洗面所から出て、部屋へ帰る途中、炭部屋の

あやまちを改むるにはばかる事なかれだ。新しい男は、出直

スをもらった事さえ忘れている。よろしくない。実に悪い。

「がんばれよ。」と呼びかけられたら、その好意に感奮して、大

「ようしきた!」と答えなければならぬ。

3

黙って首を振った。

き刺されたような気がした。女って、凄いものだね。僕は部屋 行ってしまった。実に、異様にするどい口調であった。僕は突 へ帰って、ベッドの上にごろりと寝ころがり、「万事、休す」と 「もういい。」と、ぽいと投げ棄てるように言って、さっさと

ばならぬ義務がある。僕は、それこそ、まさしく、猫撫で声を たが、しかし、僕にはマア坊のあわれな誇りをいたわらなけれ やだ。よそから借りて来た猫みたいだ。勝手にしろ、とも思っ やはり、ただ首を振るだけで返辞をしない。女は、これだからい

「さっきは、ごめんね。あの歌の意味はね、」と言いかけたら、

を取りに行った時に、あの手紙を、僕のベッドの引出しにでも、 ほうり込んで来たのではあるまいかと思って聞いてみたのだが、

「ベッドの引出し?」ひょっとしたらマア坊は、さっき手拭い

パンドラの匣 き直り、 小さく折り畳んだ便箋を僕に手渡し、同時に固パンのほうに向 「やい、こら、固パン、白状せい。」と大声で言って、「テニス

「これ見せたげる。あとで意味教えて。」とひどく早口で言って

を寄せ、

坊のその手をつかまえようとしたら、

「いやあ。」と叫んで逃げて僕のところまで来て、僕の耳元に口

パンの背中をどんと叩いて、固パンが、こら! と言ってマア

たわいない冗談を言い出し、きゃっきゃっと騒ぎはじめて、固 しなに固パンのところに立寄って、とたんに人が変ったように 冷たくとり澄まして、僕の枕元の小机の上にお膳を置き、帰り

ところが、夕食の時、お膳を持って来たのは、マア坊である。

心の中で大きく叫んだ。

パンドラの匣 たと思いながら、食後にこっそり読んでみたが、いや、これが いたわるために、一覧しなければならぬ。やっかいな事になっ

快でなかった。そうして僕の手には一通の手紙が残された。僕

して、部屋を出て行った。何がなんだか、わけがわからない。

「どなたも、ごゆっくり。」とマア坊は笑いながら一同の者に会釈

マア坊にいい加減になぶられているような気がして、あまり愉

は他人の手紙など見たくない。しかし、マア坊の小さい誇りを

平そうに小声で言って、食事にとりかかった。

「お江戸日本橋なら、おれだって知ってらあ。」とかっぽれは不

「知らんよ、知らんよ。」と固パンは、顔を赤くして懸命に否定

している。

コートで、お江戸日本橋を歌っていらっしゃったのは、どなた

パンドラの匣

静か

「過ぎし想い出の地、道場の森、私は窓辺によりかかり、

以下はその偉大なる手紙の全文である。

うな愚かな甘い一面を隠し持っているものであろうか。とにか まことに案外なものである。おとなというのは、みんなこのよ うな西脇つくし殿も、かげでこんな馬鹿げた手紙を書くとは、

洗面所では終りの一枚のほんの一端だけを読まされたのだ ちょっとその書翰の文面を書き写してお目にかけましょう

こんどは始めからの三枚の便箋全部を手渡しされたのであ

何やら、

君、実に偉大な書翰であったのだ。恋文というものであろうか、

、まるで見当がつかない。あんな常識円満のおとなしそ

正しく生きんがために努力しよう! 男だ!

男だ!

男だ!!

に我が霊魂を導く星の光あり、世はうつり、ころべど、人生を

ぱりわからない。珍らしい文章である。もう少し書き写してみ らしい。それだけはわかるのだが、あとは何の意味やら、さっ 病院に行ったのだが、その病院は、どうやら海辺に建っている

ましょう。文脈がいよいよ不可思議に右往左往するのである。

「夕月が波にしずむとき、黒闇がよもを襲うとき、空のあなた

波がいたく吠えている。

然して汐風が吹き荒れているが為に。」 静かに寄せ来る波……然し、沖には白

なんの意味も無いじゃないか。

これで

は返す波を眺めている。

に人生の新しい一頁とも云うべき事柄を頭に描きつつ、寄せて

というのが書き出しだ。

はマア坊も当惑する筈だ。万葉集以上に難解な文章だ。つくし

この道場を出て、それからつくしの故郷の北海道のほうの

パンドラの匣 これからも御便りを送ってゆきたいと思う。わかってくれるだ

ろう、妹よ!!

ら理解してくれることと思う。それであって私の妹だと思い、

幸福であろう。妹よ!

あり、日々朝夕愛すべき者は科学であり、自然の美である。共

「それは人じゃない、物じゃない、学問であり、仕事の根源で

にこの二つは一体となって私を心から熱愛してくれるであろう

私も熱愛している。ああ私は妹を得、恋人を得、ああ何と

私の! 兄のこの気持、念願を、心か

脈がますます奇怪に荒れ狂う。実に怒濤の如きものだ。

なんの事やら、さっぱりわからぬ。そうして、この辺から、文

私には今与えられた天分と云おうか、何と云っていいか、ああ、

頑張って行こう。私は今ここに貴女を妹と呼ばして頂きたい。

やはり恋人と云って熱愛すべき方がいい。」

パンドラの匣 ん !! 考えないようにして下さい。 考える頃なれど、あまり神経を使うというのか、深い深い事を ることと思います。 話になりし貴女に妹などと申して済みませんが、理解して下さ よく味わい繰返し繰返し熟読されたし。 れて遊ばん! おわかりの事と思う。きょうのこの手紙、よく いお天気ですが、風が強いです。偉大なる自然! えらい堅い文章になって申わけありませんでした。然も御世 では最後に兄として一言。 相見ずて日長くなりぬ此頃は如何に好去くやいぶかし吾妹 がんばれよ、わがいとしき妹!! 貴女の年頃になれば男女とも色んなことを **私も俗界を離れます。きょうはい** 有難うよ、マサ子ちゃ われ泣きぬ

兄より」

うもこの偉大なる書翰を書き写したら、妙に手首がだるくなっ まざるを得ないだろう。名文と言おうか、魔文と言おうか、ど 世の中には不思議な事があるものだ。マア坊が「意味教えて」

と言うのも無理がない。こんな手紙をもらった人は災難だ。悩

間は、決して狂人ではない。内気なやさしい人なんだ。あんな

破天荒とでもいうべきだ。けれども、西脇一夫氏という人

いい人が、こんな滅茶苦茶な手紙を書くのだから、実際、このいい人が、こんな滅茶苦茶な手紙を書くのだから、実際、この

前に兄を附けるのも妙な趣向だが、とにかく、これは最後の万

まず、ざっと、こんなものだ。一夫兄よりなんて、自分の名

のだと思う。真似して書こうたって、書けるものではない。実

何が何やらさっぱりわからない。ひどいも

葉の歌一つの他は、

パンドラの匣 て、字がうまく書けなくなって来た。これで失敬しよう。また

パンドラの匣

は、軽く首肯いてやった。すると、マア坊も、真面目にこっくは、軽く首背いてやった。すると、マア坊も、まじゅ

字が書けなくなり、尻切とんぼのお手紙になって失礼しました。 あの日、夕食後に僕が、あの手紙を読んで呆然としていたら、 マア坊が、廊下の窓から、ちらと顔をのぞかせて、「読んだ?」

昨日は、どうも、つくし殿の名文に圧倒され、ペンが震えて

十月五日

試れ

とでもいうような無言のお伺いの眼つきをして見せたので、僕

ろへ来た。こんなに早くマア坊が僕の番にまわって来るとは思 して笑いを噛み殺しているような表情で、まっすぐに僕のとこ いがけなかった事なので、僕はほとんど無意識に、 「よかったね。」と小声で言ってしまった。うれしかったのだ。

摩擦に、金盥をかかえてひょいと部屋の戸口にあらわれ、そう

秋は、かなしいものだ。笑っちゃいけない。まじめなのだ。 まにやら、そうなっていた。どうも秋は、いけない。なるほど、 を感じたのだ。鈍感な男ではなくなったというわけだ。いつの すると、僕はその時以来、あらたにまた、マア坊に新鮮な魅力 そうして、僕はマア坊をたまらなく、いじらしく思った。白状

話そう。あの、大掃除の翌る日、マア坊が朝の八時の

んも罪な人だと僕はその時、へんな義憤みたいなものを感じた。 り首肯いた。ひどく、あの手紙を気にしているらしい。西脇さ

パンドラの匣 た。あきらかに僕は不機嫌だった。 「枕元の引出しにある。」僕は仰向に寝たまま顔をしかめて言っサヘータール

当座も、僕はマア坊の摩擦の時には、妙に緊張して具合いの悪

い思いをしたものだが、ふたたびあの緊張感がよみがえって来

るい?」ひどく、あっさりした口調である。僕には、それが少 のよ。竹さんに他の御用が出来たから、あたしが代ったの。わ て、さっさと僕の摩擦に取りかかり、「けさは竹さんの番だった

「いい加減言ってる。」マア坊はうるさそうに言って、そうし

し不満だったので、何も答えず、黙っていた。マア坊も黙って

。次第に息ぐるしく、窮屈になって来た。この道場へ来た

て、どうも、窮屈でかなわなかった。摩擦が、すんだ。

「ありがとう。」僕は寝呆け声で言った。

「手紙、かえして!」マア坊は、小声で、けれども鋭く囁いた。

て、うなずいた。全く、不可解であった。

誰にも言うな、というような身振りをした。僕は浮かぬ顔をしピネ 眼で尋ねたら、竹さんは、顔をしかめて烈しくイヤイヤをして、 さい人形が置かれてある。顔を挙げて竹さんに、これは? と けてやろう、と僕は覚悟して、お昼の休憩時間を待った。

お昼ごはんは、竹さんが持って来た。お膳の隅に竹細工の小

れならば、僕にも考えがある。思い切り、こっぴどく、やっつ してあげると、すぐにあんなに、つんけんする。よろしい、そ

不思議なくらいよそよそしかった。こっちがちょっと親切に そう言い棄て僕の返辞も待たず、さっさと引き上げて行った。 ない?
その時かえして。」

「いいわ、お昼食がすんだら、洗面所へちょっといらっしゃら

に持ちつづけていた感情で、いまさらどうにも動かしがたいの

パンドラの匣 先ではあったが、どういうものか、僕には竹さんのこんな好意 好意には素直に感奮すべきだと前の日に思いをあらたにした矢 びた口調で言って立ち去った。 は有り難くない。それは僕が、この道場に来た当初から変らず 元気の無い尋ね方をした。 「可愛いやろ? 「お土産か。」と僕は、なぜだか、がっかりしたような気持で、 僕は、ぽかんとした気持だった。少しもうれしくない。人の 藤娘や。しまっとき。」と姉のような、おとな

通の音声で言った。

2

道場の急用で、まちへ行って来たのや。」と竹さんは普

どうやら、ごたぶんにもれぬほうらしい。ちょっと不良じみた

マア坊なんかのほうが、ずっと気のきいた買い物をする。仕方

ない。気のいい人は、必ず買い物が下手なものだが、竹さんも、

娘と称する二寸ばかりの高さの竹細工の人形を眺めたが、見れ

僕は、ごはんを食べながら、つくづくとお膳の隅の、その藤

んかを買って来て、藤娘や、可愛いやろ? もないもんだ。

マア坊なんかとは、わけが違うのだ。こんな、つまらぬ人形な いる立派な人なのだから、もっと、しっかりしなければならぬ。 だ。竹さんは、助手の組長で、そうして道場の皆に信頼されて

駅の売店で埃をかぶって店ざらしになっていたしろものに違い ば見るほど、まずい人形だった。どうも趣味がわるい。これは

パンドラの匣

僕の顔を見上げた。僕は、まぶしかった。 葉が出た。 「え? どうして?」と、少し笑いながら眼をまんまるくして

を感じた。

向きに立って、くすくす笑っていた。僕はちらと不愉快なもの

「君は、時々こんな事をするんだろう。」と、自分にも意外な言

ア坊は、洗面所の一ばん奥の壁にぴったり背中をつけてこちら はとにかくマア坊のお指図どおりに、洗面所へ行ってみた。マ ら、これくらいにして置いて、さて、そのお昼ごはんの後に、僕 竹さんの事をあまり書くと、君がまた熱をあげるといけないか とまずベッドの引出しにしまい込んで置く事にした。けれども、 悟を極めた手前もあり、しょんぼりした気持で、その土産はひ な誇りをこそ大事にいたわってやらなければ、などと殊勝な覚

くして僕の顔をまっすぐに見て、「恥ずかしくない?」 「恥ずかしい。」僕は、あっさりかぶとを脱いだ。「やいたんだ。」

「あたしを、そんな女だと思っていたのね。ひばり、」と顔を蒼霧

「なぜ、だめなんだ。」僕のほうが受け身になった。

マア坊は、金歯を光らせて笑った。

ぱり、だめね。」

「ありがとう。」とちっとも笑わずに受取って、「ひばりも、やっ

るように上体を前にこごめて歩きかけた。

「手紙を持って来たよ。」僕は手紙を差出した。

「そう? そんなら、よしましょう。」と軽く言って、お辞儀す

流石にそれはひどく下品な言葉のように思われたから、口ごもっぱすが

「塾生を時々ここへ、」ひっぱり込んで、と言いかけたのだが、

は、好きになっちゃった。」心にもない、あさはかなお追従ばか

ただちにマア坊に糺明せられ、今は、ほとんど駄目になった。 最も恥ずべきやきもちの心が起り、つい、あらぬ事を口走って、 ると、マア坊が、あんまりなまめかしかったので、男子として じて意気があがらず、憂鬱にちかい気持でこの洗面所に来てみ

「全部読んだよ。面白かった。つくしって、いいひとだね。

あったのだが、竹さんからつまらぬ藤娘なんてお土産をもらっ

「僕、その手紙を読んだよ。」大いにとっちめてやるつもりで

3

て、出鼻をくじかれ、マア坊に対してうしろめたいものさえ感

パンドラの匣

り言っている。

パンドラの匣 事を言ってしまって、ひやりとした。 のを、オタンチンっていうのだ。ミイチャンハアチャンともい で意外だったのだ。 「君のほうからも、手紙を出したんだろう。」またもや要らない 「まったく、意外だわ。」マア坊にとっては、いかにも、重大な 「それじゃ君が誘惑したのだ。君は不良少女みたいだ。そんな 「出したわ。」けろりとしている。 「うん、僕もちょっと意外に思った。」僕の場合、あんまり下手 僕は急に面白くなくなった。

り、便箋をひらいて眺めた。

「でも、意外だわ。こんな手紙。」マア坊は仔細らしく首をひね

うし、チンピラともいうし、また、トッピンシャンともいうん

パンドラの匣 いやで、いやで、身悶えしちゃったわ。」 「ええ、そうよ。それなのに、こんなお手紙を寄こすんだもの、 「なあんだ。」僕は、機嫌を直した。「それだけの事だったのか。」 「それだけよ。」

袋を二足いただいたから、あたし、奥さんに礼状を出しといた あたしがまちの駅まで送って行って、その時に奥さんから白足

「それだけか。」

だ。けしからんじゃないか、君は。」と思い切り罵倒してやった

が、マア坊はこんどは怒るどころか、げらげら笑い出した。

「まじめに聞いてくれよ。殊に、つくしには奥さんがある。

い事じゃないんだぜ。」

「だから、奥さんにお礼状を出したの。つくしが道場を出る時、

ろを向いてヒイと泣き出した。そうして、それこそ身悶えして、 らないくせに、ひばりなんかは、」と言いかけて、くるりとうし 思ってやしないよ。」 「ばか、ばか。ひばりは、なんにも知らないのよ。なんにも知

た。「君は不真面目だ。僕は何も君に、好きになってもらおうと

「何を言ってやがる。話が違うよ。」僕はいよいよ不機嫌になっ

様が無いじゃないか。あれは仲のよさそうな夫婦だったぜ。」 やがる。つまらない。奥さんのある人を好きになったって、仕

「だって、ひばりを好きになっても仕様が無いでしょう?」

「なあんだ。」僕は、また面白くなくなって来た。「馬鹿にしてい

くしを好きなんだろう。」

「好きだわ。」

「何も身悶えしなくたって、いいじゃないか。君は、本当は、つ

パンドラの匣 どうしてあんな気障な事を言ったのだろう。いま考えてみる

も無理がないと思うんだ。泣け、泣け、うんと泣け。僕も一緒

しい、いい人だったからな。マア坊が、つくしを好きになるの しを好きなのか。僕だって、つくしを好きだよ。あれは、やさ いているうちに、何だか、僕も一緒に泣きたくなって来た。

僕は出処進退に窮した。口をとがらして洗面所をぶらぶら歩

「あっちへ、行って!」と強く言った。

「マア坊。」と呼ぶ僕の声は、ふるえていた。「そんなに、つく

と夢のような気がする。僕は泣こうと思った。しかし、ちょっ

に泣くぜ。」

パンドラの匣 かそうおっしゃってたわ。世界的な学者ですってね。」 ひばりのお父さんて、偉いお方ですってね。場長さんが、いつ から、道場も変っちゃったなあ。なんにも知らないでしょう? コートのほうを眺めながら、ひとり言のように、「ひばりが来て

だ。」そう言いながら、僕の胸は妙に躍った。

「とんまねえ、ひばりは。」と僕と並んで洗面所の窓からテニス

のわるいほど静かな、落ちついた口調で言った。

「見られたってかまわない。悪い事をしているわけじゃないん

いて、「お部屋へお帰り。人に見られると、わるいわ。」と気味

「早く、」いつの間にやらマア坊が、僕の傍にひっそりと立って

銀杏を黙って眺めていた。

大きく睜って、洗面所の窓からテニスコートの黄ばみはじめた と眼頭が熱くなっただけで、涙は一滴も出なかった。僕は眼を

パンドラの匣 「そいつぁ、敬遠というものなんだ。好きなんじゃないんだ。」 僕は苦笑した。けちくさい愛情だと思った。

りに迷惑がかかるような事になるといけないから、みんな気を そうなのよ。でも塾生さんたちにいやな噂を立てられて、ひば 竹さんだけでなく、キントトだって、たまねぎだって、みんな

つけて、ひばりに近寄らないようにしているのよ。」

他人の噂なんかしないひとなんだけど、ひばりには夢中なのよ。 を見たことが無いって、竹さんも言ってた。竹さんはめったに るくなったわ。みんなの気持も変ってしまった。あんないい子 さんとは、もう二箇月も逢わない。相変らず、障子が震動する

「貧乏なので、世界的なのだ。」ひどく淋しくなって来た。お父

ほどの大きな音をたてて鼻をかんでいるであろうか

「血筋がいいのね。ひばりが来たら、道場が本当に、急にあか

パンドラの匣 た。「あたしはもう、だめなのよ。あなたは知らないでしょう? じゃないわ。」言葉も態度も別人のように露骨で下品になって来

ど、なんとも思ってやしないわ。そんなに人を馬鹿にするもん

い手紙だったら、誰が見せるもんか。あたしは、つくしの事な

「知ってるわ。下手な手紙だからお見せしたんじゃないの。い

くしの手紙の下手さには呆れた。」

「せいぜい、つくしと文通するさ。僕は、はっきり言うけど、つ

僕はマア坊の傍からそっと離れ、

をそのままそっと背中に置いた。「あたしは違うのよ。あたし

「あら、あんなこと。」マア坊は僕の背中を軽く叩いて、その手

りで話したってかまわないのよ。思い違いしないでね。あたし は、ひばりをちっとも好きでないの。だから、こうして二人き

パンドラの匣 うべ、お月さまが、あかるくて、眠れなくて、庭へ出て、それ から、ひばりの枕元の、カアテンが、少しあいていたので、の

い方が無いものだ。とんでもない事になったと思った。

「よせ、よせ。」と僕は言った。こんな時には、それより他に言

「困る? どうなの? ね、この上、また恥をかかすの? ゆ

僕をぐいぐい押すのである。

5

顔を伏せて右肩を突き出し、くすくす笑いながらその肩先で

そう言われてもいいの?」

だって事を、もう、みんなに言われているのよ。どうするの? とんまだから、気がつかないんだ。あたしは、あなたといい仲

パンドラの匣 んて、だらしない事はきらいなんだ。」 「もう、講話の時間だ。失敬するぜ。僕は、

時間におくれるな

あがり立てみたいに、ぽっと赤かった。

顔を仰向にして髪を掻き上げ、あははと笑った。顔はお湯から

「だめねえ、そんなんじゃないのよ。」マア坊は僕から離れて、

て来るスリッパの足音が聞こえる。

い、誰か、こっちへ来るぜ。」ぱたぱたと、洗面所のほうへやっ

「無理だよ。どだい無理だよ。僕は二十なんだ。困るんだ。お

なって来た。

うするの?

ながら、眠ってたわ。あの寝顔、よかったな。ね、ひばり、ど ぞいてみたの、知ってる? ひばりは、月の光を浴びて、笑い

とうとう壁際まで押しつけた。僕は、なんだか、ばからしく

パンドラの匣 いろな例証を挙げて具体的にわかり易く説明して下さった。日 いう若い先生が、主として医学の交流に就いて、昔からのいろ やがて講話がはじまり、日支文明の交流という題で、岡木と

奇妙なものだ。僕は気が弱くなってしまったのかも知れない。

のような閉口迷惑を感ぜず、素直に耳傾けて拝聴したのだから

ちの芝が人に踏まれても朝露によみがえるとかいう意味の、

前

にひっくりかえって、れいの都々逸なるものを歌っていた。

部屋へ帰ったら、まだ講話は始まらず、かっぽれが、ベッド

にも幾度か聞かされた都々逸であるが、その時だけは、

その声が、一ばん僕の心にしみた。

秋は、いけない。

「竹さんと仲よくしちゃ駄目よ。」とマア坊が、細い声で言った。

僕は洗面所から走り出た。とたんに、

パンドラの匣 しさ、あわれさに陶然としていたいのだ。無邪気なふりを装っ つくしの事も、僕の事も、問題じゃないんだ。ただ、自分の美

自惚れは無い。マア坊はいつも自分の事ばかり考えているのだ。タヘルぼ何の意味も無いという事は僕だって知っている。僕には馬鹿な何の意味も無いという事は僕だって知っている。僕には馬鹿な

思い余ったような素振りをいろいろしてみせたが、あれには、

かと思っていたら、案外な、愚かな女だった。さっき、あんな、

いったい、あの、マア坊がいけないのだ。もう少し聡明な女

たいとつくづく思った。

しまい、以前のような何のくったくも無い模範的な塾生になり が、どうにも気がかりになって、早くマア坊の事なんか忘れて も多かったが、けれども、それにつけても、僕のきょうの秘密 本と支那とは、いつも互いに教え合って進んで来た国だという

いまさらの如く深く首肯せられ、反省させられるところ

パンドラの匣 心の高さは、女王さまみたいだ。とても、いたわりきれるもの

たのに違いない。すみれほどの誇りどころか、あのひとの自尊

度をかえ、泣くやら、押すやら、あらぬ事を口走る結果になっ

どく馬鹿にしているのを、マア坊は敏感に察して、たちまち態 威張りたかったのではあるまいか。けれども僕がその手紙をひ

マア坊は、あの、つくしの手紙を僕に見せて、やっぱり少し

ら、ひとのものは何でも欲しいだろうし、マア坊の策略くらい

にも負けたくないだろうし、そうして、ひどい慾張りなんだか ているけれども、どうしてなかなか虚栄心が強いのだから、誰

は僕にだって看破できる。

6

パンドラの匣 ける悪夢に就いて、そんなに、こだわりを感じないようになっ そのように覚悟をきめたら、やっと僕は、さっきの洗面所に於

露骨な言動を示したならば、僕は断然、組長の竹さんに訴えて、 鍛錬に精進しているところなのだ。もう一度、マア坊があんな 道場は神聖なところだ。みんな一心に結核征服を念じて朝夕の

マア坊を道場から追放してもらおうと覚悟した。

だったのかも知れない。落ちついて考えるに随って、腹が立っ やしさがある。本当に、越後の言うように、母親がいけない人 でいるのだ。マア坊には、たしなみのない、本質的な育ちのい で人から、ひやかされた事は一回も無い。マア坊ひとりが騒い るとか言っていたが、ばかばかしい。僕は今まで、マア坊の事 でない。僕とマア坊といい仲だって事をみんなが言い囃してい

て来た。マア坊には、道場の助手としての資格が無いと思った。

熱を上げるのも無理はないと思った。君は流石に詩人だけあっ

勘がいい。眼が高い。偉い。

君があまり、竹さんに熱を上

あげたい。竹さんの夢だ。竹さんは、

いい人だね。けさ、つく

づくそう思った。あんな人は、めったにいない。君が竹さんに

うして、これは、いい夢だ。いい夢は、忘れたくない。人生に、

の翌日、つまり、けさの、未明に、僕はもう一つ夢を見た。そ

夢には、こだわらぬつもりだが、しかし、その洗面所の悪夢

あたらしい男は、ややこしい事は大きらいだ。

何かつながりを持たせたい。これは、是非とも君にも知らせて

行かない。僕はそんな感傷的な宗教家、または詩人の心を持つ 君を殴った夢を見たって、僕はその翌日、君におわびを言いには

てはいない。

た。

あ

れは、悪い夢だ。悪い夢は、人生につながりの無いものだ。

さんであったが、竹さんはれいの通り、無言でシャッシャッと かっぽれを相手にきゃあきゃあ騒ぎ、そのとき、僕の摩擦は竹

うんと好いてくれ。僕も、君に負けずに竹さんを、もっとうん

り堕落させたりなんかしない人だ。どうか、竹さんを、もっと、

竹さんを、どんなに好いても、竹さんはその人を寝込ませた

と信頼するつもりだ。それにつけても、マア坊は馬鹿な女だね

要だという事が、けさ、はっきりわかった。

げるので、寝込まれたりしても困ると思って、その後、竹さん

に就いての御報告を控えめにしていたが、そんな心配は全然不

損いそのものであった。きのう、あれから、マア坊が夜の八時 え。竹さんとはまるで逆だ。全くお説の通り、映画女優の出来

の、お昼の事などはきれいに忘れてしまったように、固パンや、 の摩擦に、自分の番でも無いのに「桜の間」にやって来て、あ

パンドラの匣 は、ぶざまで、見られたものでない。マア坊が、くるりと廻れ を好きなのである。僕に下手な好意を示したりする時の竹さん 僕は、こんな具合いに落ちついて、しゃんとしている竹さん

答える。

ても、

「おおきに、」と軽く会釈して、「すぐ、すみます。」と澄まして

「竹さん、手伝いましょうか。」と乱暴な、ふざけた口調で言っ

時々にっこり笑い、マア坊がつかつかと僕たちの傍へやって来 あざやかな手つきで摩擦して、マア坊たちのつまらぬ冗談にも

小さい声で、 金盥をかかえ、隣りの「白鳥の間」へ摩擦の応援に出かけて、そ その時ひそかに思った。竹さんは、さっさと摩擦をすませて、 のあとへ、マア坊がにやにや笑ってまたもや僕のベッドを訪れ、 つんと答えた。 「芯は、いい子や。」と竹さんは、いつくしむような口調で、ぽ 「きざな子だって言ったんだ。」 「竹さんに、何か言った。たしかに言った。あたしは、知って 「マア坊って、きざな人だね。」と小声で竹さんに言った。 やはり竹さんはマア坊より、人間としての格が上かな? と

「意地わる! どうせ、そうよ。」案外、怒らぬ。「ね、あれ、

右してまた固パンのほうへ行った時、僕は、

パンドラの匣 明けちかく、ふと眼がさめた。廊下の残置燈の光で部屋はぼん や、なんて俳句をよもうよ。いかが?」 妙に、しんみり言って、それから、いきなり大声で、「やっぱ 「あら、いやだわ。一生、持っててね。お邪魔でしょうけど。」 「そのへんの引出しだ。返してもいいぜ。」 「うん。どこに、しまってあるの?」 その夜は、そんな事で、格別の異変も無く寝に就いたが、夜 どうも、さわがしい。 ちょっと来て! ここで並んでお月さまを拝もうよ。明月 ひばりの所から一ばんお月まさがよく見える。かっぽれさ

持ってる?」両手の指で四角の形を作って見せる。

「ケースかい?」

やり明るい。枕元の時計を見ると、五時すこし前だった。外は、

パンドラの匣 と起きて、足音を忍ばせて廊下に出た。 洗面所には、青いはだかの電球が一つ灯っている。のぞいて

らない。さっき笑って消えた人は、あれだ。たしかに、あそこ

あれだ! と思った。どういう理由でそう思ったのか、わか

に、いま、いるのだ。そう思うと、我慢が出来なくなって、そっ

もしているような水の音が幽かに聞えて来た。

して、遠くの洗面所のほうから、しゃっしゃっというお洗濯で と苦笑してベッドにもぐったが、どうにも気になる。しばらく 女だって、まさか、こんな時間に。僕も案外、ロマンチストだ、 てこな気持だった。寝呆けたのかしら。いくらマア坊が滅茶なてこな気持だった。 た。僕は起きてカアテンをはねのけて見たが、何も無い。へん すぐ頭にひらめいた。白い顔だ。たしかに笑って、すっと消え まだ、まっくらのようだ。窓から誰かが見ている。マア坊! と

8

くらい闇には、何かただならぬ気配がうごめいているものだ。

じめての、おそろしい慾望に懊悩した。夜の明ける直前のまっ 拭き掃除の姿を見ていた。白状するが、僕はこの時、生れては か。

僕は、うまく口がきけず、ただ胸をわくわくさせて竹さんの いつもこんなに早く起きて掃除をはじめているのであろう それでも黙って床板を拭いている。顔がひどく痩せ細って見え ぶりにして、大島のアンコに似ていた。振りかえって僕を見て、

道場の人たちは悉く、まだ、しずかに眠っている。竹さん

ことごと

見ると、絣の着物に白いエプロンをかけて、 で、竹さんが、洗面所の床板を拭いていた。

手拭をあねさんか 丸くしゃがみ込ん

パンドラの匣 足だけでなく、僕の心の奥の隅まで綺麗になったような気がし

た。あの奇妙な、おそろしい慾望も消えていた。僕は、足を拭

らその雑巾を持って僕の傍へ来てしゃがんで、僕の右の足裏も、

竹さんは立ち上り、流しで雑巾をじゃぶじゃぶ洗い、それか

り興奮してやって来たので、草履をはくのを忘れていた。

気がついてみると、いかにも僕は、はだしであった。あんま

「気のもめる子やな。足、お拭き。」

を寝呆けて言ってんのや。ああ、いやらし。裸足やないか。」

「いいえ、」振り向いて僕を見て、少し笑い、「ぼんぼん、なに

「庭へ出た?」

「竹さん、さっき、」声が咽喉にひっからまる。喘ぎ喘ぎ言った。

どうも、洗面所は、僕には鬼門である。

左の足裏も、きゅっきゅと強くこするようにして拭いてくれた。

パンドラの匣 呆けたのかしら。」 の拭き掃除をはじめて、おとなびた口調で言った。 「御不浄に起きたのと違うの?」竹さんは、またせっせと床板

えて差し出した。

「ありがとう。」平気なふうを装ってスリッパをはき、「僕は寝

浄へ行って来て、おやすみ。」

竹さんは自分のはいているスリッパを脱いで僕のほうにそろ

ように小声で言って、「さ、これ貸したげるさかいな、早く御不

「お淋しいやろなあ。」と竹さんは少しも笑わず、ひとりごとの

な関西訛りで言ってみた。

いてもらいながら竹さんの肩に手を置いて、

「竹さん、これからも、甘えさせてや。」とわざと竹さんみたい

「そうなんだけど。」

パンドラの匣 ね。僕はいままで、竹さんの気のよさを少し軽蔑していたが、

粋の玉が、さらに爽やかに透明なものになったような気がした。 姿のものであろうと思った。竹さんのおかげで、僕の胸底の純 眺めて、つくづく人生の厳粛を知らされた。健康とは、こんな

君、正直な人っていいものだね。単純な人って、尊いものだ

るのに。

出して来た自分の姿を、あさましく、恥かしく思った。毎日こ

えない。自分の心が濁っていたから、あんな幻影も見えたのだ

いやらしい空想に胸をおどらせて、はだしで廊下へ飛び

まさか、窓の外に女の顔が見えた、なんて馬鹿らしい事は言

んな真暗い頃に起きて余念なく黙々と拭き掃除している人もあ

壁によりかかって、なおもしばらく竹さんの働く姿を

あれは間違いだった。さすがに君は眼が高い。とても、マア坊

パンドラの匣

十月七日

のろけなんかじゃあ、ないんだよ。

夢は、

肌寒くて、いい気持。

マア坊の夢は悪い夢で、早く忘れてしまいたいが、竹さんの

もしこれが夢であったら、永遠に醒めずにいてくれると

周囲の空気が次第に冷く澄んで来る。

男児畢生危機一髪とやら。あたらしい男は、つねに危所に遊

んで、そうして身軽く、くぐり抜け、

、すり抜けて飛んで行く。 わるくないようだ。少し

こうして考えてみると、秋もまた、

情は、人を堕落させない。これは、たいしたものだ。僕もあん なんかとは較べものにも何も、なるもんじゃない。竹さんの愛

正しい愛情の人になるつもりだ。僕は一日一日高く飛ぶ。

ないようだ。矢鱈におびえて、もの笑いになるな、と場長からの 四、五百人来ているそうだが、まだこの辺には、いちども現われ では、アメリカの進駐軍もおどろいているだろう。E市にも、

拝啓。ひどい嵐だったね。野分というものなのかしら。これ

固パン

パンドラの匣 と機械をいじくり、やがて、キントトさんたちのバスがやって

待合所のちょうど前でとまり、運転台から子供のような若いア

が走って来て、そうしてどうやら故障を起したらしく、バスの で待っていたら、どしゃ降りの中を、アメリカの空のトラック

キントトさんは、まちで用事をすまして、帰りのバスを待合所

て、なかなか修理がすまぬ様子で、濡鼠の姿でいつまでも黙々

メリカ兵が二人飛び降り、雨に打たれながら修理にとりかかっ

どうしたの? と皆にたずねられて、キントトさんのしゃくり

皆と一緒に就寝してから、シクシク泣いた。どうしたの? 雨の中を用事でE市に行って来たそうだが、道場へ帰って

上げながら物語るのを聞けば、おおよそ次の如き事情であった

来たが、キントトさんは待合所から走り出て、バスに乗りかけ、

浮かぬ顔をしている。何か煩悶の様子に見受けられたが、果し それと、もうひとり、同室の固パンさんが、このごろひどく

首を振って、まだ胸がどきどきすると言っている。

あり、わけがわからんと言う者もあり、とにかくみんな大笑い

であった。キントトさんは、からかわれても、にこりともせず、

うのである。このニュウスはもうその翌朝、早くも道場全体に を頭からかぶってひとりでめそめそ泣き出すに到ったのだとい ずおそろしく、心配で心配でたまらなくなり、ついに夜、蒲団 が、道場へ帰り着き、次第に落ちついて来ると共に、何とも言え てバスの奥に駆け込んだとたんに発車。それだけの事であった アメリカの少年たちに与え、サンキュウという声を背後に聞い

ひろがり、無理もないと言う者もあり、けしからぬという者も

その時まるで夢中で、自分の風呂敷包の中の梨を一つずつその

パンドラの匣 パの修繕に一生懸命である。

は、自分のベッドの引出しから蝋燭を捜し出して、それに点火

ので、誰も眠られず、かっぽれは小声で歌をうたうし、越後獅子

して枕元に立て、ベッドの上に大あぐらをかいて自分のスリッ

な早寝という事になったのである。けれども、風の音がひどい みになって、夜の報道も聞かれなかったから、塾生たちは、みん そのために夜の摩擦も無かったし、また拡声機も停電のため休 たい振っているというのか、僕たちをてんで相手にせず、いつま

いったいこの固パンという人物は、秘密主義というのか、もっ

て彼にもまた一種奇妙な苦労があったのである。

でも他人行儀で、はなはだ気づまりな存在であったが、おとと

いの夜、あのような嵐で、七時少し過ぎた頃から停電になって、

「ひどい風ですね。」

は、おどろいているでしょう。」と言った。

来るのかも知れない、と僕は思った。

「ええ、」僕は上半身を起して彼を迎え、「進駐軍も、この嵐に

の夜には、蝋燭の貧しげな光でもなつかしく、吸い寄せられて

蛾が燈火を慕って飛んで来るように、人間もまた、こんな嵐

らしい事であった。

2

固パンが、他人のベッドのところへ遊びに来るなんて、実に珍

固パンが、妙に笑いながら私たちのほうへやって来た。

ぶっているらしく、いまにこの道場へアメリカの兵隊が来たら、 うもこの道場の人たちは、僕をよっぽど英語の達人だと買いか 君に直してもらいたいんです。読めばわかるだろうが、ど

僕の書いた英文なんです。きっと文法の間違いがあるだろうか

し、僕にだけ聞えるように急に声を低くして、「実はね、これは した。」にやにや笑いながら言って、僕のベッドの端に腰をおろ ん英語を覚えているものです。僕たちはもう、忘れてしまいま さい。」そうして、僕に一枚の便箋を手渡した。

便箋には英語が一ぱい書かれている。

「英語は僕、読めません。」と僕は顔を赤くして言った。

「読めますよ。君たちくらいの中学校から出たての年頃が一ば

「問題はその進駐軍なんです。とにかく君、これを読んでみて下

或いは僕を通訳としてひっぱり出すかも知れないんだ。その時常

パンドラの匣 語などがあったが、だいたい次のような意味の英文であった。 僕は便箋の英文を読んで見た。ところどころ僕の知らない単

んだ。

僕を軽蔑するか、わかりゃしない。どうも、こんなに弱った事

は無い。このごろ、それが心配で、夜もよく眠られぬくらいな

御賢察にまかせるよ。」と言って、また、うふふと笑った。

ごついているところを見られたら、あの助手たちが、どんなに

んだ。これで通訳なんかにひっぱり出されて、僕がへどもどま

うも僕は少し調子に乗って、助手たちに英語の披露をしすぎた

「冗談じゃない。とてもそんな通訳なんて出来やしないよ。ど

りませんか。」と僕は、便箋をぼんやり眺めながら言った。

「だって、あなたは本当に英語がよくお出来になるようじゃあ

まえ。」と言って、てれ隠しみたいにうふふと笑った。

の事を思うと、僕は心配で仕様がないんですよ。察してくれた

キシタタメテ欲シイ。シカシテ、一時間ノ忍耐ヲ示シテ欲シイ。 耐力トヲ保有シテイルナラバ、君ノ今日ノ用事ヲコノ紙片ニ書

ジテ、読ム事ト書ク事ガ出来ル。モシ、君ガ充分ノ親切心ト忍 我輩ハ英語ノ会話ニ於イテ、ホトンド不具者デアルガ、カロウ 君ハ非常ニ気品高キ紳士デアルコトヲ認メル。君ハ必ズコノア

ワレナ男ニ同情ヲ持ツデアロウコトヲ我輩ハ疑ワナイノデアル。

意セヨー アア、危イ! 君ニ伝染ノ可能性スコブル多大デア

ル。シカシナガラ、我輩ハ君ヲ深ク信ジル。神ノ御名ニ於イテ、

ルノデアル。ノミナラズ、カツマタ、我輩ハ肺病デアル。君、注

ソレラノ行為ハ、我輩ノ能力ノハルカ、カナタニ横タワッテイ

モ、言ウコトモ、ソノホカノコトモ、スベテ赤子ノ如キデアル。 ナ男デアル。ナゼナラバ、我輩ハ英語ニ於イテ、聞キトルコト

君、怒リ給ウコト勿レ。コノ失礼ヲ許シ給エ。我輩ハアワレ

パンドラの匣 り出される事をどんなに恐怖し、また、れいの見栄坊の気持か ら、もし万一ひっぱり出されても、何とかして恥をかかずにすま

ら可笑しくて仕様が無かった。固パン氏が、通訳として引っぱ

流石にちゃんと筋道がとおっている。けれども僕は、

読みなが

つくしのあの奇怪にして不可解な手紙に較べて、このほうは

書キシタタメルデアロウ。

シテ怒リ給ウナ。

3

我輩ハソノ期間ニ、我輩自身ヲ我輩ノ私室ニ密閉シ、君ノ文章

ヲ研究シ、シカシテ、我輩ノ答ヲ、我輩ノ能力ノ最大ヲ致シテ

君ノ健康ヲ熱烈ニ祈ル。我輩ノ貧弱ニシテ醜悪ナル文章ヲ決

もっともらしい顔つきになり、「通訳となると、やはり責任が

れでも、ほめられて悪い気はしないらしく、ちょっと得意げな、

「迷うほうのメイブンでしょう?」と、つまらぬ洒落を言い、そ

箋をひったくり、「どこか、ミステークがなかったですか?」

「ひやかしちゃいけません。」と固パンは苦笑して僕からその便

「いいえ、とてもわかり易い文章で、こんなのを名文というん

ものです。」と僕は、笑いを噛み殺して言った。

「まるでもうこれは、重大な外交文書みたいですね。堂々たる

充分に、推察できるのである。

して、さまざま工夫をこらしている様が、その英文に依っても、 して、助手さんたちの期待を裏切らぬようにしたいと苦心惨憺

じゃないでしょうか。」

ね、重くなりますから、僕は、それはごめんこうむって筆談に

パンドラの匣 か、こんどはフランスの方面の知識を披露する。「リベルタンっ かっぽれは如何なる理由からか、ひどく声をひそめて尋ねる。 「フランスでは、」と固パンは英語のほうでこりたからであろう

中心にして集り、久し振りで打解けた話を交した。

「自由主義者ってのは、あれは、いったい何ですかね?」と、

うか、その夜は私たち同室の者四人が、越後獅子の蝋燭の火を

嵐のせいであろうか、或いは、貧しいともしびのせいであろ 人に依っていろいろな心配もあるものだと僕は感心した。 わざとらしい小さい溜息を吐いた。

なっちゃいましたよ。」と、いやにシンミリした口調で言って、 れないんです。いまさら逃げかくれも出来ず、やっかいな事に かしすぎたので、或いは、通訳として引っぱり出されるかも知 しようと思っているんですよ。どうも僕は英語の知識をひけら

パンドラの匣 でしょう。日本の江戸時代の男伊達とかいうものに、ちょっと フランスの詩人なんてのも、たいていもうそんなものだったの

生活をしていたのです。芝居なんかで有名な、あの、鼻の大き

「ええ、まあ、そんなものです。たいていは、無頼漢みたいな

いシラノ、ね、あの人なんかも当時のリベルタンのひとりだと

言えるでしょう。時の権力に反抗して、弱きを助ける。当時の

顔で言う。

ほど前の事ですがね。」と、眉をはね上げてもったいぶる。「こ

いつらは主として宗教の自由を叫んで、あばれていたらしいで

「なんだ、あばれんぼうか。」とかっぽれは案外だというような

れ廻ったものです。十七世紀と言いますから、いまから三百年

てやつがあって、これがまあ自由思想を謳歌してずいぶんあば

パンドラの匣 いていそんなものだったのです。花川戸の助六も鼠小僧次郎吉が、フランスの十七世紀の頃のリベルタンってやつは、まあたが、フランスの十七世紀の頃のリベルタンってやつは、まあた も、或いはそうだったのかも知れませんね。」

「へええ、そんなわけの事になりますかねえ。」とかっぽれは、

まの自由主義者というのは、タイプが少し違っているようです

「そりゃ、そう言ってもかまわないと思います。もっとも、い

固パンはにこりともせず、

似ているところがあったようです。」

の長兵衛なんかも自由主義者だったわけですかねえ。」

「なんて事だい、」とかっぽれは噴き出して、「それじゃあ、幡随院

パンドラの匣 抵抗があってはじめて鳩が飛び上る事が出来るのです。 上る事が出来なかった。つまりこの鳩が自由思想です。 いを聞き容れてやった。然るに鳩は、いくらはばたいても飛び

闘争の 空気の 時、どうも空気というものが邪魔になって早く前方に進行でき る例ですけれども、鳩が或る日、神様にお願いした、『私が飛ぶ

ない、どうか空気というものを無くして欲しい』神様はその願

芽生える思想ではなくて、圧制や束縛のリアクションとしてそ

圧制や束縛が取りのぞかれたところにはじめて

めに、「その本来の姿は、反抗精神です。破壊思想といっていい

「いったいこの自由思想というのは、」と固パンはいよい

よまじ

越後獅子も、スリッパの破れを縫いながら、にやりと笑う。

れらと同時に発生し闘争すべき性質の思想です。よく挙げられ

かも知れない。

大喜びである。

パンドラの匣 ろう。真理を追及して闘った天才たちは、ことごとく自由思想

後は、一座の長老らしく落ちつき払った態度で言い、「自由思

い人みんなに選挙権も被選挙権も与えられるそうだから。」と越

「しかし、多少は知っていなくちゃいけないね。これから、若

想の内容は、その時、その時で全く違うものだと言っていいだ

本の政治界の事はちっとも知らないのです。」

ではありません。これは、カントの例証です。僕は、現代の日

「あ、」と固パンは頭のうしろを掻き、「そんな意味で言ったの

パを縫う手を休めて言った。

対象の無い自由思想は、まるでそれこそ真空管の中ではばたい

ている鳩のようなもので、全く飛翔が出来ません。」

「似たような名前の男がいるじゃないか。」と越後獅子はスリッ

家だと言える。わしなんかは、自由思想の本家本元は、キリス

ずに、ただやたらに西洋文明の表面だけを勉強したところに、 別に、クリスチャンではないが、しかし日本が聖書の研究もせ するのだ。日本人は、西洋の哲学、科学を研究するよりさきに、 まず聖書一巻の研究をしなければならぬ筈だったのだ。わしは

すべて仮説だ。肉眼で見とどける事の出来ない仮説から出発し 学の基礎をなすものは、物理界に於いても、化学界に於いても、

ている。この仮説を信仰するところから、すべての科学が発生

疑し、人さまざまの諸説があっても結局、聖書一巻にむすびつ 或いはそれを敷衍し、或いはそれを卑近にし、或いはそれを懐

いていると思う。科学でさえ、それと無関係ではないのだ。科

刈らず、蔵に収めず、なんてのは素晴らしい自由思想じゃない

。わしは西洋の思想は、すべてキリストの精神を基底にして、

トだとさえ考えている。思い煩うな、空飛ぶ鳥を見よ、播かず、

まごろは国家のためにも相当重要な仕事が出来る人なのかも知

実際、かなりの人物なのかも知れない。からださえ丈夫なら、い た。どこやら崇高な、隠者とでもいうような趣きさえあった。 にこんなのがある。」と越後獅子は、その夜は、ばかに雄弁だっ

「それからまた、自由思想の内容は、時々刻々に変るという例

案深げな顔をして、無言で首を振ったり何かしている。

それから、みんな、しばらく、黙っていた。かっぽれまで、思

日本の大敗北の真因があったと思う。自由思想でも何でも、キ

リストの精神を知らなくては、半分も理解できない。」

5

れないと僕はひそかに考えた。「むかし支那に、ひとりの自由思

パンドラの匣

ころを言っているのではないかと思う。支那に於いて、君子と

どは迷夢に過ぎないという意味だ。日本の明治以来の自由思想 びていたという話がある。十年一日の如き、不変の政治思想な

も、はじめは幕府に反抗し、それから藩閥を糾弾し、次に官僚を

腐な便乗思想だけのものでしか無かった。彼は最後に名刀を抜

いて民衆に自身の意気を示さんとした。かなしい哉、すでに錆

山から降りて、人々に彼の自由思想を説いたが、それはもう陳 て山に隠れていた。十年経って、世の中が変った。時来れりと だとは気がつかなかった。彼には一ふりの名刀がある。

この名刀でもって政敵を刺さん、とかなりの自信さえ持つ

想家があって、時の政権に反対して憤然、山奥へ隠れた。時わ

れに利あらずというわけだ。そうして彼は、それを自身の敗北

攻撃している。君子は豹変するという孔子の言葉も、こんなと

パンドラの匣

したって、それはもう自由思想ではない。便乗思想である。真 でなければならぬ。日本に於いて今さら昨日の軍閥官僚を攻撃 ゆるされない。その主張は、日々にあらたに、また日にあらた はまた、自由思想家の嘆きといっていいだろう。一日も安住を あり、鳥には巣あり、されど人の子には枕するところ無し、と 言っている。実に、自由思想家の大先輩ではないか。狐には穴

いっさい誓うな、と言っている。明日の事を思うな、とも 美しい変化を示すのだ。醜い裏切りとは違う。キリスト 才的な手腕家といってもいいだろう。これが、やはり豹変する

いうのと違って、穴芸に通じた天才を意味しているらしい。天 いうのは、日本に於ける酒も煙草もやらぬ堅人などを指さして

パンドラの匣 夜で、すっかり固パンを好きになってしまった。男って、いい 前に立って、天皇陛下万歳! 固パンは眼鏡をはずした。泣いているのだ。僕はこの嵐の一 を叫びたい。」

正坐し、「天皇陛下万歳! この叫びだ。昨日までは古かった。

「わかっているじゃないか。」と言って、越後獅子はきちんと

あわてふためいて質問した。

「な、なんですか?」何を叫んだらいいのです。」かっぽれは、

神秘主義ではない。人間の本然の愛だ。今日の真の自由思想家

と、今日の自由とその内容が違うとはこの事だ。それはもはや、 しかし、今日に於いては最も新しい自由思想だ。十年前の自由

は、この叫びのもとに死すべきだ。アメリカは自由の国だと聞

いない。わしがいま病気で無かったらなあ、いまこそ二重橋の いている。必ずや、日本のこの自由の叫びを認めてくれるに違

大政治家で、

ている。

パンドラの匣

君の御意見に依れば、

の手紙が、

たいへん君の御気に召したようで、うれしいと思っ

越後獅子こそ、当代まれに見る

或いは有名な偉い先生なのかも知れないという事

御

返事をありがとう。先日の

「嵐の夜の会談」に就いての僕

1

りゃしない。

以上、

嵐の燈火と題する道場便り。

失敬。

十月十四日

口紅

ものだねえ。マア坊だの、竹さんだの、てんで問題にも何もな

きます、仄聞するに、アメリカ進駐軍も、口紅毒々しき婦人を

パンドラの匣

れたるは慶賀に堪えざるも、このごろの当道場に於ける助手た のような回覧板が発行せられた。曰く、婦人に参政権を与えら が起った。きょうのお昼すぎ、お隣りの「白鳥の間」から、次 き去りにされるのは明かだ。総選挙も近く行われるらしいが、

へんな演説ばかりしていると、民衆はいよいよ代議士というも

のを馬鹿にするだけの結果になるだろう。

選挙と言えば、きょうこの道場に於いて、とても珍妙な事件

時代である。指導者たちは、ただ泡を食って右往左往している

いつまでもこんな具合では、いまに民衆たちから置

えって、このような巷間無名の民衆たちが、正論を吐いている

であるが、しかし、僕にはそのようには思われない。いまはか

ばかりだ。

ちの厚化粧は見るに忍びざるものあり、かくては、参政権も泣

パンドラの匣 まあ、春風駘蕩の部屋である。こんどの回覧板も、これは

手さんたちに人気のある固パンさんなどは、その「白鳥の間」に

お隣りの「白鳥の間」には、前から硬骨漢がそろっていて、助

な按配でもあったのだ。「桜の間」は、越後獅子の人徳のおかげ

いたたまらなくなって、こちらの「桜の間」に逃げて来たよう

ろしく当道場より追放すべし。」と書添えられていた。

われらしばしば忠告を試みたるも、更に反省の色なし。

以てプロステチュウトと誤断すという、まさに、さもあるべし、

これはひとり当道場の不名誉たるのみならず、ひいては日本婦

ぎる助手さんの綽名が洩れなく列記されてあり、「右六名のう 人全体の恥辱なり云々とあって、それから、お化粧の目立ちす

孔雀の扮装は最も醜怪なり。馬肉をくらいたる孫悟空の如気が、

ひどい、とまず、かっぽれが不承知を称えた。固パンも、にや

パンドラの匣 は思ってないんでしょう? ただ、あの人たちの心意気のほど 「でも、お隣りの人たちだって、まさか、本当に追放しようと

意をうながした。

どうです。私の論は間違ってはいないと思うんだ。」と僕にも同 んなケチなものである筈のわけが無いんだ。そちらの若先生は

「ね、そういうわけのものでしょう? 自由思想ってのは、そ

を求めた。「人間は、一視同仁ですからね、追放しなくたってい

「ひどいじゃありませんか。」とかっぽれは、越後獅子にも賛意

いと思いますがね。人間の本然の愛というものは、どんな場合

りと笑って、かっぽれを支持した。

にだって忘れられるわけのものじゃないんだ。」

越後獅子は黙って幽かに首肯いた。

かっぽれは、それに勢いを得て、

パンドラの匣 けのものなんだ。おれの事を、パイパンと言っていやがるんで 「世に大勇と小勇あり、ですからね、あいつらは、小勇というわ

そうして、それから、れいの一ばんいいところを言い出し、

のに違いない。」と喝破した。

ねえもんだから、こんな時に、仕返しを仕様とたくらんでいる わけのものではないと思うんだ。あいつらは、ふだん女にもて 言ったら、

を皆に示そうとしているんじゃないのかな。」と僕が笑いながら

だい、婦人参政権と口紅との間には、致命的な矛盾があるべき

「いや、そんなんじゃない。」とかっぽれは言下に否定して、「ど

「ひばりに、ですか?」かっぽれは大いに不満の様子である。

言った。「あんたが行っちゃいけない。ここは、そちらの先生に

「待った、待った。」越後獅子はタオルで鼻の頭を拭きながら

る。

黙って居られねえ。」あらぬ事で激昂して、ベッドから降りて帯

て、おれはあんまり好きじゃねえのだが、パイパンと言われちゃ、

す。かねがね癪にさわっていたんだ。かっぽれという綽名だっ

思想は江戸時代からあるんだ。人間、智仁勇が忘れられないと をしめ直し、「おれは、この回覧板をたたきかえして来る。自由

はこれを叩きかえして来るつもりですからね。」顔色が変ってい はここのところだ。じゃ皆さん、私にまかせてくれますね。私

「失礼ながら、ひばりには荷が重すぎますぜ。お隣りの奴らと

でもまかせなさい。」

パンドラの匣 あった。僕がはいって行ったら、八人の塾生がみんなどやどやあった。僕がはいって行ったら、八人の塾生がみんなどやどや

と寄って来て、

部屋を出た。

れの前を通り抜け、同時に、かっぽれから回覧板を取り上げて、

「白鳥の間」では、「桜の間」の返事を待ちかねていた様子で

「僕が行って来ます。」僕はベッドから降りて、するりとかっぽ

には、

わけのものじゃないんだ。自由と束縛、というわけのものなん ねえのです。パイパンと言われて、黙って引っこんで居られる

自由と束縛、君子豹変ということにもなるんだ。あいつら

「前々からの行きがかりもあるんだ。今にはじまった事じゃ

だ。ひばりには、無理ですぜ。」

おれの腕の立つところを見せてやらなくちゃいけねえの キリストの精神がまるでわかってやしねえ。場合に依っ

パンドラの匣 「桜の間は緊張が足りないぞ。 「ひばりは、妥協の使者か。」

いまは日本が大事な時だぞ。」

「出しゃばるな、出しゃばるな。」

一時、ひっそりしたが、すぐにまた騒ぎ出した。

気な、いたずらっ児のように見えた。

「僕にやらせてくれませんか。」と僕は誰よりも大きい声を出し

んな孫悟空に、選挙権なんかもったいない。」

などと、口々に言って、ひどくはしゃいでいる。みんな無邪

「塾生みんな結束して、場長に孔雀の追放を要求するんだ。

あ

「まさか、

「裏切りやしないだろうな。」

「どうだい、痛快な提案だろう?」

「桜の間の色男たちは弱ったろう。」

てそう言った。

パンドラの匣 将という眼つきの凄い三十男が僕に尋ねた。 「君は、僕たちの提案に反対なのか。」と、しばらくして、青大 「大賛成です。それに就いて僕に、とっても面白い計画がある

知らせしますから、もしその僕の処置がみなさんの気に入らな

「今晩、就寝の時間までに、」と僕は、背伸びして叫んだ。「お

れを流しているんじゃねえか。」

「四等国に落ちたのも知らないで、べっぴんの顔を拝んでよだ

「なんだい、出し抜けに、何をやらせてくれと言うんだい。」

かったら、その時には、みなさんの提案にしたがいます。」

又ひっそりとなった。

3

パンドラの匣 としきりに口惜しがっていた。 子豹変のわけでも、どんと一発言ってやればよかったんだ。自 あんな事じゃ、なんにもならんじゃねえか。キリスト精神と君 致します。」僕は素早く部屋を出た。これでいいのだ。むずかし のだ。自由思想は空気と鳩だ、となぜ言ってやらねえのかな。」 ねえのだから、すじみちの立った事を言ってやるのが一ばんな 由と束縛! と言ってやってもいいんだ。やつら、道理を知ら い事は無いんだ。あとは竹さんにたのめばいい。 「だめだなあ、ひばりは。おれは、廊下へ出て聞いていたんだ。 「よろしいですね。ありがとう。この回覧板は、晩までお借り 部屋へ帰って来たら、かっぽれは、

んです。それを、やらせて下さい。お願いします。」

みんな少し、気抜けがしたようだった。

パンドラの匣 前の廊下を通って、ちょっと僕の方を見たので、僕はすかさず すぐに部屋へはいって来た。 右手で小さく、おいでおいでをした。竹さんは軽く首肯いて、

していたのである。二時の屈伸鍛錬のときに、竹さんが部屋の んに見せると、竹さんは、いいようにしてくれるだろうと楽観 た様子である。

僕には別に、

計画なんか無いんだ。ただ、この回覧板を竹さ

たので、かっぽれもそれ以上は言わずに、しぶしぶ寝てしまっ 「まかせろ、まかせろ。」と越後が寝たまま威厳のある声で言っ 分のベッドに寝ころがった。

さすがに少し疲れたのである。

「晩まで僕に、まかせて置いて下さい。」とだけ言って僕は、自

「何か御用?」と真面目に尋ねる。

パンドラの匣 「源さん、御苦労さまやなあ。」と少しも飾らぬ自然の口調で呟った。

しばらくして、窓の外に向い、

いた。窓の下で、小使いの源さんという老人が、二、三日前か

る。

窓のほうに行って、黙って窓の外の景色を眺めている様子であ

竹さんは何もかも心得顔に、幽かに首肯き、それから枕元の

「あやまちを改むるに、 はばかる事なかれだ。 早いほうがいい。」

「これ、貸してや。」と落ちついた口調で言ってその回覧板を

小脇にはさんだ。

てから、

「枕元、枕元。」と小声で言った。

僕は脚の運動をしながら、

竹さんは枕元の回覧板を見て、手に取り上げ、ざっと黙読し

パンドラの匣 だろうと、僕はさらに大いに安心した。 ら、この厚化粧の一件も、きっとあざやかに軽く解決せられる んは、よっぽど偉い人だったのに違いない。竹さんにまかせた

のを感じさせた。いつか越後も言っていたが、竹さんのお母さ んびりしたゆとりのある調子なのである。非常に育ちのいいも 庭番のじいやに、縁先から声をかけるみたいな、いかにも、の

のいたわりの声の響きの気品に打たれた。御大家のお内儀が、

らしい落ちついた晴朗の態度にも感心したが、それよりも、あ ど、感心していた。回覧板の事など、ちっとも気にしていない たのに、またこのように生えて来る。」

僕は、竹さんの「御苦労さまやなあ」という声の響きに唸るほ

「お盆すぎにな、」と源さんは窓の下で答える。「いちどむしっ

ら草むしりをはじめているのだ。

パンドラの匣 今晩七時半の摩擦の時には、アメリカの人たちにへんな誤解を 「きょうの夕食後に、それぞれお化粧を洗い落し、おそくとも

時放送は、さらに続いて、

さんのお化粧に就いて、ただいま助手さんたちから自発的に今

いう事務員の声が聞えて、「かねて問題になって居りました助手 「そのまま、そのままの位置で、気楽にお聞きねがいます。」と

日限りこれを改める由を申し出てまいりました。」

わあっ、という歓声が隣りの「白鳥の間」から聞えて来た。

れた。

四時の自然の時間に、突如、廊下の拡声機から、

そうして僕のその信頼は、

僕の予期以上に素晴らしく報いら

ふつつかにて、残念な事をいたしました。深くおわび申し上げ

所がらも、わきまえませず、また、最年長者でもありますのに、

「私こと、」こおろぎの鳴くような細い可憐な声だ。「時節も場

みんなにやにや笑っている。

お隣りの部屋から、どっと笑声が起った。僕たちの部屋でも、

ます。今後も、何とぞ、よろしくお導き下さいまし。」

らいをして、

「私こと、」と言った。

を汲んでやって下さい。」

諸君におわび申し上げたいそうで、どうか牧田さんのこの純情 うでございます。なお、次に、助手の牧田さんが、一言、塾生 されない程度の簡素なよそおいで、塾生諸君にお目にかかるそ

牧田さんというのは、れいの孔雀だ。孔雀は、小さいせきば

パンドラの匣 と」という綽名をつけるのは、いかになんでも残酷すぎるとい 名すべし。」 かっぽれは、その綽名の提案にすぐ反対を表明した。「私こ

は、これだけです。」

「白鳥の間」から、すぐ回覧板が来た。

「一同満足せり。ひばりの労を多とす。孔雀は、私こと、と改

正していただきたい、との事でございます。きょうの臨時放送

からのお願いでありますが、牧田さんの従来の綽名は、

即刻改

「最後に、」と事務の人が引きとり、「これは助手さんたち一同

で見た。僕は、少しつらかった。

「可哀そうに。」とかっぽれは、しんみり言って僕のほうを横眼

「よし、よし。」という声が隣りの部屋から聞こえた。

うのである。

と僕が書き込んで、かっぽれに持たせてやった。「白鳥の間」に

回覧板に、「私こと」は酷に過ぎたり、「雀」など穏当ならん、

雀も、すこし理に落ちて面白くないが、まあ長老の意見だし、

雀とでもするさ。」越後はそう言って、うふふと笑った。

「孔雀が簡素になったんだから、孔雀の上の字を一つ省略して

このほうが、かえって辛辣で残酷だ。なんにもならない。

穴二つというわけのものになるんだ。おれは絶対反対だ。孔雀 がおしろいを落して黒い地肌を見せるってわけのものだから、

これは、カラスとでも改めたらいいんだ。」

というわけのものなんだ。一視同仁じゃねえか。人をのろわば を汲み取ってくれって言われたじゃねえか。空飛ぶ鳥を見よ、

「むごいじゃねえか。あれでも一生懸命で言ったんだぜ。純情

- ほうぼうの部屋から綽名の提案が殺到していたそうである

を見るに、髪の形などちょっと変わったようにも見えるが、し いたのであるが、その夜、僕たちの部屋へやって来た時の様子

さんが、それぞれ金盥をかかえて「桜の間」にやって来た。竹

七時の摩擦の時には、キントトと、マア坊と、カクランと、竹

だった。「私こと」以外の綽名は、色あせて感ぜられる。

い出したところは、なんとも、よろしくて、忘れられないもの

が、結局、「私こと」に落ちつくかも知れない。どうも、あの時 の孔雀の、小さいせきばらいを一つして、さて、「私こと」と言

さんは、澄まして、まっすぐに僕のところに来た。キントトと、

マア坊は、このたびのお化粧の注意人物として数え挙げられて

パンドラの匣

ですなあ、ってな、あの笑わない場長さんが、にやにやっと笑

さかいな、ひばりの発明や、とうちが申し上げたら、愉快な子

きょうの事務所からの放送を、場長さんもお聞きになって、い

「まえに、場長さんからも、幾度となく御注意があったんや。

い御機嫌やった。きょうの放送は誰の発案かね、とおっしゃる

どに改めろ言うても、それぁ無理。若いのやさかい。」

「竹さんの働きは、大したものだね。」

「あれでも、ずいぶん、拭いたり洗ったりして大騒ぎや。いち

で竹さんに言ったら、竹さんは、シャッシャッと摩擦をはじめ

「マア坊は、まだ口紅をつけてるようじゃないか。」と僕は小声

かしまだ何だかお化粧をしているようだ。

い居った。」竹さんも、きょうの口紅事件では、さすがに少し興

パンドラの匣 うちだって、少しは口紅さしてんのやけど、わからんやろ?」 で来たのや。悪気の無い、いいひとや。お化粧が下手らしいな。 「なあんだ、同罪か。」

やしないけどな、うちは、つらかった。」

「ううん。」れいの特徴のある涼しい笑顔で首を振り、「憎まれ

「孔雀の挨拶は、ちょっと僕も、つらかったよ。」

「うん。牧田さんな、あのひと自分から挨拶させてと申し込ん

ばならぬ。

はない。すき好んで憎まれ役を買うひとなんてあるかいな。」

「憎まれたのかね。」

「同じ事や。ひばりが言わなかったら、うちだって、動きとう

奮したのか、いつになくおしゃべりだ。

「僕の発明じゃあないよ。」軍功の帰趨は分明にして置かなけれ

パンドラの匣 ない筈である。親愛の気持だけだろうと思う。ここに、僕たち も、もう竹さんに対しては、色気なんてそんなものは持ってい

方になってしまって、われながら閉口だが、とにかく、色気無

しに親愛の情を抱かせる若い女は少いものではあるまいか。君

ま世界に誇り得る唯一の宝だ。なんていうと少し大袈裟なほめ 僕のものでもなければ、君のものでもない。これは、日本のい める。ここには、尊敬するに足る女性がひとりいる。これは、

どうだい、君。僕は、あらためて君に、当道場の訪問をすす

来ない。

て、竹さんを、可愛らしいと思った。大鯛だって、ばかには出て、竹さんを、可愛らしいと思った。大鯛だって、ばかには出

女だなあ、と思った。そうして僕は、この道場へ来てはじめ

シャッと摩擦をつづける。

「わからんくらいなら、いいのや。」と平気な顔して、シャッ

1

たら、

若き詩人よ、

、すべからく当道場を御訪問あれ。

もっとも君は、

既に、

君の周囲に於いて、さらにすぐれた清

得るところの天与の美果である。 僕たちにでなければわからない。 新しい男の勝利がある。

男女の間の、

所謂あたらしい男だけが味い この清潔の醍醐味が欲しかっ

信頼と親愛だけの交友は、

潔の美果を味っているかも知れないが。

十月二十日

花宵先生

パンドラの匣 もらったり、また、ものを贈ったりするのに、いささか、こだ

持って来てくれたので、ほっとしました。君には、僕よりもっ ちょっと気になっていたところへ、君が気をきかせてお土産を に何かお返しをしなければならぬのではあるまいかと、内心、

の藤娘をもらって、少し閉口だったけれども、でも、そのうちょらなす。

あの人たちから僕は、シガレットケースと、それから竹細工

と新しい一面があるようだ。僕はどうも、女のひとからものを

ずつのお土産。いかにも詩人らしい、親切な思いつきで、殊に

竹さんとマア坊にお土産を持って来てくれたのは有難かっ

た僕には花束。竹さんとマア坊には赤い小さな英語の辞典一冊

昨日の御訪問、なんとも嬉しく存じました。その折には、ま

わりを感ずる。いやらしいと思うのだ。ここが、少し僕の古い

パンドラの匣 うつらうつらして、ふと病床の枕元を見ると、中学校の主任のまでのようである。 木村先生とお母さんが笑いながら何か話合っている。あの時に

伽噺のような気がした。これと似たような気持を、僕は去年のと意味

にこにこ笑って並んで歩いて来たのを見て、仰天したのだ。お

が、それよりも、君とマア坊が、まるで旧知の間柄のように、

てくれるだろうか。久しぶりに君の顔を見た喜びも大きかった た時には、僕の胸が、内出血するほど、どきんとした。わかっ たような気がした。君の爽やかな美徳を見たと思いました。

マア坊が「お客様ですよ」と言って、君を部屋へ案内して来

できるように修行しよう。僕は君からまた一つものを教えられ ところかも知れないね。君のように、てれずに、あっさり贈答

春にも、一度味わった。

去年の春、中学校を卒業と同時に肺炎を起し、高熱のために

パンドラの匣 「マア坊を前から知ってるの?」と下手な質問さえ飛び出して、 「君の手紙で知ってるじゃないか。」

本当に夢のようだったよ。何がなんだか、わからなくなって、

と頼んで、マア坊は首肯いて花瓶を取りに行って、僕は、まあ、

「粗末な花瓶で結構ですから、ひばりに貸してやって下さい。」

自然の態度で、

花束を手渡して、僕がまごついていたら君は、マア坊に極めて

「すっかり元気そうになったじゃないか。」と君が言って、僕に

士を見つけたみたいな、ひどく混乱したお伽噺のような幸福感

で胸が躍った。

世界にわかれて住んでいるお二人が、僕の枕元で、お互い旧知

僕は胆をつぶした。学校と家庭と、まるっきり違った遠い

の間柄みたいに話合っているのが実に不思議で、十和田湖で富

2

「そうかしら。」

「でも、わるくない。骨の細い感じだね。」

ない。ほんの子供じゃないか。」

「そうかしら。」

「しつこいな。まだ気があるんだね。予想してたほど、下品じゃ

「たとえば?」

「ひとめ見てわかった。予想より、ずっと感じがいい。」

「マア坊だって事、すぐにわかった?」

と二人で大笑いしたっけね。

「そうか。」

僕は、いい気持だった。

パンドラの匣 はお昼休みだから、かまわないんだ。」 の他のひとは、てんで問題じゃないんだから仕様が無い。 「お天気がいいから二階のバルコニイへ行って、話そう。

嚀なお辞儀なんかするひとじゃないんだ。でも君には、竹さん

し気を悪くした証拠だぜ。マア坊は、あんな、よそよそしい叮 て、すたすた部屋を出て行ったが、あれはやっぱりマア坊が少 ア坊はそんなに嬉しそうな顔もせず、黙って叮嚀にお辞儀をし トから、

後で、竹さんにでも挿し直していただくんだな。」

と言ったが、あれは少し、まずかったぜ。君がすぐにポケッ

れいの小さい辞典を取り出してマア坊にあげても、マ

「ありがとう。」と君は受取り、無雑作に花を挿して、「これは

マア坊が細長い白い花瓶を持って来た。

パンドラの匣 は、 られるものなのかも知れないね。バルコニイに出てからも、君 日本の初歩教育からして駄目なんだと怒り、

柄でも、久し振りで逢った時には、あんな具合に互いに高邁の柄でも、久し振りで逢った時には、あんな具合に互いに高邁の

本再建の微衷を吐露し合ったが、男の子って、どんな親しい間

事を述べ合って、自分の進歩を相手にみとめさせたい焦躁にか

事柄も何もない筈なのに、それでも互いに興奮して、所謂新日

こへでも飛んで行く覚悟はちゃんと出来ていて、もう論じ合う おあずけしてあるのだし、僕たちは御言いつけのままに軽くど は、どういうわけなんだろう。尊いお方に僕たちの命はすでに て来たんだ。それに、きょうは日曜だから、慰安放送もあるし。」 「君の手紙でみんな知ってるよ。そのお昼休みの時間をねらっ

笑いながら部屋を出て、階段を上って、そのころから僕たち 急に固くなって、やたらに天下国家を論じ合ったのは、あれ

だったぜ。 なんだか、同じ様な事ばかり繰り返し繰り返し言っていたよう そうして、そのうちに僕たちのその下手な議論もだんだん途

ないんだ。おとなの駈引きは、もうたくさんだ。」

「そうとも、そうとも。功利性のごまかしで、うまく行く筈は

「そうだ。報酬ばかり考えているような人間では駄目だ。」

「全くさ。表面のハッタリなんて古いよ。見え透いてるじゃな

君も、僕と同じくらいに議論は下手のようである。僕たちは、

一生涯がきまってしまうのだからね。もっと偉い大人物を配す

「小さい時にどんな教育を受けたかという事でもう、その人の

べきだと思うんだ。」

切れがちになって来て、「単なる」とか「要するに」とか「とに

パンドラの匣 せ、という間の抜けた言葉しか出ないものなんだ。僕にも経験

「よせ、よせ。」と君は言った。実際、あんな時には、よせ、よ

「竹さんを、とても好きだと言ってる人が、いまここに来てい

あてて、バルコニイを見上げ、

「何や?」と言って笑ったが、

あの時の竹さんの姿態は悪くな

たね。あれは、どういう意味なんだい? 竹さんは右手を額に

「竹さん!」と呼んだ。君は同時にズボンのバンドをしめ上げ

が現われた。僕は思わず、

れてしまって、その時、下の玄関の前の芝生にひょいと竹さん かく」とか「結局」とかいう言葉ばかりたくさん飛び出て、だ

がある。

るんだ。」

かったじゃないか。

「予想と違ったかね。」

じゃないか。」

んだから、僕は安心してほめてたんだが、なあんだ、スゴチン た、ただ大きくて堂々とした立派なひとだと手紙に書いてたも がら言ったら君は、顔を真赤にして、ぴょこんとお辞儀をした

上も横に傾けて、君に向って、「いらっしゃいまし。」と笑いな

「いやらし!」と竹さんが言ったね。それから首を四十五度以

3

ね。それから君は不平そうに小声で、

「なんだ、すごい美人じゃないか。馬鹿にしてやがる。君はま

パンドラの匣

たんです。僕からじゃありませんよ。」と君が、颯っと赤い表紙 かなものだった。僕は、ひそかに君に敬服した。竹さんは、君 の可愛い辞典を投げてやったところなんかは、やっぱりあざや

「失礼ですけど、ほうりますよ。これは、ひばりから、たのまれ

「竹さん!」と僕が大声で言って呼びとめたら、

した。

産があるんだ。」とポケットをさぐり、れいの小型辞典を取り出

「ちょっと、君、ちょっと竹さんを呼びとめてくれ給え。お土

どと早口で言っているうちに竹さんは、軽く会釈して旧館のほ

黒くないじゃないか。あんな美人は、僕はいやだ。危険だ。」な

しているとでも形容しなくちゃいけない。色だって、そんなに みたいなひとかと思っていたら、なあんだ、あれは、すらりと

うに行ってしまいそうになったので、君はあわてて、

パンドラの匣 か? で言って、「君には美人、不美人の区別がわからんのじゃない 「君は、とんちんかんだからねえ。」と僕をあわれむような口調 僕は、むっとした。君こそ、なんにも、わからないくせに。竹

夫なひとだよ。僕は、もう試験ずみだ。」

「危険なもんか。真暗い部屋にたった二人きりでいたって大丈

「危険だ、あれは危険だ。」とひどく真面目に呟くので、僕は

可笑しかった。

だ。

たって、竹さんは、君からの贈り物だという事を知っているの

旧館のほうに歩いて行く竹さんのうしろ姿を眺めながら、

「おおきに。」と、君に向って、お礼を言ったね。君が何と言っ

の清潔な贈り物を上手に胸に受けとめて、

君は溜息をついて、

生真面目な人なんだ。 竹さんは美人じゃないよ。危険な事なんか無いんだ。危険だな んて、可笑しいじゃないか。竹さんは、君と同じくらい、ただ

るようだ。よろしくないね。本当に、君、僕を信じてくれ給え。 たちはむきになってしまって、ちょっと気まずくなる傾向があ たから、僕は黙っていたのだ。どうも、竹さんの事になると、僕 時、女の顔の事などで議論するのは、下品な事のように思われ きびしい審美眼を具有しているつもりだがね。けれども、あの さんが君に、そんなに美しく見えたとしたら、それは、竹さん

はるかに綺麗だ。竹さんの品性の光が、竹さんを美しく見せて ると、竹さんなんか、ちっとも美人じゃない。マア坊のほうが、 の心の美しさが、君の素直な心に反映したのだ。冷静に観察す

いるだけの話だ。女の容貌に就いては、僕のほうが君より数等

パンドラの匣 からあの人の顔は写真で見てよく知っているんだ。僕もあの人 だ。僕の兄貴たちは皆あの人のファンで、それで僕も小さい時 の詩のファンだった。君だって、名前くらいは知っているだろ 「どうも、そうらしい。さっき、ちらと見て、はっと思ったん 「まさか。」僕は夢見るようであった。

「そりゃ、知っている。」

う事を言い出したので、竹さんの事も何も吹っ飛んでしまった。

と君が、お隣りの越後獅子は大月花宵という有名な詩人だとい

僕たちは、しばらく黙ってバルコニイに立っていたが、ふい

パンドラの匣 僕たちは階下の「桜の間」に帰った。越後は寝ていた。僕には、 事になり、そろそろ日曜慰安放送の時間もせまって来ていたし、 とにかくそれでは、もっと、こまかに観察してみようという

「さっき、ちらと見ただけなんだから。」

「いや、はっきりした事はわからんよ。」と君は少しうろたえて、

「あのひとが、ねえ。」しばらくは、感無量であった。

後に落ちないつもりだ。

り、天才の詩人というものを尊敬する事に於いては、敢えて人 詩というものがちっともわからぬけれども、君も御存じのとお 並べて寝ていたとは、にわかに信じられぬ事であった。僕には

月花宵の姫百合の詩や、鴎の詩は、いまでも暗誦できるくらい によく知っている。その詩の作者と僕は、この数箇月ベッドを

僕は、どうも詩というものは苦手だけれども、それでも、大

パンドラの匣

せられたりなどして、大はやりのものであった。僕たちは、ひ この歌は、花宵先生の傑作として、少年雑誌に挿画入りで紹介 てくれたが、そう言われて僕も思い出した。僕が子供の頃に、 だ黙ってレコオドの放送を聞いていたっけ。番組が進んで、い 僕たちは、話も何もろくに出来ず、窓を背にして立ったまま、た き、二人一緒に思わず深い溜息をついたっけね。緊張のあまり、 れる獅子のように見えた。僕たちは顔を見合せ、ひそかに首肯 あの時ほど越後が立派に見えた事は無い。それこそ、まさに、眠

の少女」がはじまった時、君は右肘で僕の横腹を強く突いて、 よいよその日の呼び物の助手さんたちの二部合唱「オルレアン

「この歌は、花宵先生が作ったんだ。」とひどく興奮の態で囁い

向けに寝て、軽く眼を閉じていたのだが、「オルレアンの少女」

そかに越後の表情を注視した。越後はそれまでベッドの上に仰

パンドラの匣 て、君を送って廊下へ出て、 「たしかだ!」と二人、同時に叫んだ。

をつぶって、ああ、眼をつぶったまま、とても悲しそうに幽かに

たげるようにして耳を澄まし、やがてまたぐったりとなって眼 の合唱がはじまったら眼をひらいて、こころもち枕から頭をも

あの時には、とてもじっとしては居られず握手でもしなければ、

おさまらぬ気持だったものね。君も僕も、ずいぶん興奮してい

た。「オルレアンの少女」が済んだ時、君は、

「じゃあ、失礼しよう。」と奇怪な嗄れた声で言い、僕も首肯い

笑わずに、固く握手を交したっけね。いま思うと、あれはいっ 仕草をして、それから僕に握手を求めた。僕たちは、ちっとも 笑った。君は、右手でこぶしを作って空間を打つような、妙な

たい何のための握手だったのか、わけがわからないけれども、

ŧ, あわてて運動にとりかかった。脚を大の字にひらき、両方

パンドラの匣 をねじ向けた。越後は黙々として屈伸鍛錬をはじめている。 ないようにして、僕はベッドに仰向けに寝ころがったが、不安 と恐怖と焦躁とが奇妙にいりまじった落ちつかない気持で、ど ほとんど蒼ざめるほどの恐怖の状態であった。わざと越後を見 「花宵先生!」と呼びかけてしまった。 返辞が無い。 かなわなくなって、とうとう小さい声で、 僕は、思い切って、ぐいと花宵先生のほうに顔

ひとりで部屋へ引返した時には、僕の気持は興奮を通り越して、

ここまでの事は、君もご存じの筈だが、さて、君とわかれて、

5

パンドラの匣 ほうが気楽だ。」 「どうして、このごろ詩をお書きにならないのですか。」 「時代が変ったよ。」と言って、ふふんと笑った。 胸がつまって僕は、いい加減の事は言えなくなった。しばら

じめて知ったのです。あの友人も僕も、小さい頃から、あなた

「いままで、失礼していました。さっき友人に教えられて、は

「ありがとう。」と真面目に言って、「しかし、いまでは越後の

よいよ、この人が、花宵先生である事は間違い無いと思った。

「作者なんか、忘れられていいものだよ。」と平然と答えた。い

の詩が好きでした。」

うね。」と割に落ちついて尋ねる事が出来た。

の手の指を、小指から順に中へ折り込みながら、

「あの歌を誰が作ったか、なんにも知らずに歌っていたんでしょ

手さんたちが摩擦に来て、僕にいろいろ話かけても、僕は終始 ない。その日一日、僕たちは一ことも言葉を交さなかった。助 ふくれた顔をして、ろくに返辞もしなかった。内心は、マア坊 ものは、こわいものだ。何が失礼に当るか、わかったもんじゃ

らん。-

「そうだ。何も言うな。お前たちには、わからん。何も、わか

実に、まったく、気まずい事になってしまった。詩人という

かく早くあやまるに限る。

「ごめんなさい。もう言いません。」

と、怒り出した。僕は、ぎょっとした。越後が、こんな乱暴な

「人の事なんか気にするな! お前は、ちかごろ、生意気だぞ!」

口調で僕にものを言ったのは、いままで一度も無かった。とに

く二人、黙って運動をつづけた。突如、越後が、

「つくだ煮を少し作って来ましたけど。」

中だった。娘さんは、持って来た大きい風呂敷包をほどきなが

上ったおとなしい娘さんだ。僕たちは、ちょうど朝ごはんの最 ア坊と同じくらいの年恰好で、痩せて、顔色の悪い、眼の吊り さんが、越後を見舞いにやって来た。キヨ子さんといって、マ あっさり和解できて、ほっとした。けさ、久し振りで越後の娘 なのだという事を知らせて、驚ろかしてやりたくて、うずうず

なんかに、お隣りの越後こそ実に「オルレアンの少女」の作者

し、まあ、仕方なく、ゆうべは泣き寝入りの形だったのだ。 していたのだが、越後から「何も言うな」と口どめされている

けれども、けさ、思いがけなく、この激怒せる花宵先生と、

パンドラの匣

下の戸棚から、アルマイトの弁当箱を取り出した。 「これでございますか?」娘さんは、しゃがんで僕のベッドの

がら、ベッドから降りかけたら、

「はあ、いや、」僕は、うろたえて、「そこの戸棚に。」と言いな

「いれものが、ございますかしら。」

娘さんは、僕のところへ、つくだ煮を持って来た。

6

生だの、書生さんだの、小柴君だのというばかりで、ひばりさ

おや? と思った。越後は今まで僕を呼ぶのに、そちらの先

んなんて変に親しげな呼び方をした事は一度も無かったのだ。

さんにも半分あげなさい。」

パンドラの匣

パンドラの匣 になっていたのだ。 「きのう友人が、いい加減に挿して行ったのです。直してくれ

君があの時、竹さんに直してもらえ、なんて要らない事を言っ

と君が滅茶苦茶に投げ入れて行ったあの菊の花をほめたのだ。

「まあ、綺麗。

たので、なんだか竹さんに頼むのも、てれくさくなって、また、 マア坊に頼むのも、わざとらしいし、あの花は、ついあのまま

がら、

「はあ、そうです。すみません。」

ベッドの下にうずくまって、つくだ煮をその弁当箱に移しな

「いま、おあがりになります?」

「いいえ、もう、食事はすみました。」

娘さんは弁当箱をもとの戸棚に収めて立ち上り、

パンドラの匣 下手な事を言って、また、呶鳴られるといけないから、僕は

手際をいかにも、たのしそうに眺めながら、

菊の花をみんな花瓶から抜いて、挿し直しに取りかかった。い

娘さんは顔を赤くして、ためらいながらも枕元に寄って来て、

いひとに直してもらえて、僕はとても嬉しかった。

越後はベッドの上に大きくあぐらを掻いて、

娘さんの活花の

ら、にやにや笑って言った。どうも、けさは機嫌がよすぎて、か

「直しておやり。」越後も食事がすんだらしく爪楊枝を使いなが

娘さんは、ちらと越後の顔色をうかがった。

えって気味が悪い。

るひとも無いし。」

黙っていた。

「もういちど、詩を書くかな。」と呟いた。

パンドラの匣 な身振りのものや、深刻めかしたものは、もう古くて、わかり

ばん読みたいんです。僕にはよくわかりませんけど、たとえば、 さい。先生の詩のように軽くて清潔な詩を、いま、僕たちが一

「書いて下さい。本当に、どうか、僕たちのためにも書いて下

モオツァルトの音楽みたいに、軽快で、そうして気高く澄んで いる芸術を僕たちは、いま、求めているんです。へんに大袈裟

切っているのです。焼跡の隅のわずかな青草でも美しく歌って

めた。

「いいえ、僕こそ、生意気な事を言って。」

実に、思いがけず、あっさりと和解が出来た。

詩を書くかな。」ともう一度、同じ事を繰り返して言っ

「ひばりさん、きのうは失敬。」と言って、ずるそうに首をすく

「また、

パンドラの匣 が気高く澄んでいないのは、みんな、にせものなんです。」 僕は、不得手な理窟を努力して言ってみた。言ってから、て

飛ぶ鳥を見よ、です。主義なんて問題じゃないんです。そんな

れば、この難局を乗り切る事が絶対に出来ないと思います。空

ものでごまかそうたって、駄目です。タッチだけで、そのひと

の純粋度がわかります。問題は、タッチです。音律です。それ

す。いのちも要らず、名も要らずというやつです。そうでなけ

チを持った芸術だけが、いま、ほんもののような気がするので んな僕たちの気持にぴったり逢うような、素早く走る清流のタッ ません。命をおあずけ申しているのです。身軽なものです。そ くれる詩人がいないものでしょうか。現実から逃げようとして

いるのではありません。苦しさは、もうわかり切っているので

「僕たちはもう、なんでも平気でやるつもりです。逃げやし

天の潮路を、のろくさく感じた。

らだになりたいとひそかに焦慮したよ。もったいない事だが、

僕は、この道場へ来てはじめて、その時、ああ早く頑丈なか

を拭いて、仰向けに寝ころがり、「とにかく早くここから出なく

「そんな時代に、なったかなあ。」花宵先生は、タオルで鼻の頭

れくさく思った。言わなければよかったと思った。

ちゃいけない。」

「そうです、そうです。」

に察したらしく、「あせる事はない。落ちついてここで生活して

うに軽くて、しかも白砂の上を浅くさらさら走り流れる小川の 君、あたらしい時代は、たしかに来ている。それは羽衣のよ

持で微笑んだ。

やらないわよ。」ぷんぷん怒っている。

でも、ひどく嬉しそうに、うふうふと笑った。

僕もさっきの不覚の焦燥などは綺麗に忘れ、

ひどく幸福な気

「わが述懐もまた世に容れられずか。」越後はそう言って、それ

父さん! また、愚痴を言ってるのね。いまどき、そんなの、は

で言い、父のベッドに近寄り、こんどは極めて小さい声で、「お

「まえよりかえって、わるくなったようですわ。」と明るい口調

いかけた時に、娘さんがどうやら活花を完成させたらしく、 つ事が出来る。でも、こっちはもう、としをとってるし、」と言 いさえすれば、必ず、なおる。そうして立派に日本再建に役立

パンドラの匣 すべてを失い、すべてを捨てた者の平安こそ、その「かる これも、どんどん古くなって行く。君、理窟も何も無いの

史の流れから除外され、取残されてしまうだろう。ああ、あれ すきとおるほどの身軽な鳥だ。これがわからぬ人は、永遠に歴 その風だ。世界の大混乱の末の窮迫の空気から生れ出た、翼の じて軽薄と違うのである。慾と命を捨てなければ、この心境は 誇らじと欲するも能わずというところだ。この「かるみ」は、断 位の心境に僕たちが、いつのまにやら自然に到達しているとは、 どの名人がその晩年に於いてやっと予感し、憧憬したその最上

わからない。くるしく努力して汗を出し切った後に来る一陣の

ように清冽なものだ。芭蕉がその晩年に「かるみ」というものばれる。

に置いたとか、中学校の福田和尚先生から教わったが、芭蕉ほ を称えて、それを「わび」「さび」「しおり」などのはるか上位

まつげが長くて、ま

ている。マア坊の曰く、

が十年も若返った。竹さんも、マア坊も、 といってもあながち過言ではないようだ。 場を訪問しただけで、この道場の雰囲気が、急に明るくなった

だいいち、

花宵先生

君によろしくと言っ

を挙げさせていただき、前説の補足を試みた次第である。

ついでながら、君の当道場に於ける評判も、はなはだよろし 大いに気をよくして、いただきたい。君がちょっとこの道

娘さんもまた僕たちのひそかな支持者らしいという事に気がつ

いて、大いに自信を得て、さらにここに新しい男としての気焔

べて、それからひどくてれくさい思いをしたが、でも、越後の

越後に向って極めて下手くそな芸術論みたいな事を述

み」だ。

けさ、

パンドラの匣

「いい眼をしているわね。天才みたいね。

1

竹さん

評を御紹介しようか。そんなに固くならずに、平然とお聞き流

の言うことは大袈裟である。信じないほうがいい。竹さんの批

しを願う。竹さんの曰く、

「ひばりとは、

いい取組みや。」

それだけである。 十月二十九日

但し、顔を赤くして言った。以上。

ばたきするたんびに、パチンパチンという音が聞えた。」マア坊

パンドラの匣

「或いはね。」と僕も、わざと嘘を言う。これも、まいどの事だ。

道場へお見えになった。お母さんは、月に二度ずつ僕の身のま

けさは、お母さんが僕の着換えやら、何やらどっさり持って

わりのものを整理しにやって来るのだ。僕の顔をのぞき込んで、

「そろそろ、ホームシックかな?」とからかう。まいどの事だ。

道場場長、田島医学博士その人のところに、お輿入れあそばす だ。どこへお嫁入りするかというと、場長さんだ。ここの健康 けたみたいな、妙な気持のカナしさだ。竹さんがお嫁に行くの

かなしいといっても、恋しいという字にカナしいと振仮名をつ

謹啓。きょうは、かなしいお知らせを致します。もっとも、

のだ。僕はきょうマア坊からその事を聞いた。

まあ、はじめから話そう。

「きょうはお母さんを、小梅橋までお見送りして下さるんだそ

パンドラの匣 玄関へ出ると、そこに場長が両手をうしろに組んで黙って立っ ていた。 「歩けますか、どうですか。」とお母さんがひとりごとのように 「或いはね。」とお母さんは、僕の口真似をして言った。 「いやなもんか。僕はもう一日に十里だって歩けるんだ。」 「さあ、どなたでしょうか。」 「でも、いやだったら、よござんす。」 「僕? 外へ出てもいいの? 四箇月振りで、寝巻を脱ぎ絣の着物を着て、お母さんと一緒に お母さんは首肯いて、 お許しが出たの?」

して言って笑ったら、

うですね。」

「誰が?」

パンドラの匣 すたすた五、六歩いそぎ足で歩いたら、また、うしろで場長が、 「はじめは、ゆっくり。はじめは、ゆっくり。」と、こんどは露

と叱られたような気がして、僕は、しょげた。振り向きもせず、

口調に、愛情よりも、冷く強い意志を感じた。だらしないぞ!

「おっとと、あんよは上手。」と場長は、うしろで囃した。その

ぎまぎしたような粗末なお辞儀をした。お供は、マア坊だ。

僕は新しい駒下駄をはいて、まっさきに外へ出た。駒下駄が

へんに重くて、よろめいた。

羽織をひっかけて、小走りに走って出て来て、お母さんに、ど

事務所からマア坊が白い看護婦服の上に、椿の花模様の赤い

りお供させます。」

は、にこりともせず、そんな下手な冗談を言って、「助手をひと

「男のお子さんは、満一歳から立って歩けます。」と場長さん

は、

「無理かな?」お母さんは笑いながら、「どうかな?

お見送り

このつぎに、お願いするとしましょうか?」

き合いながら、僕の後を追って来た。松林を通り抜けて、アス 言葉のほうに、うれしい愛情が感ぜられた。 僕は、ゆっくり歩いた。お母さんとマア坊が、小声で何か囁

骨に叱り飛ばすようなきびしい口調で言ったが、かえってその

日ざしを受けて鈍く光っているだけなのだが、僕には、それが ファルトの県道へ出たら、僕は軽い眩暈を感じて、立ちどまっ 「大きいね。道が大きい。」アスファルト道が、やわらかい秋の 茫洋混沌たる大河のように見えたのだ。

2

パンドラの匣 は実に意外な事を聞いた。お母さんと、マア坊が、歩きながら はしゃいでいる。 ゆっくり歩いて、小梅橋のバスの停留場が近くなった頃、

よもやまの話の末に、

真似をしてからかった。

て歩いて、「もう馴れた。」と言った途端に、トラックが、凄じ

「平気、平気。」ことさらに駒下駄の音をカタカタと高く響かせ

い勢いで僕を追い抜き、思わず僕は、わぁっ! と叫んだ。

「大きいね。トラックが大きいね。」とお母さんはすぐに僕の口

「大きくはないけど、強いんだ。すごい馬力だ。たしかに十万

馬力くらいだった。」

「さては、いまのは原子トラックかな?」お母さんも、けさは、

パンドラの匣 たく、かなわない気持のものだ。 トコトと響を立てて躍っているみたいな按配で、あれは、まっ きり思い出せない。ただ眼のさきが、もやもやして、心臓がコ 僕は停留場で、どんな具合いにお母さんとお別れしたか、はっ

突っ込んだ事も聞かず、おだやかに他の話に移って行った。 眼がお高くていらっしゃる。」と言って、明るく笑い、それ以上。

「竹中さんは、いいお方ですものねえ。場長さんはさすがに、

ラックに突き倒されたほどの衝動を受けた。

お母さんのほうはすぐ落ちついて、

たようであったが、僕はその百倍も驚いた。十万馬力の原子ト 「竹中さんと? あの、助手さんの。」と、お母さんも驚いてい

「はあ、あの、竹中さんと、もうすぐ。」

「場長さんが近く御結婚なさるとか、聞きましたけど?」

竹さんに対して全く無関心になりたくて、われとわが心を、は らだが重くなって、翼が萎縮し、それこそ豚のしっぽみたいな、 は、新しい男の面目にかけても、あっさりと気持を整理して、 つまらない男になりそうな気がするので、なんとかして、ここ

具合いに書くことに依って僕は、僕の胸の思いを消したかった 書いたが、あれは決して、君をだますつもりではなく、あんな はマア坊の美点ばかりを数え挙げて、竹さんの悪口をたくさん のだが、どうしても駄目なんだ。君に差し上げる手紙にも、僕 ほうに近寄って行って、マア坊を好きになるように努めて来た

のだ。さすがの新しい男も、竹さんの事を思うと、どうも、か

なんとかして竹さんを忘れようと思って、ことさらにマア坊の きだったのだ。マア坊なんて、問題じゃなかったのだ。僕は、

僕は白状する。僕は、竹さんを好きなのだ。はじめから、好

もいうべき、全くあさましい有様だったのだ。 は色気が無いどころか、大ありだった。それこそ意馬心猿とでは色気が無いどころか、大ありだった。それこそ意馬心猿と

だ、というのが、これまでのいきさつの、あわれな実相だ。僕 女の交友だのといって、何とかして君を牽制しようとたくらん をほめ挙げ、そうして、色気無しの親愛の情だの、新しい型の男 さ。そこで、こんどは、僕は戦法をかえて、ことさらに竹さん た僕の苦衷のほどを、君、すこしは察してくれ給え。そうして、 大鯛だの、買い物が下手くそだのと、さんざん悪口を言って来ホホルビ げまし、はげまし、竹さんの事をただ気がいいばかりの人だの、

君も僕に賛成して一緒に竹さんの悪口を言ってくれたら、ある いは僕も竹さんを本当にいやになって、身軽になれるかも知れ

が竹さんに夢中になってしまったので、いよいよ僕は窮したの ぬとひそかに期待していたのだけれども、あてがはずれて、君

あれは、僕だからこそ踏み堪える事が出来たのだ。他の人だっ

底に、ひっそりしゃがんで床板を拭いていた時の竹さんは、お 青い電球にぼんやり照らされ、夜明け直前の奇妙な気配の闇の

君、竹さんみたいなのが本当の美人なのだ。あの、洗面所の

そろしいくらい美しかった。負け惜しみを言うわけではないが、

見てそう思った。

美人だと思っていたのさ。この道場へ来た日に、僕は、ひとめ

てそれを打ち消したが、それは僕だって、竹さんを凄いほどの

君は竹さんを、凄いほどの美人だと言って、僕はやっきとなっ

3

パンドラの匣

たら、必ずあの場合、何か罪を犯したに違いない。女は魔物だ

休ませてもらう家があるんですけど。」 大戦の前には三好野か何かしていたような形の家に、マア坊

がらおやと思ったほど嗄れていて、誰か他の人が遠方で呟いて

「どこかで、少し休みたいな。」と言ったが、その声は、自分な

いる言葉のような感じがした。

「お疲れでしょう。もう少し行くと、あたしたちが時々寄って

うな気持で歩いて、たまらなく水が飲みたくなって、

お母さんとわかれて、それから、膝頭が、がくがく震えるよ

今こそ僕は告白する。僕は竹さんに、恋していたのだ。古い

も新しいもありゃしない。

があるのかも知れない。

ずに一時、人間性を失い、魔性のものになってしまっている事

なんて、かっぽれなんかよく言っているが、或いは女は意識せ

パンドラの匣

パンドラの匣

「そうよ。」マア坊もこのごろ、なぜだか淋しそうだ。寒そうに

う、マア坊は平気で奥の方へ行き、番茶の土瓶とお茶碗を持っ

たちが外出した時には、油を売る場所になっているのでもあろ

人で生ぬるい番茶を飲んだ。ほっと深い溜息をついて、少し気 て来た。僕たちは鏡の下のテーブルに向い合って席をとり、二 く光っているのが印象深かった。この家は商売をよしても、や テーブルの傍の壁には大きい鏡がかけられ、へんに気味悪く白 ブルがひとつ、椅子が二、三脚置かれている。そうして、その 炭俵のようなものがころがっていて、その一隅に、粗末なテー の案内ではいった。薄暗い広い土間には、こわれた自転車やら、

はり馴染の人たちには、お茶ぐらい出す様子で、道場の助手さん

「竹さんが結婚するんだって?」と軽い口調で言う事が出来た。

持も楽になり、

パンドラの匣 うな事を言うな。いやらしくって仕様がない。竹さんが結婚す るのは、いい事だ。めでたいじゃないか。」 しが言ったじゃないの。竹さんと仲よくしちゃいけないって。」 「仲よくなんか、しやしないよ。そんなに何でも心得ているよ

らしくて、いやらしくて、むかむか腹が立って来た。「いい加減

「何を言っていやがる。」マア坊の、しんみりした口調が、いや

「わかるわ。竹さんだって泣いてたわ。」

な事を言っちゃ、いけない。」

「いい加減じゃないわ。」マア坊も涙ぐんでいる。「だから、あた

じゃ、なかったの?」

しまった。

肩を小さくすぼめて、僕の顔をまっすぐに見ながら、「ご存じ

「知らなかった。」不意に眼が熱くなって、困って、うつむいて

「ひばりは、全く、のんきな人ねえ。」と指先で頬の涙を拭きな

ようには思えなかった。

か。」繰返して言ったその僕の言葉も、あまり意味のあるものの られたら困ると思った。「なんの意味もありゃしないじゃない

「よせよ。意味が無いじゃないか。」こんなところを、ひとに見

らぽろぽろ頬を伝って流れはじめた。「知ってるのよ。知ってる だめよ。」大きい眼から涙があふれて、まつげに溜って、それか

「だめよ。あたしは、知っているんですから。ごまかしたって、

パンドラの匣 疎開して来ているんだって。そうして竹さんのお父さんから、ヒャット 方だわ。竹さんには何も言わないで、竹さんのお父さんのとこ わ。お嫁に行くのは、いやだって。」 こないだ竹さんに話があって、竹さんは二晩も三晩も泣いてた ろにお願いにあがったのよ。竹さんのお父さんはいまこっちへ 「いや、そんな事はないが、」僕は口ごもって、「前から、何か、 「あらいやだ。そんな事は無いのよ。 「何が、下品なの? 結婚って、下品なものなの?」 場長さんは、まじめなお

「そんならいい。」僕は、せいせいした。

みんなをぽかぽか殴ってやりたくなって来た。

「そんな下品な事は知らん。」急に、ひどく不愉快になって来た。

んとの事をご存じじゃなかったなんて。」

パンドラの匣 「ええ。」 小さく首肯いて、顔を挙げた。その顔が、よかった。断然、よ

「それじゃ出ようか。」

りと、不思議な断り方で断った。

「いいえ。」とマア坊は眼を伏せて気弱そうに、しかも、きっぱ

「お茶を、ついであげようか。」とてれかくしに言ってみた。

なって来て、手をひっこめて、

握りかえした。意味のない握手だった。僕はすぐに馬鹿らしく 当よ。」と言って、更に強く握りしめた。僕も、わけがわからず く握った。「竹さんはね、ひばりが恋しくって泣いたのよ、本 き活きして来て、右腕をすっと前に出し、卓の上の僕の手を固 は。」と笑いながら言って、顔を横に傾けて、眼の光りが妙に活

「どうしていいの? 泣いたからいいの? いやねえ、ひばり

「永遠の処女」なんてハイカラな言葉を野暮な僕が使うと、或

葉のように感ぜられた。

の言葉も、その時には、

ちっとも気障ではなく、実に新鮮な言

女」という言葉を思い出したが、ふだん気障だと思っていたそ

に軽く天の潮路のままに進むのだ。幽かな「希望」の風が、

あたらしい美しさを顕現できるような女になったのだ。こ

僕たちの仲間だ。新造の大きな船に身をゆだねて、無心

マア坊も苦しみ抜いて、はじめて、すきとおるほど無慾

を撫でる。

僕はその時、

、マア坊の顔の美しさに驚き「永遠の処

ある。

の気品は、何もかも綺麗にあきらめて捨てた人に特有のもので

こころもち蒼ざめた顔には、すごい位の気品があっ

が出来ていて、受け口が少しあいて、大きい眼は冷く深く澄ん

かった。完全の無表情で鼻の両側に疲れたような幽かな細い皺

パンドラの匣

ちは、その三好野ふうの家の前に立ってそれを見上げて、

僕た

パンドラの匣 晩秋の澄んだ青空をアメリカの飛行機が旋回している。

5

たという爽快な満足感だけが残った。

覗いたみたいに小さくなってしまった感じであった。。

のこだわるところもなくなった。これでもう僕も、

完成せられ 胸中に何 だが軽くなった。あきらめるとか何とか、そんな意志的なもの

、遠い昔の事のように思われて、すっとから

マア坊の気高い顔で救われたのだ。

竹さんの結婚も、

いは君に笑われるかも知れないが、本当に僕は、あの時、

あの

ではなくて、眼前の風景がみるみる遠のいて望遠鏡をさかさに

パンドラの匣 皆一様に、マア坊みたいな無慾な、透明の美しさがあらわれて

ち注意して見て、程度の差はあるが、いまの女のひとの顔には

二人だまって歩いて、僕は、途で逢う女のひとの顔をいちい

な姿態に就いてのひそかな感懐でもあったのだ。

だな飾りが一つも無いからだろうか。」

「しかし、飛行機というものの形には、新しい美しさがある。む

「ええ。」とマア坊は微笑む。

「つまらなそうに飛んでいるねえ。」

「そうねえ。」とマア坊は小声で言って、子供のように無心に空

の飛行機を見送っている。

「むだな飾りの無い姿って、いいものなんだねえ。」

それは、飛行機だけでなく、マア坊の放心状態みたいな素直

いるように思われた。女が、女らしくなったのだ。しかしそれ

パンドラの匣 ああ、場長夫人!

すぐに、はね起き、

いる。

た。

「ひばり、ごはんや。」

眼を薄くあけて見ると、竹さんがお膳を持って笑って立って

羽織も脱がずにベッドに寝ころがって、そのまま、うとうと眠っ から、さすがに疲れて、寝巻に着換えるのもめんどうくさくて、 を通過した新しい「女らしさ」だ。何といったらいいのか、鶯

は、大戦以前の女にかえったというわけでは無い。戦争の苦悩

の笹鳴きみたいな美しさだ、とでもいったら君はわかってくれ

るであろうか。つまり、「かるみ」さ。

お昼すこし前に道場へ帰って来たが、往復半里以上も歩いた

と一瞬そんな気がして嬉しかったが、しかし、そうではなかっ 来たのも夢、マア坊があの三好野みたいな家で泣いたのも夢、

竹さんだ。場長と結婚するなんて、嘘みたいに思われて来た。

僕はベッドから降りて兵古帯をほどいた。いつものとおりの

さしてあげる。」

ら寝巻を取り出し、「世話の焼けるぼんぼんや。おいで、着換え

え。」眉をひそめて不機嫌そうに言いながら、ベッドの引出しか

いま風邪ひいたら一大事や。早うお寝巻に着換えたらえ

て、お膳を枕元に置き、「着物、着たまま寝ている人があるか 「寝ぼけているな。寝ぼすけさん。」とひとりごとのように言っ

「や、すみません。」と言って、思わず軽く頭を下げた。

なあんだ、僕はいまうとうと眠って夢を見たのだ。お母さんが

パンドラの匣

6

ばって痛さを堪えた。

け根のところを、ぎゅっとかなり強く抓った。僕は歯を食いし

てくれて、それから、寝巻の袖口から手を入れて、僕の腕の附っ

竹さんは返辞をしなかった。黙って、うしろから寝巻をかけ

緒にオバさんとこでお茶を飲んだってな。」

「竹さん、おめでとう。」と僕が言った。

やはり、夢ではなかった。

には、とてもよく似合うわよ。マア坊は果報やなあ。帰りに一 「いい久留米絣やな。」竹さんは僕に着物を脱がせて、「ひばり

何事も無かったように寝巻に着換えて、僕は食事に取りかか

パンドラの匣 い声で、 ような気がした。 を真似てそっと呟いた。 うな気がした。 「ひどいやつや。」と僕は、食事をしながら竹さんの言葉の訛り 「かんにんね。」と囁いた。 「おおきに。」と言った。 竹さんはくすくす笑い出して、 そうしてこの一言にも、僕のいっさいの思いがこもっている その一言に、竹さんの、いっさいの思いがこめられてあるよ

和解が出来たのである。僕は竹さんの幸福を、しんから祈り

り、竹さんは傍で僕の絣の着物を畳んでいる。お互いに一こと

ものを言わなかった。しばらくして竹さんが、極めて小さ

パンドラの匣 すよ。もう越後獅子なんて失礼な綽名では呼べなくなった。君 大月先生の当道場に於けるこのごろの人気はたいへんなもので るか、わかりますか? およろこび下さい。大月花宵先生です。 ているのだが、きょうの講話は、どなたが放送していらっしゃ

囲の人たちは、皆こんなにさっぱりした、いい人ばかりなのだ にしまい込み、澄まして部屋から出て行った。どうして僕の周

いま僕はこの手紙を、午後一時の講話を聞きながら書い

竹さんは大袈裟に身震いして、畳んだ着物をさっさと引出し

「おお、いやらし!」 「送別会でもしようか。」 たい気持になった。

「今月一ぱい。」

「いつまでここにいるの?」

パンドラの匣 得意だ。花宵先生の一番弟子のつもりで、もっともらしい顔を して、よそのひとの苦心の作品を勝手にどんどん直している。

ぱり寡言家の越後獅子であって、塾生たちの詩歌の添削は、た り返るとか何とか、そんな浅墓な素振りは微塵も示さず、やっ 削依頼が殺到している有様だ。けれども花宵先生は、急に威張

いていかっぽれに一任しているのだ。かっぽれ、このところ大

らいだ。

ままで知らずに失礼しました、という意味のおわびを言ったく 条件に尊敬せられ、場長も巡回の時に、花宵先生に向って、い

新館はもちろん、旧館の塾生たちからも、詩、和歌、

とひろがり、何せ「オルレアンの少女」の作者だという事で無

が発見して、それから、二、三日は僕も我慢して誰にも言わずに

いたが、とうとうマア坊にこっそり教えて、たちまち噂がぱっ

パンドラの匣

である。鍬とる者は、鍬とった野良姿のままで、献身すべきだ。

のみ不滅である。しかし献身には、何の身支度も要らない。今

日ただいま、このままの姿で、いっさいを捧げたてまつるべき

は

決してない。大違いである。献身とは、わが身を、最も華や 献身とは、ただ、やたらに絶望的な感傷でわが身を殺す事で

に永遠に生かす事である。人間は、この純粋の献身に依って

厳のある声である。花宵先生は、僕が考えているよりも、もっ

ているようなき厳粛な気持になって来る。実に落ちついた、威

して流れ出る声を聞いていると、非常に貴い人から教え訓され

とはるかに偉い人なのかも知れない。お話の内容も、さすがに

いい。すこしも古くないのである。

きょうは事務所からの依頼で花宵先生がはじめて講話をする事

になって、「献身」と題するお話であるが、こうして拡声機を通

パンドラの匣 この道は、どこへつづいているのか。それは、伸びて行く植物 くもなく、極めてあたりまえの歩調でまっすぐに歩いて行こう。 行ったじゃないか。あとはもう何も言わず、早くもなく、おそ

う、僕と同じくらいに明るくなっている。全くこれまで、僕た

の看板は、この辺で、いさぎよく撤回しよう。僕の周囲は、も にこだわっていたところが、あったように思われる。新しい男

ちの現れるところ、つねに、ひとりでに明るく華やかになって

少し宣伝しすぎたようだ。献身の身支度に凝り過ぎた。お化粧 度も赤面した。僕は今まで、自分を新しい男だ新しい男だと、 事である、と力強く、諄々と説いている。聞きながら僕は、何 見事に献身すべきやなどと、工夫をこらすのは、最も無意味な ない。人間の時々刻々が、献身でなければならぬ。いかにして 自分の姿を、いつわってはいけない。献身には猶予がゆるされ パンドラの匣

「痲痺」 痲痺」

は底本では「痳痺」 は底本では

「痳痺」

後註

るようです。」

さようなら。 十二月九日

の蔓に聞いたほうがよい。蔓は答えるだろう。

「私はなんにも知りません。しかし、伸びて行く方向に陽が当



底本:「パンドラの匣」新潮文庫、新潮社 1973 (昭和 48) 年 10 月 30 日発行

1997 (平成 9) 年 12 月 20 日 46 刷 初出:「河北新報」河北新報社

にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

1945 (昭和 20) 年 10 月 22 日~1946 (昭和 21) 年 1 月 7 日 入力:SAME SIDE

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作

校正:細渕紀子 2003 年 1 月 27 日作成

2006年5月20日修正 青空文庫作成ファイル: